
ふらりと歩いて幻想入り

北田 龍一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ふらりと歩いて幻想入り

【Nコード】

N4243U

【作者名】

北田 龍一

【あらすじ】

運悪く寝坊し、妖怪の山の哨戒任務にあたる羽目になった射命丸文は、迷い込んだ人間を見つける。見た目はこちらの住人と大差ない彼は……どうやら外来人らしい。主人公転生、無双系ではありません。ただ、幻想郷に迷い込んだだけの、のんきな絵描きのお話です

はじめに——この小説の読み方、楽しみ方——（前書き）

初めまして？　でいいのでしょうか？　作者です。

このページは、この小説の取り扱い説明書的なものです。さっさと本編読みてえ！　という方は次へを押してください。さっさと支障はありません。

ぶっちゃけ、蛇足的な部分が強いです。自己満かもしれないです。でも、やっぱり、せっかく小説を掲載しているわけですから、どうせならよりよく楽しんでいただきたい訳でして——そう思って、このページを作成しました。

では、前置きはこれぐらいにして、さっさと説明を始めましょうか

追記…ちよつと追加項目あるよ☆

はじめに——この小説の読み方、楽しみ方——

この度は、『ふらりと歩いて幻想入り』をクリックしてくださり、誠にありがとうございます。

本作品では、キャラ崩壊、独自設定、独自解釈などがございます。二次創作ではよくあることではありますが、あなたのお気に入りのキャラが、壊れてる可能性もございますので注意してください。

さて、本作品の傾向ですが、文章はやや硬めに作るように心がけています。そして、この作者は伏線を張るのが大好きです。小さなものから、重大なものまで、ガンガン伏線を張ります。伏線の大きさも大小様々。まずは軽く流し読みし、そのあともう一度読み直すと、より楽しめるかと。もちろん、初めから意識して読んでくださるの也有りです。その辺りは、皆さまが読みやすいように、読みたいうように読んで下さい。ただ、伏線系統や後のネタばれに触れるような感想は、控えて頂けると幸いです。

……と書きましたが、そんなこと言ったら感想なんて書けねーよ！ と、友人から言われましたので、オッケーにします。ですから、初めて読む人は感想から見ないでくださいね！

（まあ、初めから感想ページ行く人は少ないとは思いますが……念のためです）

さて……最後に重大なことをお話しましょう。

この小説には、「とある裏設定」がございます。

しかしこの設定は、本作品で明かされることはありません。

ですが、所々にその糸口が存在しています。それとなく「裏設定」を暗示する文章が、点々と。

こいつを見破るのは、かなり難しいと思います。そのものズバリを当てることは厳しいでしょう。

……じゃあ、なんでこんなことをばらしたのか？

フフフ……そう、こいつは作者からの挑戦状っ！！

無理難題っ！！ 理不尽っ！！ 不可能っ！！

それに挑んでみないかという……挑戦状っ！！

とまあ、某麻雀マンガや、博徒マンガみたいなノリは置いといて、折角そんな設定をこっそり作ったんだから、こういう形でカミングアウトしたら、楽しみとして使えるのではないか？ と思った次第にございます。後付け設定ではありませんよ？ 一番初めの文章をおこした時から、この設定は頭にありました。

しかし、このままだとフェアじゃない……なので、これに挑むという勇者のあなた！ そんなあなたに三つのヒントを差し上げましょう！！

一つ目……この設定の影響力は、「強い」ということ。

二つ目……常識的なものから、「大きくかけ離れている」ということ。

三つ目……この設定が適応されているのは、「一人だけではない」ということ。

さあ……難題に……挑め……！！

あ、でも感想に答えを書くのは……そうですね、「十話びったりの区切りごとに一人一回。次の話が投稿されるまで」としましょう。なので、次の解答コーナーは、第三十話が投稿されてから、次の話が投稿されるまでの間とします。これを逃すと、四十話まで待たないといけません。

また、解答の代わりに「YESかNOかで答えられる質問」をしてもOKです。その場合、解答権は失われるので注意してください。サブアカウントとかズルイことをする読者はいないと、作者は信じてるよ！　よ！

はじめに——この小説の読み方、楽しみ方——（後書き）

注意書きと挑戦状が合体した、全く新しい小説の開幕。

萃香が出るか神奈子様が出るか……さあ、サイコロはぶん投げられたっ!!!

そんなことより、小説読もうZE? 冒険したい御年頃……は過ぎたけど、たまには無謀もいいよね! 新しいことをやってみたいのSA!

一話 迷い込んだ絵師（前書き）

はじめまして！

あるいはまたお会いしましたねでしょうか？ 作者です

二次創作初の投稿になります。

原作は紅魔郷しかやったことがありません。足りない知識は他の二次創作作品や、wikiで補完しています

こんな小説だが、大丈夫か？

大丈夫だ、問題ないという方は、ゆっくりよんでいてね！！

追記…現在は、ほぼ全作品購入していますw

一話 迷い込んだ絵師

「あやややや……今日はやらかしてしました……」

妖怪の山の中腹で、射命丸 文 はぼやいていた。

鴉天狗であり、記者でもある彼女は、日々話題を探して幻想郷中を駆け回っているのだが……今朝は寝坊してしまい、目を覚ました時はもうかなり太陽が高い位置にきてしまっていたのである。朝からげんなりとしつつ、空をふわふわと飛んでいると、たまたま哨戒任務中の犬走 椋に見つかってしまい、

「たまには手伝ってください!!」

と言われてしまい、渋々妖怪の山を一日中見回るハメになったのだ。

「これはなかなか……苦痛ですねぇ……」

何せ、当たり一面似たような景色が続くのだ、文は迷うことなどありはしないが、代り映えのしない景色を見ながら、永遠と飛びつつける作業は精神にそれなりに負担をかける。幻想郷を所狭しと駆け巡るのが日課の彼女にとっては、ますますつらいことだった。

だが、それももうすぐ終わる。日は傾き、夕焼けが山岳部を包み始めていた。

「今日は厄日でしたねえ……何かネタを取り逃していなければいいのですが」

ぼそぼそと呟きながら、何気なく視線を下に向けると……そこには人影があった。

「あやや？ おかしいですねえ……」

この山には守矢神社という場所があり、そこに参拝にくる人間はいるため、人がいること自体は珍しくはない。しかし、この場所は守矢神社からはかけ離れている。道に迷ったのだろうか？

「ネタになるかは微妙ですが……まあ、何もないよりはマシですかね」

ゆつくりと、彼女は人影の背後から降下する。近づくにつれ、その輪郭がはっきりしてきた。

体つきからしておそらく男性。肌は若々しく張りがあり、短く切りそろえられた髪に、青い作務衣を着ている。横には、確か河童が愛用していた「リュック」と呼ばれていたものが置かれており、肝心の彼は、座り込んで何かを書いているようだ。少々珍しいといえそうですが、異常というほどではない彼の容姿に、内心文はがっかりしながらも……任務を引き受けている身のため、彼に声をかけようと近づいていく。彼は夢中になっているのか、すぐ後ろまで来たのに気が付いていない。

「あのくもしもし？　ここで何をしているのですか？」

「え……？」

話しかけると、彼は間抜けな声を一つ発し、熱心に動かしていた指の動きを止める。

「す、すいません。気がつきませんでした。絵を描いていたのですが……私有地でしたか？」

そういうと、彼は今まで描いていた物を文に見せる。どうやら、妖怪の山の一部を描いていたらしい。

「あやや……これはなかなか見事なものですね」

彼女が素直に感想を言えるほど、その絵の完成度は高かった。黒系統の色のみで描かれたものにも関わらず——いや、だからこそだろうか——見た者に静かな印象を与え、それでいながら味わい深い。「これでも途中ですよ。えっと……早めに立ち去った方がいいですかね？」

「あ、はい。そうですね。もうすぐ夜になりますし、人里に帰った方がいいでしょう」

「わかりました。荒く仕上げちゃいますね」

言うや否や、彼は素早く作業に取り掛かる。先端の尖った六角形の棒をいくつも取りだし。先ほどの絵にいくつもの線が書き込まれていった。その様子を文は半ば茫然としながら眺めていると……不

意に彼が首を傾げた。

「あの、度々すいません。人里って……どこですか？」

「え？」

声だけのやり取りが続く。だが、今の発言の意図はよくわからない。

「どこって……人里は人里ですよ？」

そう、人里の存在は妖怪にしろ、人間にしろ、この世界の常識である。

「おかしいな？　こっち方面には、人なんていなかったはずなんだけど……そういえば、山の雰囲気も普段と違うような気がする。もしかして迷った？　でも小屋から2キロも離れてないはずだし……どうということだろう？」

ぶつぶつと呟きながら、青年は首を捻る。どうも、彼は納得してないらしい。聞きなれない単語もあったが、話の内容からして、それほど遠出したつもりではなかったのだろう。

「この付近に小屋などありませんよ？　勘違いではありませんか？」

「そんなはずは……あれ？　君、背中 of それは……？」

彼が反論しようとして、不意に文に問いかける。今まで気がついていなかったのか、ひどく驚いている様子だ。

「見ての通り羽ですよ？　妖怪の山では、鴉天狗など特に珍しくもないとは思いますが？」

「よ、妖怪の山？　鴉……天狗……？　え、ええっと……ごめん。少し状況を整理してもいいかな？　君が嘘を言っていないのはわかるんだけど……」

大したことを言ったつもりもないのに、彼はひどく混乱している様子だった。それを見てようやく、文は何かがおかしいことに気がつく。

微妙に噛み合わない会話、通じない常識、聞きなれない単語に、珍しい道具。

服装がこちらの住人と大して変わらなかったせいで、彼女はその

可能性を考えることができなくなっていた。

文は、予想を確信に変えるために、ある質問を投げかける。

「あの……あなた、『幻想郷』という地名を知っていますか？」

「……初耳です。この辺りをそう呼ぶんですかね？」

今の回答で、ほぼ確定だ。彼は、幻想郷の外から来た人間——俗に言う「外来人」だろう。これはネタにするには十分だ。最後の最後で、幸運がめぐってきたらしい。

「まあ、間違っではいませんが……いやはや、私も記者として鈍りましたかね？ 大雑把に言いますと、今あなたがいるこの場所は、あなたのいた世界から隔離された世界なのですよ」

彼の目が大きく見開かれる。しばし何か考え込むような動作の後。再び独りごとを言い始めた。

「隔離された世界？ そうか……だから空気が違って、方向感覚もちよっとおかしくなっていたのか……この子が不自然に見えたのも、人間として見てたからで——」

てっきり頭ごなしに否定されるかとも思っていたのだが、どうも彼は今の状態を受け入れるつもりらしい。そのことについて、射命丸は質問した。

「あやや？ 疑わないのですか？ 外の世界の人間にとって、私たちのような存在は受け入れがたいものというのを聞いているのですか」

彼以外にも、文は何人か外来人に遭遇したことはある。けれども、ほとんどの外来人は、「そんな話信じられない」の1点張りで、立ち去られてしまうことがほとんどだ。そして、翌日ぐらいには妖怪に喰われてしまっている。

「うーん。なんて言えばいいのかな？ 確かに向こうの世界ではそうなんだけど……僕は、小さいころから絵を描き続けていたんだけど、そうしている内に、そこにあるモノが、自然か不自然かを見分けられるようになって……何が言いたいかというと、嘘をつくなら、どこかしら不自然な動作があるはずだけど、君にはそれが全く

ないんだよね。他にも、「人間」として君を見ると不自然に見えるんだけど、「妖怪」として見るとしっくりくる。他のモノも色々分別して見ると、君の言っていることの裏付けになってる。だから……」

「つまり、あなたは『自然か不自然かを見分ける程度の能力』を持っていて、能力によって得られた情報が、私の言っていることと合致すると、そういうことですね？」

長々しい青年の説明を遮って、文は彼の言葉を要約する。しばしの沈黙の後、彼はこくりとうなずいた。

「なるほど……ということはあなたは今晚宿なしですね」

目を輝かせながら、文はいう。このまま彼に宿を提供すると申し出て、たつぷりと取材をするつもりだったのだが……男の返答は意外なものだった。

「もう慣れっことですよ。実は僕、1週間ぐらいなら外でも出歩けるような装備を持ち歩きながら、絵を描いて回っているんです。でもここは私有地でしたっけ？ どっちにしろ下山しなきゃだめか……」

「あやや！？ これは意外……でも外はいろいろ危険ですし、私の家で良ければ泊めて差し上げますよ？」

「そうかもしれないませんが、初対面の人のお世話になるのもちよつと……あなたにも迷惑がかかりますし、外で泊まりますから大丈夫ですよ」

気持ちだけ、受け取っておきますといい、彼は妖怪の山を降りる方向へと向かっていく。

（本当に、危ないんだけどなあ……）

やんわりと断られた手前、無理に押すのもよろしくない。後々の取材に応じてもらえなくなるかもしれないからである。しかし、彼のが心配なのも本心だった。

夜は妖怪の時間だ。彼が襲われなければいいのだが……

（まあ、これで食べられてしまうような方なら、記事にする価値もないですかね？）

不吉なことを考えながらも……もし無事に再開できたら、今度こそ彼を取材しようと文は思い、とりあえずは手元にある情報をまとめてから、彼女もその場を後にした。

一話 迷い込んだ絵師（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございますm（m
感想、アドバイスなど、どしどしお願いします。何分初めてですの
で……

二話 夜雀との遭遇（前書き）

今回でやっと、主人公の名前が出ます。

二話 夜雀との遭遇

その日の夜、人里から少し離れた雑木林では……

「~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~」

ひどく美しく、それでいて妖しく——まるで人を惑わすような——そんな歌声が、辺りに響いていた。

夜は妖怪が活発に動き、人里の人間はうかつに外に出ないように言い聞かされ、ましてや歌声や気配を感じたら、すぐに逃げるようにするのが基本中の基本だ。そうでもしないと、よほどの実力者でもない限り命がいくつあっても足りない。

だが、今宵は……歌声の主へと向かっていく人影があった。

宵闇の中心にいる歌姫は、誰かが近づいてくる気配を察知し、内心ほくそ笑む。最近有名になってしまったせいかな、全然人間が引っ掛からなくなってしまっていた。それだけに、久々の獲物を逃したくはない。

「——……」

無事に自分の元へ、その男はやってきてくれた。なかなか若く、程よく肉のついた身体つきの持ち主である。彼女……「ミスティア・ローレライ」は、罠にかかった獲物をそう値踏みした。しかし、彼に襲いかかる前に、彼女にはやっておかなければならないことがある。

「~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~♪~~~~」

それは、自分の歌を綺麗に終わらせておくことだ。人を襲うために歌っているとはいえ、途中で歌うことを中断して、襲いかかるということをしたくはない。自分でも少しおかしなことのようにも思えたが、彼女は自分の歌に自身を持っていた。それゆえの行動である。

月明かりの下ミスティアは歌い、青年はその光景を眺める。やがて彼女が歌い終わると、控え目に拍手が聞こえてきた。

「……すごくいい声だね。あ、ごめん、つい誘われてきちゃって……迷惑だったかな？」

落ち着いた声色だが、彼の頬は少しばかり赤い。高揚しているようだが、ミステリアに気を使っているのか、それを隠しているようだ。

「ううん。全然」

彼女にとっては、歌で自分の元に迷いこませるのが目的なのだから迷惑なはずがない。

彼は言葉を続ける。

「そっか……あの、よければアンコールしてもいいかな？ 聞こえ始めたのが途中からだったからさ。ちゃんと始めから最後まで聞きたいんだ」

「あなた、ずいぶん物好きね。私みたいな妖怪の歌を聞きに来るなんて」

表情を隠して、ちよつといじわるなことを言ってみる。本当はとも気分がいいが、そこで素直になれないのは妖怪の性だろう。

ところが、彼の反応は少々意外なものだった。顎に手を添えて、考え込むような動作と共に、

「妖怪？ 君は何を……？ あ、ほんとだ、人間じゃない。あの天狗の子が言ってた『危ない』って、こういうことだったのか」
などと口にする。

「気がついてなかったの？」

彼女は静かに身構える。もしここで彼が逃げ出そうものなら全力で追わなければならない。

「うん。全くもって。まだ元の世界の感覚が抜けないなあ……そんな警戒しないでよ。逃げたりしないからさ」

「それはなんで？」

「だって、君は妖怪なんだよね？ それなら、ただの人間の僕が逃げられる訳がないよ。歌もきけなくなるし……あ、ついでに君の絵も描いていいかな？」

「別にいいけど……自分の言ってることわかってるの？ 私の歌を聴いて、絵を描いたそのあとは、私に食べられてしまうのよ。死ぬのが怖くないの？」

言っていることはわからなくもない。確かに普通の人間と妖怪となら、妖怪が勝つのが当たり前のことである。だからといって、自分が生きることが諦められるかとは別の話だ。彼が怯えて、逃げてそれをミスティアが追いかけて、彼を食べる。そういう展開になるだろうと思っただけに、青年の言葉は信じがたいものだった。

けれども彼は――

「恐いというより、ちょっと残念かな。もう絵を描けなくなってしまうからね。でも……死ぬ前に綺麗な歌を聴いて、その歌手の絵を描いた後食べられて死ぬ――うん。悪くない。あの時自殺していたかもしれないことを考えれば――ずいぶんマシな最後だよ」

何か満たされているような……悲壮感など全く感じさせない声色で、その顔に微笑さえ浮かべて答えた。

（この人間……ちょっとすごいかも）

素直に、ミスティアはそう思った。以前異変の際に戦った巫女や、白黒魔法使いもすごいと思っていたが、彼のそれは別の強さのように感じられる。少しばかり、食べてしまうのがもったいないような気もしたが、それよりも先に……

「わかったわ。ちゃんと聴いててね」

まずは、歌を歌おう。彼のことはそれからだ――

微かに湧いた気持ちを胸にしまい込み、近くの切り株へと降り立つ。今宵の、彼女だけのオンステージ。

「少し待って……よし、こっちも描く準備ができたよ」

青年も手荷物のなかから、ミスティアを描きとるための道具と取り出して構える。あまり見慣れない道具だが、正直そんなことはどうでも良い。

「じゃあ、いくね――」

すう、と息を吸い込む。緊張が、身体を包んでいく。

誘い込むためだけの歌に、こうも身体は固くならない。

友達に頼まれて歌う時も、ここまで緊張しない。

彼の決意が、覚悟がそうさせるのか——こんな体験が、初めての彼女にはわからない。

けれども……それでいいと

たった一人の人間のために、全力で歌っていいと——

「~~~~~」

けれども——

「~~~~~」

緊張で長く感じられる時間は——

「~~~~~」

気がつけばあっという間に過ぎ——

「~~~~~」

最後の旋律が、終わっていた。

「……うん。やっぱりいいね。なんだかさつき聴いたよりも、ずっと良く聞こえたよ」

普段歌うよりも圧倒的な疲労感と、それに比例した満足感が彼女を満たしていた。余韻を切らさないように、唯一の客が称賛を贈る。

「ありがとう。そっちは描けたの？」

「えっと……ごめん。ちよっと君の姿がうまく描けなくて、背景で逃げた。自画像でいいから、人の形をしたものを練習しておけばよかったかなあ……」

「ふーん。どれどれ？」

苦い顔をする青年に、ミスティアが近寄り絵を覗き込む。そして……

「—————」

彼女は、絶句した。

そこに描かれているモノは、黒と白の世界。色彩を欠いた世界であった。墨で書かれたにしてはスマートな線だったが……重要なのはそこではない。

月がそつとこの場を照らし、

木の葉の帳が舞い踊り、

その中心にいるミスティアは、妖しくも美しい――

風の音色が、虫の吐息が、彼女の歌声が、絵を通して感じられる――
――息をすることを忘れ、思わず彼の絵を見入ってしまった。上手く描けてない。という意図の発言を彼はしていたが、どうしてこの絵に文句をつけることができるのかわからない。

「はい、これあげる。最後の作品だから、大事にしてね」

ぼんやりと眺めていると、青年はそつと絵を差し出してきた。だが、ミスティアにとっては、そのことは蚊帳の外である。なぜならば……先ほど彼に抱いた感情、すごい人間だという思いが強くなり、彼を食べてしまうことを躊躇わせていたからだ。

「？ どうしたの？ 大丈夫？」

「あ、その……あなたを食べるの、やめてあげてもいいよ。条件つきだけど」

思わず口走ったが、肝心の条件は決めてない。食べてしまうのもどうかと思っただが、ただで帰してしまうのもいやだったのだ。

「それはどんな条件なの？」

「え、ええと……！！ 明日ね、私の友達と遊ぶ約束をしているのだけど、その時に友達の絵を描いてくれたら、あなたを食べないでいてあげる。ついでに、ほかの妖怪に食べられないように今日はあなたを守ってあげるわ。どう？」

とっさに思いつきで、彼女は条件を提示する。

「え……そんなのでいいの？ いや、僕としてはそれでありがたいことなんだけど」

「いいのいいの！！」

半ば勢いで決まってしまった。青年は拍子抜けしたようすでこちらを見つめている。もっと難しいことを要求されると思っていたらしい。

一段落したところで……ミスティアはあることに気がついた。

「ねえ、あなた名前は？ 私はミスティア・ローレライ。 みすちーでいいよ」

それは、お互い自己紹介をしていなかったことである。最も、これは仕方ないことではあった。つい先ほどまで、喰うか喰われるかの関係だったのだから。

「あ、ごめん。すっかり忘れてた……僕は『西本^{にしもと} 参真^{さんまこと}』 絵を描くことが好きで仕方のない人間だよ。よろしく」

青年も名乗り、二人は握手をした。

こうして——ミスティアと参真は出会い、奇妙な一夜を過ごしたのであった。

二話 夜雀との遭遇（後書き）

はいどうも！ おつかれさまでした！

この小説の方針ですが、前半は幻想郷住民の視点が主になります。主人公の視点は、彼の情報がある程度でそろってからになります。

三話 外来人との朝（前書き）

ミステイアの食事タイムはいりまーす

追記……ちょっと気に入らないところがあったので修正しました

三話 外来人との朝

「ん……ふあゝっ」

日が昇り始めて間もないころ、林の中で夜雀は目を覚ました。

あのあと二人は、別々の木に寄りかかって眠った。ミスティアも全力で歌った後だったし、参真も絵を描いた後なのと慣れない土地に来ているせいなのか、疲れがどっと出ていたようで、特に何も話すこともなくあっさりと決まった気がする。

「あれ？ 参真は？」

ところが、昨日彼が眠っていた場所には参真の姿はない。……やつぱり怖くなって逃げてしまったのだろうか？ 思わずため息が一つ零れてしまう。よく考えればこうなることは予測できたのかもしれないが……

ミスティアがげんなりとうなだれた所に、不意にいい匂いが漂ってきた。ちょうどミスティアが昨日歌った切り株のあたりである。ゆっくりとそちらに視線を向けると……

「あ、おはようミスティア。もう少し蒸らしたら出来上がるから待っててね」

奇妙な道具をいくつも取り出して、何かをしている参真を見つけた。

「おはよう参真。何をしているの？」

「朝ごはん作ってる所だよ。飯ごうと缶詰ってこっちの世界にはないの？」

「初めて見たわ。こっちの世界って……あなたもしかして外来人！？」

「……言ってなかったっけ？」

あまりにも意外な事実には呆然としてしまう。纏っている雰囲気や、落ち着いている感じとこちらでも違和感のない服装のせいで、今の今まで気がつかなかった。昨日の夜彼が使っていた道具も、よくよ

く考えれば見慣れないものも多かった気がする。

「聞いてないわよ……スキマ送りにされたの？」

「スキマ？」

「こっちは、『境界を操る程度の能力』をもっている妖怪がいるの。で、その妖怪が気まぐれに幻想郷と現世の境界を操って、むしろの世界の人間が迷い込むことがけっこうあるの。その妖怪が人をこちらにさらう時に使うのがスキマと呼ばれる空間なのだけど……こっちに来る前に、金髪の胡散臭い女性に遭ったり、目玉だらけの空間を通ったりしなかった？」

彼は少し考える素振りのあと、首を振ってこう言った。

「両方とも初めて知ったよ。僕は、いつものように山歩きをしながら絵を描こうとしていて、いいポイントがないかと探していたら急に霧が出てきたんだ。それで、とりあえず霧を突っ切ってみたら、普段と違う場所に出て……あの時は夢中で絵を描き始めたのだけれども、たぶんもうその時にはこっちに来ていたんだろうね。ほとんど場所を動いていなかったけど、鴉天狗の娘に話しかけられたし、間違いないと思う」

「え……？」

状況を整理しようと彼に質問したが、ミステリアはますます訳が分からなくなってしまった。てっきりスキマ妖怪のしわざでこちらに来たと思っていたのだが……色々この青年は、他の外来人とは違うらしい。

「ん、そろそろいいかなって」

彼女がぼんやりしている間に、参真は慣れた手つきで鉄の塊を手にとり取って、くるりとひっくり返していた。ゆっくりと蓋を開けると、炊けたご飯がたっぷりと湯気を漂わせる。ひよいと一粒、参真が米粒をつまみしばし目を閉じて噛み締めて……

「良かった。これならミステリアにも出せる」

控え目な発言とは裏腹に、小さくガッツポーズを決める参真。よほど上手くいっただけ。そのまま上機嫌で、近くに置いてあった

平べったい円柱状のモノからテキパキと中身を取り出していた。

「はい、ミスティア」

そっと彼女に、ご飯を乗つけた皿と、割り箸を差し出していた。よく見るとその皿も紙で出来ており、こちらの世界のものではない。ハッと我に返り、「ありがとう」と言ってそれを受け取った。皿の上には先ほどの白米と……これは何かの肉だろうか？ 正体不明の何かが乗つけられていた。

「……これ鶏肉じゃないよね？」

恐る恐る、彼に尋ねる。共食いはごめんだ。

「あはは、大丈夫だよ。鯨肉だから。むこうの世界でもレアものだからよく味わってね」

「げいにく？」

「クジラを知らない……？ 海で最大の大きさを持つ生き物なのに？」

「あゝ幻想郷には海がないのよ」

言いながら、ミスティアは納得した。海の生き物なら見馴れなくて当然である。

「……本当に向こうの常識が通用しないね。こればかりは、慣れるしかないか……」

「そうね、ちょっとづつ慣れていけばいいんじゃない？ そんなことよりはやく食べましょ！」

彼を慰めつつ、ミスティアはせがむ。鶏肉系統でないのなら共食いではないし、何より滅多に食べれないものが目の前にあるのだ。早く食べてみたい。

「そうだね、じゃあ……」

「「いただきます！」」

木漏れ日の中、二人は朝食を取り始めた。もちろん、ミスティアが最初に口にするのは「げいにく」だ。タレにつけこまれたそれは肉厚で、見た目だけでも十分な歯ごたえが期待できそうだ。ひよいと一口塊を放り込むと、やや濃いめのタレが口に絡みつく。肉は固

いものかと思いきや、存外に柔らかく、脂身の旨みをそのままに口の中で蕩けていく。そのまま鯨肉をがつつき、二つ、三つと頬張った。つついっつい四つ目に箸を伸ばそうとして……やめた。タレの味が思ったより濃く、ちよつと白米で舌休めをすることにした。見馴れない道具で炊かれているのは少々不安だが、見た目は大丈夫そうである。

そつと口に運ぶと、さっぱりとした甘みがタレの味を一掃した。食感もふっくらとしており、派手さはないが……旨い。携帯用にもかかわらず、芯も残さずに焦げもないのは参真の腕前だろう。今度は、鯨肉をご飯の上に乗せ、一緒に口に入れてみることにした。やや濃いめのタレは、白米が上手く中和しておりほどよい辛さになっている。その中に先ほどの鯨肉の旨みが合わさり――

（お、おいしい!!）

声には出さず……というより、頬張っているせいで声には出せなかったが、ミスティアは感激していた。箸は進み、あっさりと白米と鯨肉を平らげてしまう。

「ふいゝごちそうさま」

「早いね!？ そんなにお腹すいてた？」

参真の方は、まだ半分ほど残っている。どうやら、美味しすぎてかなり早いペースで食べていたようだ。

「ううん。おいしかったからつい……でも、もう食べられないのよね」

ちらり、と参真に流し眼をする。妖怪だけあって、この手の誘惑はお手の物。あっさりと彼は……いや、彼の手元にあつた鯨肉&ご飯は陥落した。

「しょうがないなあ……残りはあげるよ」

「ありがと♪」

ひょいと、彼の手元から皿をとり、再びがつき始めるミスティア。「すごい食欲……」と参真が呆然としていたが、そんなことは気にも留めない。今ここにしかない食べ物に全力を注いでいた。

やがて、ミスティアが食べ終わり、それを見計らって参真が手を合わせる。同じようにミスティアも手を合わせて、

「「ごちそうさまー！」」

今の食事への感謝。そして、食事の終りの言葉を、二人は言った。

そのあと参真が後片付けをし、しばしの食休みのあと――

出かける準備を終えた二人は、切り株の上に立っていた。ちなみに、参真も着替えたらしいが、見た目は全く同じ。青い色の作務衣である。

「じゃあ、みんなの所に行くね。手をしっかり握って！」

「え？ それはいいけど……っっておおおおお！?!?!？」

ミスティアが空へと飛んでいく。つかまっていた参真は、予想外の出来事に混乱しているようだ。

「暴れないでね？ 落ちたら痛いよ？」

「痛いですむのかなあ？ 空飛べるなんて聞いてないよ!?!？」

「こっちでは常識だから、慣れてね☆」

「……ハイ、ワカリマシタ……」

もう彼は、向こうの世界での非常識を受け入れたらしい。適応が早くていいことだと思いつつ、彼女たちは目的の場所、霧の湖へと向かっていった。

三話 外来人との朝（後書き）

食事表現に力を入れてみました。

反省は……しているようないないようだけど後悔はしていない
い

四話 四人と一人(前書き)

今回はちょっと短めです。早めの更新だから許してくださいあー

追記..また間違えたorz すいません……

四話 四人と一人

「チルノー！ 遊びに来たのだ」

霧の湖のほとりで、ふわふわと浮いているまっ黒い球体が湖に向けて叫ぶ。

「ル、ルーミア！！ ちょっと待ってよー！！」

「リグルー？ どこなのだー？ 見えないのだ」

「能力を使っているからよ！」

それを追いかけてきたのは、緑の髪を持つ、触角を生やした小さな人影。息を切らしながら黒い球体に話しかけると、唐突に闇が晴れ、その中から金髪の子供が姿を見せた。

「わはーリグルを見つけたのだ」

いつもと変わらぬマイペースな友達に、リグルはやれやれと思いながらも安心する。宵闇を操る程度の能力をもつルーミアは、普段から能力を使用しているせいで、辺りのことが見えていないことが多々あるのだ。たまにゴツンといい音を立てて、木にぶつかっている姿も目にする。

「ルーミアにリグル！ おはよー！」

「おはよーなのだー」

「チルノーおはよう！」

と、二人で話しているところに、湖のほうから氷の羽を生やした妖精が近寄ってきて、元氣よく挨拶してきた。霧の湖周辺を縄張りとしている氷精、チルノである。彼女はきよろきよると付近を飛び回り、首をかしげた。

「あれ？ みすちーは？」

「まだ来てないのだ」

「珍しいね。めったに遅れてこないのだけど……」

普段から四人で遊んでいるのだが、まだ一人来ていない。屋台をやっていたりするためなのか、割と時間に正確な友達なのだが……

「あ！　いたのだ！　おい、みすちー！」

「みすちーおそーい！　あれ？　ほかにも誰か連れてきてる」

空を見ていたルーミアがミスティアを見つけたらしい。リグルもそちらを向き、彼女に手を振っていたが。よく見るとミスティアの隣に人影がある。

「ほんとだ……ハッ！　わかった！　きつとみすちーの彼氏だよ！　一目見ただけでわかるなんて、あたいたら天才ね！！」

特に根拠もなく、突拍子もないことをいいだすチルノ。しかし、ルーミアはどういうことかわかっていないらしく、首をひねっていた。

「彼氏ってなんなのだ？」

「えっとね、すぐく仲が良い異性で、一緒に寝たり抱き合ったり、泣いたり笑ったりしながら、しばらくすると結婚して、子供を作って幸せな家庭を作る……ってけーねが言ってた！！」

「そーなのか？　……それってすごくたいへんなことじゃないのかー！？」

始めは、意味をよく理解できてなかったようだが、少し時間が経つと、ルーミアは顔を赤くして両手せわしなく動かす。

「いや、さすがにそれは無いと……思……う！？」

リグルがツツコミを入れようとしたときだった。徐々に近づいてくるミスティアの隣には……男性がいて……しかも手をつないでいる。言葉を失ったリグルは、

（まさか本当に彼氏！？　うそお！？）

などと、チルノが言っていたことを真に受けてしまう。そうこうしている間に、ミスティアと青年は自分たちのところへとやってきた。

「みんなおはよー！！　参真、大丈夫？」

「ご、ごめんみすちー　現実感がわかないというか……ちよつと疲れたから、休んでいい？」

「いいよいいよ。じゃあその間に、参真の紹介を終わらせておくね」

なぜかぐったりしている青年を、やさしく氣遣うみすちー。おまけにあだ名と名前で呼び合う仲とくれば……!! もはや疑うまでもない。三人は一斉にお祝いの言葉を口にした。

「みすちー! おめでとうなのだ〜!」

「いっぱい子供を産んで、幸せな家庭を築きなさいよね!!」

「式には呼んでね! 虫たちも呼んで盛大にお祝いしてあげる!!」

満面の笑みの三人に詰め寄られるみすちー。彼女はしばし呆然として――

「え? ……ええええええええええええええええ!!?!!? 何言ってるのみんな!??」

困惑たつぷりに、ミスティアの叫び声が湖畔へと響きわたることとなった。

四話 四人と一人（後書き）

THE カン違い回。

この四人はいろいろと動かしやすくていいですねー 作者もつい悪ノリでやっちゃったんだZE☆

五話 弾幕ゴッコと能力（前書き）

1500アクセス、ユニークアクセス300突破！ ありがとうございます！
ざいます！！

よーし、パパ張り切って早め多めに投稿しちゃうぞー！！

また誤字ってる……だからあれほど見直せと（ry

五話 弾幕ゴッコと能力

先ほどの騒動がようやく収まり、五人は落ち着きを取り戻していた。

あのあと、参真と呼ばれた人間も巻き込んでチルノたちは暴走し、ミスティアと彼は質問攻めに遭うことになった。参真は笑って流していたが、ミスティアはむきになって否定したせいで逆に追及され、今はぐったりとしている。申し訳ないと思い、リグルは彼女たちに謝った。

「二人ともごめん。みすちー だいじょーぶ？」

「大丈夫じゃないわよ…… こんなことならこっちに来るときに、『固いからみすちーって呼んで』なんて言わなければよかったわ」

二人の話によると、今朝まで彼は「ミスティア」と呼んでいたらしいのだが、飛んでこちらに来る間に呼び方を変えたらしい。その結果、一騒動起こることになってしまった。

しかし、悪いことばかりかというところでもなかった。なぜなら、すばやく彼の事情を知ることができたのである。

彼が「西本 参真」という人間であり、外来人であること、

昨日、ミスティアの歌声に誘われて、彼女は食べようとしたがやめたということ、

その代わりに、ミスティアの友達——リグル、チルノ、ルーミアの絵を描くということと、そのために彼はここに来たということ。

ちなみにこの話の直後、ルーミアが「あなたは食べてもいい人類？」と参真に直接聞いていた。これには彼も苦笑い。「食べられないためにここにきたんだけどなあ」と困ったように答え、残りの三人からは「話聞いてた!？」と激しいツツコミの嵐をもらうことになる。そのあと、みんなの自己紹介をすませ、今リグルは参真に絵を描いてもらっているところである。

「まあまあ、ちょっととした思い違いなんてよくあることだよ。うー

ん……やっぱり腕が落ちてるなあ」

「今の状態でも十分すぎると思うけど？」

どうやらもう絵が描きあがったらしい。その出来を見て参真は唸っているが、隣で見ているミスティアはこれでいいと言っている。リグルも気になりのもぞいてみると……確かに良い出来だと思った。少なくとも、リグルにこのレベルの絵を描くことはできない。

「うん。私はこれでいいよ。あと二人描かなきゃいけないんだし」

「そう？　なんだか悪いね」

本当に申し訳なさそうに、彼はその絵を差し出す。……どうやら本気で、上手く描けてないと思っているようだ。参真からリグルが描かれた絵を受け取り、その際に、気になっていたことがあったので聞いてみることにした。

「それにしても、変わった道具だね。外の世界の物なの？」

彼が使っているのは、六角形の先端のどがった棒に、やや大きめの紙が鉄の輪にくくりつけられているようなもの。それに、絵を描いている紙の下に、何か青い物を挟んでいるのが見えた。

「そうなるね。知らないってことは、補充できないのか……これ全部消耗品なんだよね」

「香霖堂にならあるかもよ？　外の世界の物も結構置いてあるから」

「なら安心かな。……チルノとルーミアは？」

彼に言われて気がついたが、いつの間にか二人がいなくなっている。そういえばだいたい前から話に参加していなかった。辺りを探そうとして、リグルたちはすぐに二人を見つけることとなる。彼女たちは空に上がり——お互いに構えたかと思った次の瞬間には、手のひらから光弾を放ち始め——色とりどりの光が、真昼の空を彩っていた。

「ちよつとちよつと！　なんで弾幕ごっこしてるの！？　二人ともストップ！！」

ミスティアが叫ぶが、チルノたちには届かない。弾幕の密度が増すばかりで、参真のことなど忘れてしまっている。その彼はと言う

と……

「えっと……どういうこと？ 弾幕ごっこって??」

完全に今の状況がつかめておらず、慌ててはいないものの混乱しているようだったが……こっそり以前リグルを書いた道具を手に持っているあたり、この状態の二人の絵を描くつもりらしい。とりあえず、リグルは彼に説明することにした。

「細かい説明は省くけど、幻想郷での決闘方法だよ。霊力とか妖力とか、そういった力を弾幕にして戦うの」

「ず、ずいぶん物騒だね……」

「むしろ逆。基本殺しはご法度だし、負けた相手を殺しちゃいけないってルールがあるから、『モメごとになったときの平和的な解決方法』って感じかな。参真もできるようになったほうがいいかもね。自分の身を守るようになるし、襲われても弾幕勝負に持ち込めばなんとかなることが多いから。あと、ちょっと複雑なのがスペルカードルールかな」

ちゃんと答えられてるのを見ると、一応話は聞いているらしい。が、彼の手はすさまじい勢いで閃き、白紙にいくつもの軌跡を刻んでいる。爛々と煌めく瞳は、どこかチルノのような無邪気な感じがした。

「夜符『ナイトバード』!」

「雪符『ダイアモンドブリザード』!」

「う、うおおおおおおお!!?!?!」

ちょうど話題にでたスペルカードを二人が使用すると同時に、参真はさらに加速する。弾幕勝負は美しさも求められるものだからだろうか……絵描きの彼にとって、何か感じられるものがあるらしい。高揚や興奮を通り越しているような勢いだ。

「す、すごいっ!!? どんどん描ける!! いい絵が描けるっ!!」

「参真落ち着いて!! スペルカードルールも説明するから!!」
異様な気配で、描き続ける彼を落ち着かせようと話しかけたが……止まる様子がない。

「……この興奮を抑える？ いいや無理だよ！！ そんなことをしても損なだけ！ 向こうにいたら絶対に見れない世界がそこにあるんだ！！」ここで逃してなるものかああああああ！！」

むしろ、情熱という炎に油を注いでしまったかもしれない。これはもう、自分には止められないと彼女は悟った……というよりは、諦めた。

「出来たっ！！ これだよこれ。こういうのを描きたかったんだ。久々だから忘れてたよ。時には、勢いと情熱が必要だね」

先ほどの叫びから、一分も経っていないのではないのだろうか？ アッという間に、彼は描き終えてしまったらしい。控えめに、改めてリグルは話す。

「そ、そう……説明してもいい？」

「あ、はい。こんなに興奮したのはひさしぶりだったから、つい抑えられなかったんだ……ごめんね？」

きちんと謝ってきた……自覚はしていたらしい。改めて説明を続けることにする。

「それで、スペルカードルールなんだけど、必殺技みたいなもので……お互いに得意な技を決めておいて、使うときにああやって宣言するの。あらかじめ決闘前に枚数を決めておくんだけど、その枚数分のスペルを出し切って、相手が負けを認めてなかったらこっちの負け。勝ち負けに関しては、このルールか、相手が負けを認めるか、もう戦えない状態になるかぐらいね」

「負けを認めるって、普通にもう戦えないってことなんじゃ？」

「それもあるけど、弾幕勝負は見た目の美しさも競う勝負で……魅せるタイプの弾幕で、相手を精神的に負けさせるのもありだよ。あ、チルノが二枚目使った」

「氷符『アイシクルフォール』！！」

再び弾幕が空を駆け巡る中、ルーミアはあろうことかチルノの至近距離まで接近していく。

「そのスペルは正面アンチ……うわー！？」

かわしきる自信があつたのかもしれないが、ルーミアはあえなく被弾し、地面へと落ちていく。

「ふふふ……甘いわよ！ アンチなのはイージーまでなんだから！
」

胸をフン！ と張るチルノ。弾幕勝負は彼女の勝ちのようだ。

「いやーいいものを見せてもらったよ！ おかげでいい絵が描けた！
」

地上に降りてきたチルノに、無邪気に向かつていく参真。……どことなく、他の幻想郷の住人と同じ匂いをするのは気のせいだろうか？ 外来人らしくない言動が多い気がする。一方、ミステリアはというと、落ちてきていたルーミアを看病していた。大した怪我をしていなかったらしく、すぐにみんなと合流する。

そのあとは、和やかで楽しい時間だった。絵は描き終えていたので、参真も一緒に四人と遊ぶこととなった。それだと彼が不利になるかとも思ったが……存外に参真は体力があり、運動神経は微妙だったものの、直感や洞察力に関しては、妖怪に匹敵するのではないのだろうか？ 参真もそれを理解しているのか、自分の弱点を補助しつつ、強みを生かす動きをしてくるので、普通に手ごわい。

「ねえ、参真って能力持ち？」

昼ごはんの時間に、疑問に思ったミステリアが彼に聞いてみる。

「能力？ ……ああ、天狗の娘がいったやつか。あるよ。『自然か不自然かを見分ける程度の能力』と呼ばばいいのかな」

すると、あっさりと彼は自身に能力があることを認めた。リグルも気になり、彼に質問する。

「具体的にはどんな感じ？」

「そうだね……ある一つのことを『定義』として決めると、それに対して、自然か不自然かを見分けられるんだ。例えば、今ここで『種族 人間』を定義にすると、ミステリアたちはもちろん、周りにある植物も不自然に見える。『種族 妖精』にすれば、チルノは自然に見えるけど、あとはみんな違うように感じられるかな。絵を描

くのにはすごく便利な能力だよ。自分の絵が不自然かどうかすぐにわかるし、集中して何かを見たい時は、見たいもの以外を自然に見えるようにすればいい」

「普通、逆じゃないの？ アタイなら自然に見えるようにするね！」

「僕も、能力に気がついたときにはそうしたんだけど……違和感のあるものの方が、細かく観察するには向いているんだ。自然に見えると、そのまま流しちゃうことがあるからね。ちなみに、何も指定していないと、定義が『今、自然体であるもの』に自動でなるみたい」

「そーなのかー だから参真は霊力があるのかー」

「え？ いやいや、そんなもの持ってないよ？」

基本、能力持ちは霊力などを持っていることが多い。それは能力の起動に必要なことが多いからであって……参真も例外ではないはずだ。

「たぶん持ってるよ。使う機会がなかったから、気がつかなかっただけじゃない？」

「まさか……苦行とかはしてないはずだよ。山籠りはしたけど」

「信じられないなら、能力で見分ければいいじゃない！ それに気がつくなんて、やっぱりアタイって天才ね！！」

「おおーやっぱりチルノは頭がいいのだ」

珍しく、的を射たことをいうチルノ。参真は納得し、自分を見るために湖のほとりへと足を運ぶ。

「ところでさ、二人はどうして弾幕ゴッコをしていたの？」

彼がいない間に、ミスティアがルーミアたちに問いかける。リグルとしても、気になっていたところだ。

「えっとね……私がちょっと間違えて、みすちーに迷惑かけたでしょ？ ルーミアがそのことを言ってきたんだけど、」

「私も彼氏の意味がわからなかったのだー」

「そうそう！ それで、どっちが頭いいのか決めるために弾幕勝負

になったの！！ 結果は見ての通り！ アタイったら天才で最強ね！！」

（（そんなことで弾幕勝負になったのね……））

もっと大掛かりなことではないかと二人は心配していたが、深刻なことではなかったようだ。そもそも、頭の良さは弾幕勝負で決めているものののだろうか？ そこを疑問に思えない時点で、二人の頭はあまり良くないと言えるのかもしれない。

「もりあがってるね……僕はなんか、いろいろありすぎて疲れてきたよ……」

と、どこことなく疲労感を漂わせながら参真が帰ってきた。結果はどう？ とみんなで押し掛けると。「あった」とだけ。どうやら、未だに信じられない様子らしい。

ないよりいいじゃない！ とみなで励ますと、少しづつ参真も元氣を取り戻していった。こういうところを見ると、やはり彼は外来人なのだなと、リグルは思う。

「みなさん……仲がいいですね……その方、良ければお話を聞かせてもらってもいいですか？」

突然、誰かから声をかけられた。リグルも聞き覚えのない声だが、誰かの知り合いだろうか？ 皆が皆、顔を見合わせる。どうやら誰も知らない人が来たらしい。

五人はそっと、声の主へと意識を向ける。そこには――

金髪の髪をなびかせる、法衣を纏った女性が立っていた。

五話 弾幕ゴッコと能力（後書き）

弾幕勝負の設定、こんな感じでしたよね？
間違ってたら、ご指摘おねがいします！

ちなみに、アイシクルフォール時のルーミアは作者の実話ですww
イージーやったあとノーマルで、「ヒヤッハー！ 正面アンチd（
ピチューン！！）」 なん……だと……？」ってなりましたorz

六話 理想の青年（前書き）

あ、ありのまま今起こったことを話すぜ！！

「俺は昨日投稿したときに、1500アクセス、300ユニーク突破したと思っていたら、今日投稿前に2500アクセス、500ユニークアクセスを超えていた」

な、何を言っているのか（ry

読んでいただきありがとうございます！！ リアルにポルナレフ状態な作者です。

六話 理想の青年

聖 白蓮にとって、幻想郷は理想に近い場所だった。

妖怪が主体になっているのは少々意外ではあったが、それでも、秩序が定められている。妖怪と人間の距離も自分がいた時代よりは、はるかに近くなっていた。他にも、妖怪どうしの仲も良い。彼女の時代は妖怪の数が多かったためなのだろうか……縄張り争いも多く、人間に退治されそうになった妖怪だけではなく、縄張り争いで傷を負い、寺に逃げ込んできたものも少なくない。それに比べて、こちらには異種族同士で遊んでいる光景を目にすることがある。

（時代は……変わったのですね……）

森を歩きながら、物思いに耽ってしまい……思わず首を振った。

今日も、「散歩に出かけてきます」と、星に告げて出かけようとしたところ、「聖……年をとりましたね……」などと言われてしまい、内心へこんだ所だ。物思いに耽ってなどいたら、ますます老けてしまう。気持ちを切り替えるために、ちょっと遠出してみよう。魔力と霊力を放出し、空へと舞い上がった彼女は、進路を迷いの竹林へととった。あくまで散歩なので、そのスピードはかなり遅い。気配と力も極力抑えて飛ぶようにしていた。

以前聖は、それを忘れていたせいでひどい目に会ったことがある。フラワーマスターと呼ばれる妖怪の元へ向かった時のことで、お茶でも飲みながらゆっくりしようと、茶菓子持参で飛んでいたものの……気配を消し忘れたせいで彼女は完全にスイッチが入っており、誤解を解こうと必死に説得しようとしたものの、むしろ「へえ……あなた強いのか」と、別の方面に期待させてしまったらしく……久々に聖も全力で相手をする羽目になった。ちなみに、弾幕勝負が終わった後その妖怪が、けろっとしていたのが恐ろしい。こちらも多少は余力があったが、本気で「死合い」になったら勝てるかどうかはわからない。最終的には、「今度、お茶しましょう？」と向こう

から誘ってきてくれたのを考えると、それなりに親睦を深められたのだと思うが……今思い出しても頭が痛い。

（あ、また考え込んでる……ダメダメ）

自分に言い聞かせたが、ある意味遅かった。飛ぶことに集中していなかったせいで、まったく別の方向へ……霧の湖に出てしまったのである。昔の自分なら、こんなことはあり得なかった。ボケが始まってしまったのだろうか？ などと、悪い方向に考えてしまい、気晴らしのつもりが、ますます気持ちは沈んでいく。

と、落とした視線の先に、複数の人影が写る。彼女たち四人は、よく一緒にいることが多く、聖も遠目で何度もその姿を眺めていた。（今日はここで遊んでいるんですね）

彼女たちは、人里の外で遊んでいることが多い。その行動範囲は広く、迷いの竹林から霧の湖、妖怪の山の縄張りギリギリなど、本当にどこでも遊んでいる。なぜ聖がそれを知っているかというところ、つい微笑ましくなって、いつも遠目で眺めてしまうのである。たてるなら、出かけていった子供の後を、こっそりつけていって友達と遊んでいる姿を見て喜ぶ母親のような心境だろうか。

いつも通り、彼女たちを見ていようと思つてると……そこにもう一人いることに気がついた。そっと注視してみると……若い人間の青年が、彼女たちと遊んでいるではないか。

（彼は何者なのでしょう？ いえ、そんなことよりも——）

男は、妖怪である彼女たちを恐れることなく、どこか幼さを残した笑い顔で……種族の違いなど気に留めず——彼女たちも同じように、彼が人間であることを全く気にしていない様子で、いつもと同じように遊んでいた。

それは、かつて彼女が求めた光景。1000年の間封印され、その世界の中で時には諦めかけたこともあった——彼女の理想が、そこにはあった。

ほとんど衝動的に、聖は彼女たちのもとへと降りていく。彼がどんな人間なのか、どんな思いで種族の違い彼女たちと接しているの

か、彼のことを知りたくて仕方がない。とりあえずは近くの林に気づかれないように着陸し、できるだけ自然体を装って彼女たちのもとへと近づいていく。

「みなさん……仲がいいですね……その方、良ければお話を聞かせてもらってもいいですか？」

湖畔に集まる五人へ、聖はそつと話しかける。彼らはこちらを見つめたが、どうも困惑気味だ。お互いの顔を見合わせた後、氷精の少女が強烈な一言を発する。

「おばさん、だれ？」

グサッ!! と、心臓にナイフが何か刺された気分だ。ずっと見守ってきたのに、気が付いてもらえなかったらしい。おまけにこの一言は、今日の彼女には辛辣すぎる。

「チルノ……今のは失礼じゃないかな……見た目からして、どう見ても『お姉さん』だと思うよ。それに、本当におばさんでもおばさんって言っちゃだめだよ。チルノだって、おばさんって呼ばれたくないでしょ? ……大丈夫ですか？」

「おばさんって……おばさんって……!!」

ダメージが抜けきらず、その場にうずくまる聖。青年はやさしく聖を慰めてくれたが、それでも受けた傷は深い。しばしの間、回復に専念せざるを得なかった。

「失礼を重ねるようで悪いのですが……どちら様ですか? まさか、ルーミアのお母さん？」

「妖怪におかーさんはいないのだー 私も知らない人なのだー」

自分が落ち着いた所を見はからって、青年は聖に質問をしてきた。割と最近こちらに来たものだから、てっきり彼は自分たちのことを知っているものかと思ったのだが……

「申し遅れました。命蓮寺の僧侶、聖 白蓮と申します」

「ご丁寧にも。僕は 西本 参真。それで、話を聞きたいというのは？」

「ええ! 妖怪とも隔てなく接するあなたの姿を見て、是非いろいろ

ろとお伺いしたいと

思いまして、いてもたってもいられず……!!」

「わ、わかりました。要件はわかりましたから落ち着いてください！」

ズイっと、距離を詰める聖に、参真は思わずたじろぐ。横目で、「……参真」と、何か言いたげにリグルが参真を見つめていたが、二人は気がつかない。

「すいません。年甲斐もなく興奮してしまつて……それで!? お返事は!?」

「ちょ、ちよつと待つてくださいつてば!! みんなと相談してからですね……」

この興奮を抑えられるものか。といわんばかりにズズイと迫る。そんな聖をなだめたあと、彼らは円状に集まり、いろいろと相談し始めた。はたして返事は……

「あの、聖さんでしたっけ? 先ほどの話ですが、いいですよ。あんまり大したことは話せないと思いますが……」

「いえいえ! あなた自体が貴重な存在ですよ!! じゃあさっそく行きましょう!」

「行くつてどこに……つてうわああああああああ!!」

そうと決まれば善は急げ。彼を命蓮寺へ運び、そこでお茶でも出しながらゆつくりと話を聞くことにしよう。参真の手を取つて。先ほどの速さとは比べ物にならないスピードで飛んでいく。

「参真―またね―!」

「さよ―なら―なのだ―!」

「よければ屋台にも顔出しにきてね―!」

「身体に気をつけなさいよね!」

残された四人も、それぞれ手を振つて彼を見送る。本当に仲がいいなと聖は思いながら、彼を連れて命蓮寺へと帰つていった。

六話 理想の青年（後書き）

マイペースひじりん。こんな感じでいいのかなあ？

そしてUSCも名前だけ。夢の中でこの二人がお茶飲んでる光景を
幻視したので書いてみました。結局お茶飲んでないけどね！！

七話 命蓮寺の珍事 青年の悲劇（前書き）

ギリギリ一日更新成功！
いやー危なかったー

七話 命蓮寺の珍事 青年の悲劇

「参真さん、大丈夫ですか？」

「正直、グロッキーです……」

本日二回目の飛行だったが、参真は目を回していた。どうにも、まだ生身で空を飛ぶということに慣れることができない。

「急に飛んですみませんね……つい嬉しくって」

クスリと自然な笑みを浮かべる彼女は、ミステリアとは違い妖艶な感じはしない。どちらかというと、おっとりしたお姉さんのようなイメージを想起させる。

「……そんなに珍しいことなんですかね？ 人間と妖怪が仲良く遊ぶというのは」

参真は幻想郷に来たばかりだが、妖怪という生き物がどういうものかはわかつているつもりである。人間より純粹で、故に凶暴。人より優れた強い能力をもち、さらには生命力も上回る。自身の能力で、そのことは確認済みだった。

「そうですね。昔より人間と妖怪の距離感は近くなったのだと思います。それでも、人を襲う妖怪はまだまだいる。だから、妖怪という存在そのものが怖くて仕方のないという人間がほとんどでしょうね……」

確かに、と彼は頷く。実際に参真もミステリアに食べられかけたので、このことについて異論はなかった。聖が続ける。

「参真さんは、あの子たちが怖くないのですか？」

「はい……昔、もっと恐ろしくて、おぞましいものを見たことがあるので……彼女たちは、自我が強くて、純真ですからまだ大丈夫ですよ」

本当に怖いのはもっと曖昧で、半端な精神を持っている連中だ。何を考えているのかがいまいち理解できず、そして最終的には……「顔色が悪いですよ？ ……その時のことを思い出してしまったの

ですか？」

「お気になさらず。あれを克服出来てないのは僕の弱さですから」
無理な笑顔を作っているのが、自分にもわかる。それでも、これ以上彼女に心配はかけたくないし、話したところでどうにかなるような問題ではない。

「そうですか。……近くまで来たので、ここからは歩いていきましよう。参真さんも、飛ぶことに疲れているようですし」

一応隠していたつもりなのだが、ばれていたらしい。

「助かります。聖さん」

「ふふ、呼び捨てでいいですよ？」

ふわり、と地上に二人は降りる。その大分先にだが、ぼんやりと寺のようなものが見えた。

「あの寺が聖さんの寺ですか？」

「ええ、その通りです。『命蓮寺』といって、私の仲間たちがいるところです。最近は本当に賑やかで……まるでお寺じゃないみないな感じなんですよ」

ちよつと困った風に言う彼女は、クスクスと笑っている。聖自身は、きつとそんな日々を悪く思っていないのだろう。参真としては、強面の人が出てこないことを祈るばかりであるが……

若葉の茂った林の中を歩いていき、鳥居をくぐった直後だった。

命蓮寺の方から誰かが駆け寄ってくる。

「聖——！ お帰りなさい——！」

……てつきり、寺にいるのは、お坊さんばかりかと思っていただけに、少女の姿は印象深いものがある。普通の寺からセーラー服の女性が、こちらに向かってくる光景というのはシュールだ。

「あら、村紗。今日は出かけないのですか？」

「うん。ちよつと変なことが起きて……敷地にいきなり小屋が幻想入りしてきたのよー」

「あらまあ……それで？」

「とりあえずナズーリンに頼んで、中にある『外来の物』だけ探し

出してもらった所。で、そのまま置いてくと邪魔だから、一輪&雲
仙コンビと、私のアンカーで『粉☆碎』しといた。今はぬえが、弾
幕使って残骸を燃やしていると思うよー」

知らない相手の名前がいくつも出てきて、会話からはみ出されて
しまった参真だが、なぜだろうか？ ひどく『小屋』のことが気に
なってしまう。しかも……理由はわからないのだが、いやな予感し
かない。

「あのさ、その『小屋』って全部丸太で出来てて、中に大量の絵が
保管されたりしていなかった……？」

「そうそう！ いやー多すぎて不気味なもんだから、幽霊でも出そ
うだなーとか思っちゃったりしたんだけどさ。全然そんなことなく
て、たくさんあってもかさばるだけだし、白黒の風景画ばっかで変
わり映えしないから、小屋ごと燃やすことに……ってちょっと!？」
彼女の言葉を最後まで聞くことなく、青年は煙が登っている方へ
と走りだす。

（まさか！ ここは異世界のはず……）

理性がそう囁くが、直感はむしろ先ほどより強くなっている。必
死になって駆けて行ったその先には……奇妙な羽を生やした黒髪の
女性が、手のひらから光弾をいくつも放ち、既に崩れ落ちた小屋を
完全に燃やしていた。

だが……参真にとってこの光景は……

「あ……ああああああああああ……」

膝が折れ、その場に両手をつく。もう原型もとどめていないそれ
は……しかし参真には間違いなく見覚えがあった。

外の世界で、山籠りに使っていた小屋が——具体的には、五年の
間寝泊まりし、二日前に出ていった自分の住まいが——今まで描い
ておいた絵を道連れに、最後の時を迎えていた。

七話 命蓮寺の珍事 青年の悲劇（後書き）

初めての主人公視点。

にもかかわらず精神的にフルボッコ回というね……がんばれ参真！！

八話 残骸の中で(前書き)

遅れてしまい、申し訳ありません……

PVアクセス5000、ユニークアクセス800突破！ 読者のみ

なさん！ ありがとうございます！！

あと今回、独自設定が出てきます。詳しくはあとがきにて解説いたします！！

八話 残骸の中で

命蓮寺の敷地内で起きた炎は、すでに沈静化していた。

聖が出かけた直後、唐突に裏のほうから重低音が鳴り響き、寺にいたみんなで見に行く……丸太で出来た小屋が出現していた。中に入ってみると寝具はなく、相当数の絵と、こっちでは見ない道具の類がいくつか置かれていた。どうしたものかと、ナズーリンが自分の主人に相談すると、「おそらく、幻想入りしたものです。毘沙門天の加護と思って、使えそうなものはありがたく頂きましょう」と言っただので、貰えるものは貰うことにし、景観を損ねる小屋自体は撤去することにした。

ナズーリンの能力を使い、中にあるものを探し当てていくと、その中に、カツオブシが大量にあったものだから、皆が喜んだ。幻想郷では魔法の森のキノコからとれる食材なのだが、あそこは瘴気が漂っているため危険極まりない。使い勝手のいい食材なのもあり、需要も高いので値段も高騰しやすいという品である。聖が帰ってきたら、この食材を使って宴会でもしようと思っていたのだが……

「本当に、申し訳ありませんでした!!」

寅丸 星の謝罪と共に、聖以外の皆が頭を下げる。まさか、幻想入りした小屋の持ち主がこちらにきていて、しかも聖が連れてきてしまうとは……

「あ、あはははははは……仕方ないですよ……不幸な……事故ですって……アハハハハハ……はあ」

そうは言うものの、青年の瞳は虚ろで、笑い声は渴いている。自分の住んでいた家が、目の前で跡形もなくなってしまったショックは大きいのだろう。かと言って、元気を出してと彼を慰めることもできない。原因は間違はなくこちら側にあるのだから。

「こ、こんなことになるなんて……参真さん。お詫びと言ってはなんですが、しばらくの間、ここで寝泊まりしていただくさい」

そこにすかさずフォローを入れるあたり、さすがは聖だ。この申し出は、彼にとってもありがたいものではあるだろう。自分たちにとっても、彼に対しての償いができるし、悪いことではない。

「はい、アリガトウゴザイマス……」

一応受け答えは出来ているが、彼の表情が死んでいる。ここは、そっとしておいた方がいいと判断したのか、星は

「みなさん、行きましょう」

一輪たちをつれ、奥の部屋へと引いていった。けれども、ナズーリンは立ち去ることができず、落ち込んでいる彼の元へ行き、こう言った。

「参真くん……その、本当にすまないことをしてしまった。謝っても取り戻せる訳ではないが……探し出すことぐらいなら、私にもできる。何か大事なものが保管されていたのなら、言ってみてくれ。可能性は絶望的かもしれないが……残ってさえいれば、私の能力で見つけ出せるだろうから」

目の前に広がる残骸の山から、目的の物を探し当てるのは大変だろうが……これぐらいしないと気が済まない。青年もその言葉を聞いてピクリと反応し、ゆっくりとナズーリンの顔を見上げていた。彼の表情は、何かに縋る様な表情で……ナズーリンは胸が痛くなった。

（本当に……ごめんよ……）

胸の内で謝ることしか出来ないのが悔しい。時間を巻き戻せたらと、本気で思う。あと少し彼が来るのが早ければ、こうはならなかったかもしれないが……けれども、それを言い出したらキリがなくなる。まずやるべきは、今できることからだ。

「そうだね……とりあえず、あのガレキの中を探そうか……」

相変わらず覇気のない声だが、それでも先ほどよりは幾分マシになった気がする。二人は焼け落ちた小屋の方へ、何か残っていないか探し始めた。

それから、時間が過ぎ、西日も傾き始めたころ――

二人はまだ残骸をかき分けていたが、何も見つけられずにいた。お互いにススまみれになり、衣服も随分と汚れてしまっている。にもかかわらず、一向に成果が挙がらない。

「やっぱり、キツかったか……地上部はほぼ全焼だからね……」

諦めることは辛かったが、こうも何もないと気が萎えてくる。ナズーリンも能力を何回か行使したものの、すべて空振りときていて、体力的にも厳しい状態だった。

「もういいですよ、ナズーリンさん……これだけしてくれれば十分です」

参真がそつと、ナズーリンの頭を撫でる。その手は汚れてこそいたが、彼の温かさが手のひらを通して伝わってくる。

（あんたは優しすぎるよ……いっそ怒ってくれたほうが楽なのに）
幻想入りしてきたものは、小さなものなら拾った者の物に、今回のような大型のものは、その土地を管理していた者の持ち物にしていいのが、幻想郷のルールだ。早い話が、「好きにしている」物として扱われるのだが……外の世界の間人である彼は、当然そんなことは知らない。にもかかわらず、仕方ないと言って、自分を慰めてくれる彼は優しすぎるように思える。少なくとも、命蓮寺を誰かに焼かれたりしたら、ナズーリンはそいつをタダでは済まさない。

「そう言われたってね……いや、そんなこと言われちゃ、ますます引き下がれないよ。うまいことガレキが折り重なって、下の方で無事なものが一つや二つあるだろうさ。さあ、探し物を言ってくれ！」

ポケットからダウジングロッドを取り出し、正面で構える。あとは彼の指示を待っただけだが、参真は急に黙り込んでしまっていた。

「ナズーリン。今のところもう一回言っ」

「？ 『探し物を言ってくれ』？」

「その一つ前！」

「えっと確か……『うまいことガレキが折り重なって、下の方で無事なものがあるさ』だっけかな？　それがどうしたんだい？」

「何で忘れてたんだ……！　ナズーリンさん。『扉』を探してください……！」

何か思い当たるものがあるのだろう。今まで勢いがなかったのに、急に張り切っているが……『扉』を探すなど、無駄なような気がする。

「はあ、じゃあやってみるよ……」

あまり乗り気はしなかったが、彼の頼みだし断れない。範囲を広げ過ぎると命蓮寺の扉に反応してしまうため、調べる空間は少なめに設定し、能力を発動する。すると……ロッドが反応した。方面はガレキの下あたりからだ。

「！？　なんで反応が……！」

鉄の棒が示す場所へ、二人は歩いていく。残骸が積もっている場所で、扉など見えはしないが……ここで間違いない。参真が残骸を退かし始め、つられてナズーリンもそれを手伝う。作業が終わるころには、夕暮れが敷地を包み込んでいたが、苦労した甲斐はあった。彼女らの前には、人一人がやっと通れそうぐらいの大きさの扉が出現していた。

「参真、これは？」

「地下室の扉だよ。床の一部がはがれるようになって、その下にこの扉があったんだ。ナズーリンたちが入った時には、気がついてなかったんだろうね」

「地下室か……なら中の物は無事かな？」

「うん……扉も特に傷んでいる様子もないし、多分大丈夫。ここまで付き合ってくれてありがとう。ナズーリン」

そう言って、もう一度彼は頭を撫でてきた。……なんだか照れくさいが、こうしてナデナデされるのも悪くない。もう少しだけ堪能しようと思っ……として……

「参真さん……ナズーリンは渡しませんよ？」

「「うわっ!?!」」

唐突に後ろから低い声が、二人に突き刺さる。怯えるネズミのごとく、ビクウ!! と震え、そっと振り返ると……怒れる猛禽類のオーラを纏った、自分の主人が立っていた。

「ご、ご主人!?! 誤解してる! 参真とそういう関係じゃないですから!?!」

「そ、そうですよ!?! ちょっと探し物を手伝ってくれただけでして……」

「ほほう……普通こんな遅くまで、しかもそこまで汚れてまで探し物をしますかねえ……」

ますます気配がドス黒くなったような気がする。迫力たっぷりな主は、嘘をつこうものなら、一瞬で消し炭にされかねないほどの気迫で迫ってくる。なんとか話題を変えようと、ナズーリンは知恵を絞り……

「と、ところでご主人。どうしてここに来たんですか」

「……それは、暗に二人つきりになりたいということですね?」

話題を逸らそうとして、見事に失敗。ああ、ラストジャッジメントはすぐそこに――

「……え? なんでですか?」

正直、もう終わったかと思ったが、参真が抜けた発言をしたせいで、一気に空気が弛緩した。……彼はどうやら、男女の仲に疎いらしい。おかげで助かった。ため息交じりに、主は本来の用件を告げる。

「……はあ。なんだ、心配をして損しました。宴会の準備ができたので呼びにきたのです」

「宴会? 急に何を……」

「あなたの歓迎とお詫びを兼ねてです。幻想郷の住民は宴会好きですから、ついでに顔と名前を覚えておくといいでしょう。騒ぎになれば、きっと勝手に集まってくるからです」

「はあ……なんだかすいませんね。何も用意できなく……あ……!」

途中で何かを思い出したのか、参真は先ほどの地下室へと向かっていく。

「どうしたんですか？ あなたが主賓なので、早めに来てほしいのですが……」

「その主賓が手ぶらじゃまずいでしょ？ この際、派手に振舞うとしますかね！」

ニヤリとその顔に笑みを浮かべた後……彼は地下室の中へと降りていったのであった。

八話 残骸の中で（後書き）

独自設定は、

「幻想入りした物の所有権について」と、

「一部の食材は、魔法の森に代用品がある」ですね。本文にもある通り、危険な場所ですので高級品扱いになります。

何？ 「前者はともかく、後者はいらない」と？

むしろ「代用品あったらつまんねーよ！！」と……ほほう……

いいでしょう！ そう思いなら、いいでしょう！！

あなたが、海の食材がないということがどういうことか！ それが日本食にとって、どれだけ致命的なことか理解できているかを、テストしてみることにしましょう！！ 上記のカッコ内のようなことを思ったあなた！！ 拒否権はありませんからね！！？

問題！

今日、晩御飯に以下のようなものが出されました

茶碗一杯のご飯

焼しゃけ

ヒジキ

味噌汁

ホウレンソウのおひたし

大根の煮物

上記の物で、「海の食材」がないと作れないもの、なんか物足りなくなるもの、風味、味に影響が出てしまうであろうものを答えなさい。

解答は次回投稿時に行います！ 感想の所に書いても返せないよ！？
そこは間違えないでくださいね！！

では、次回をお楽しみに！

九話 宴・会・開・始！（前書き）

短めですが、一日に二回投稿ということで許して下さい……

それと、答え合わせの時間だー！！

答え——ご飯以外全部影響受けます。

シヤケとヒジキ……言わずものがな。素材がありません

味噌汁……わかめが足りません。なくても一応なんとかあります
が……寂しくね？

ホウレンソウのおひたし……かつおぶしが乗ってないです。こんなのおひたしじゃない。

大根の煮物……なんで？ と、思うかもしれませんが、大根の煮汁に、かつおだし、あるいはこんぶだしを使いますからね。

こうして見ると、影響が多いことがわかります。何が致命的って昆布だしと、かつおだしが使えないとこなんですよ。これがないと、そうめん、うどん、そば、おでん、各種煮物類、鍋料理全般がダメになります。おせち料理も大打撃ですね……家庭のアレンジ料理でも、ちょっと隠し味でかつお、こんぶだしを入れるところは多いそうです。

毎日の危険が危ない世界で生きているのに、何か物足りない料理ばかり食べさせられる世界……あまりにも人間涙目すぎるでしょう？ こんな世界で生きていたら……人類は滅亡する！！（食文化的な意味で）と思ったので、この独自設定を入れることにしました。
……あれ？ 私もしかして、食い意地張ってる？

九話 宴・会・開・始！

命蓮寺には、広いスペースがいくつかある。

時に、参拝者に説法をする場所になり、葬儀などの式場になり……宴会会場になったりと、用途は多い。今はちょうど、宴会場に使おうとしている所だが……参真を呼びに席を立った星が、まだ帰ってきていない。聖、村紗、一輪、ぬえの四人は、その場に正座したまま動けなかった。

「星……遅いね……やっぱり無茶な提案だったかな……」

「だ、大丈夫だよ！ ちょっと手こずっているだけで……きっと来てくれるって」

不安げにつぶやく村紗を、ぬえは何とか励ます。「うん……」とだけ小さく彼女は返してきたが、不安をぬぐい切れていないのだろう。いや……不安なのは、きっとこの場にいる全員が同じなんだとぬえは思った。……よく考えてみれば、家を潰した人たちと酒の席に着きたいとは思わない。彼があまりにも、気のよさそうな人だったものだから、大丈夫などと、考えてしまったのは甘かったか……

憂鬱に浸りそうになった所にぴくり、と聖が反応した。ぬえも同じ方向に意識を向け、気配を探ると……三人がこちらに進んできているのがわかる。みんなでホッと一息つき、改めて姿勢を正した。

「すまないみんな！ ちょっと参真の荷物を取ってて、時間がかかってしまった」

「星！ 遅かっ……その桶どうしたの！？」

ようやく現れた星たちは、その後ろに桶や、梅の入った瓶を、大量にフワフワと浮かべてやってきた。妖力を使って浮かせているのだろうか、それにしても数が多い。一体どこから取り出したというのだろうか？ その答えは、主賓の彼が持ってきた。

「建物の地下室が無事だったんですよ。そこから、保管してあった漬物とか梅酒とか、とりあえず持てる分だけ持ってきました。いや

「妖力でしたっけ？ すっごく便利ですね！ おかげで、一度にたくさん持ってこれましたよ！ 二人とも、ありがとう」

「ちょ、ちょっと待って！ 結構な量だけどまだあるの！？」

普段は割と冷静な一輪が、驚いている。事実、桶が合計十個、梅酒の瓶が20も浮いているが……まだ予備があるというのか。

「まだまだ残ってたねえ。この量の倍ぐらいはありそうかな……ちよっとつまみ食いもしてみたけど、こりやなかなかの出来だねえ」

「それは楽しみですね！ 参真さん。急な宴会にもかかわらず、ありがとうございます」

聖が丁寧に、彼に頭を下げ、参真もそれにつられてお辞儀で返した。

「こちらこそ。よそ者なのにここまでしてくださって、ありがとうございます。えっと、席はこっちですかね？」

そそくさと青年は席に座り、ナズーリンと星も席に着く。まだ人数は多くないが、とりあえずこのメンツで宴会を始めることにした。きつと騒ぎを聞きつけて、勝手に他の住人もやってくるだろう。

「それじゃあ、みなさん……」

「「「「「かんぱーい！！」「」「」「」」

聖の掛け声で、いっせいに杯をあおる。こうして、寺の中で宴会が始まった。

九話 宴・会・開・始！（後書き）

え？　なんで一日二回投稿したかって？

そりゃー前日の埋め合わせがというのかもしれませんが……紅魔郷ノーマルのノーコンティニュークリアを達成したので、テンション上がってやりました。

五面クリア時にエクステして二機三ボム、六面単体だと、調子良ければいけるし、三ボムなくてもいけるかなーとか調子こいてたら咲夜さんに三ボム抱え墜ちさせられ、きつい状態に。ここから逆転できるとは思いませんでした。諦めたら試合終了という言葉の意味が、ようやくわかりましたよ……さあ、あとはフランちゃんとウフフしに……（この後、パツチェさんのロイアルフレアに全滅させられました。あれどうやって避けるの……未だにスペカ取得できないんですが……）

十話 突撃！ 隣の命蓮寺！！（前書き）

埋め合わせしたのに一日遅れたら意味ねえだろorz

あと今回、キャラ崩壊はいりまーす。

ゆるーい心で見えていってね！！

追記…読みなおしたら違和感があったので修正しました。見直しは一回じゃダメ、ゼツタイ

十話 突撃！ 隣の命蓮寺！！

「あやややや？ こっちでも宴会ですかね？」
宵闇が幻想郷をつつむ中、文は命蓮寺が騒がしいことに気がついた。

ちょうど今晚、博麗神社で宴会があるとの情報を聞きつけ、そこらに行こうとしているところだったのだ。宴会の参加者は、酒のおかげで口が軽くなったり、酔った勢いでハプニングなどが起るので、特ダネを掴むには絶好の機会なのである。おかげで、文は宴会とあれば必ず参加するようにしているのだが……これには困った。

「どこかの鬼でしたら、分身して両方参加しそうですけどねえ……」
残念ながら、彼女はそんな便利な能力は持ち合わせていない。しばしの間考え込み——今回は命蓮寺の宴会に参加することに決めた。博麗神社の宴会に人数が割かれてしまっているだろうが、命蓮寺での宴会に参加したことのない文は、そちらに興味を持った。幸い、宴会に持ち込むための酒も手元にある。今すぐにも突撃可能だ。

「それじゃあ行きますか！ タイトルは……『博麗神社に対抗！？ 命蓮寺の宴会、その実態に迫る！！』といった感じですかね？」

あやややや……と、その顔にいやらしい笑みを浮かべ、酒瓶片手に彼女は境内に降りていく。

「おじやますねー！！」

挨拶と同時に、会場に突撃する。同時に、さらっと視線を全体に向け、誰かいるのかを探った。

（うーん。やっぱり集まりが悪いですねえ……）

あくまでも博麗の宴会と比べたらであって、それなりに妖怪が集まってきたている。しかし、あまり有名な妖怪はいないようだ。

「チ、チルノー！ ちょっと飲みすぎじゃない？！ もうやめた方が……」

「なにいつてるのリグルー！ あゝたゝいゝはゝ サイキョーだからゝこれぐらゝい！！！ へーき！！！！ どんどんもってきてゝ！！！！ アハハハ！！！」

……前言撤回。見落としていただけらしい。氷精と蟲の妖怪が来ていたようだ。この二人がいるとなると、普段一緒にいる残りの二人もいるだろう。そして予想通り、すぐ近くに夜雀と宵闇の妖怪もいて、一緒に酒を飲んでいた。

追加の酒を氷精がガンガン煽る。かと思えば、箸を閃かせて、あたりにあつたおかずをがつついていく。その光景に、金髪の少女が悲鳴をあげた。

「あー！！ それはルーミアが狙ってたのだー！！ 返すのだチルノー！！！」

「はやさが足りないっ！！ 宴会とは戦争なのよ！！ ってあれゝ？ ルーミンって分身の術使えたんだゝでもサイキョーの称号は譲らないぞゝ！！！」

「訳わかんないこといわないの！ はい！ チルノはもうお休み！！ ……私の屋台の人より酒グセ悪いじゃない……あれ？ 鴉天狗じゃない。いたんだ？」

と、ミスティアがこちらに気がついたようだ。鳥類仲間なもので、文はよく屋台にお邪魔している。すっかり顔なじみの仲だ。

「ええ、ついさっきお邪魔させていただきました。これは、『何の』宴会なのですか？」

挨拶もそこそこに、彼女は取材モードに切り替える。こうして宴会を開く以上、なんらかの理由があるはずと踏んでの質問である。

「ああ、参真の歓迎会よ。今出てる梅酒と漬物のほとんどは彼のみたいね。それにしてもいい味出してるわ。これなら、忙しいときに屋台の手伝いを頼みたいぐらい……」

「参真さん？ どなたですか？」

「あれ？ 知らないの？ 天狗の娘に会ったって言ってたから、てっきりあなたかと思ったのだけど」

ふと、昨日の出来事を思い出す。確かに、外来人と会った記憶があるが、文の印象としては、普通に無力そうな感じがしたので、生きてはいないと思っていたのだが……とりあえず、彼の特徴を言ってみることにしよう。

「その方って青い作務衣を着てて、あまり外来人らしくない人ですかね？ あと、絵がかなり上手だったような」

「そうそう！ なんだ。知ってるじゃない。あっちで命蓮寺の人たちと飲んでるわよ」

ミスティアが指差した先には、昨日会った時と変わらぬ様子の青年がいて、その隣にはここの寺の僧侶、聖がいた。

「生きていたんですね……ふふふ、以前はうまくかわされましたが、今回はたっつぷり取材させていただきましたよ！！」

気合い十分に、彼らの元へ歩いていく。途中で青年が気がついたのか、ペコリと小さくお辞儀をし、あいさつする。

「こんばんは。いや、幻想郷はすごいですね、事前の連絡なしで、これだけ集まってくるなんて思いませんでしたよ。外来人の『西本参真』と申します。……ちょっと酔ってるのかな？ 以前、どこかで会ったような気がするのですが……気のせいですかね？」

「いえいえ、あってますよ。妖怪の山でお会いしています。あの時は名乗ってませんでしたね。清く正しい射命丸こと、『射命丸 文』です。さっそくですが、取材させてもらっても……」

「参真さああああああああん！！ 本当に！ ほおんとうにあなたは素晴らしい方ですよおおおおお！！」

取材許可を取ろうとしたら、聖が全力で彼に泣きすがり、全力で参真をがっちりホールド。これは……面白い。心のうちでニヤリとしながら、

「あやや……これはどういうことですか？ 女性を泣かせるとは感心しませんねえ……」

さも呆れたように問い詰める。うまいこと慌てふためいてくれるのを期待したのだが、案外あっさりと彼は返してきた。

「あゝさつきからずつとこの調子なんですよ。彼女、泣き上戸だったみたいで……酔いだす前までは、人間と妖怪について話していたんですが……」

「参真ッ！　ひとつ言い忘れてた！　姐さんはお酒好きだけど、あんまり強くないから調整してあげ……ってもう遅かったか……はいはい、姐さん。参真くんが困ってるよ。あっちでみんなと飲みましようね」

後ろから出てきた一輪が、見かねて聖を引き離そうとする。が、
「やだやだやだぁッ！！　もつと参真とお話するぅッ！！！！」

……幼児退行までするようだ。完全に駄々っ子状態で、参真を離そうとしない。しばらくもめているうちに、するっ、と手が参真の首にかかり、その状態でさらに強く聖は彼を抱きしめようとする。

「ひ、聖さ……！　く、首っ！　く、……ぶっ……」

「ギャー！？　参真さんがー！！　ぬえ！　村紗！！　ちよつと手伝って……！！　死んじゃう死んじゃう……！！」

青年が白目を剥いて倒れそうになる。大急ぎで三人は聖を引きはがし、奥の部屋へと搬送していった。一部始終を見ていた文は、こっそりとネタ帳に今の出来事をまとめていく。

（なるほど……聖さんの酒グセが悪くて、あまり大々的に宴会を開けないんですね……参真さんだけでなく、思わぬネタも拾えました……！！）

もちろん。さつきの泣きじゃくった聖の姿は、小型カメラに納めである。こっそり写真のとれるカメラが欲しいと、にとりに言っておいた甲斐があった。いくつか複製して、記事に使うのとは別に、聖ファンの人間に売りつけるとしよう。あややや……と黒い笑みを浮かべ、その時の光景を思い描く文であった……

十話 突撃！ 隣の命蓮寺！！（後書き）

ひじりんをカリスマブレイクさせてみた

反省（r y

十一話 ゆうべは、おたのしみでしたね？（前書き）

今回は全力で遊んでいます。話としては進んでませんねえ……

でも、説明会多かったからたまにはいいよね！ 主人公出番少ないけど……！

……すいません衝動のまま書いたらこうなりました。どうしてこうなった……

十一話 ゆうべは、おたのしみでしたね？

「ぐ……ゲホッ！ つ、辛かった……」

聖から解放された参真は、まだ息を荒くしている。相当強く首を絞められたようだ。

「あやや、大丈夫ですか？ 取材は少し落ち着いてからにしたほうがいいですねえ」

本当は今すぐ取材したいが、一応他にもネタになりそうなものがある。ならば、あらかじめ予約をしておいて彼を休ませ、その間に別のネタ探しをしたほうがよさそうと思ったからだ。言葉とは裏腹に、彼の身を案じているかという、そうでもない。

「そうしてもらえると、助かります。……ちよつと文さんが不自然なのが気になりますが」

「あややや！？ 気のせいですよ……！ それではまた後ほど……！！」

彼の能力をすっかり忘れていた文は、慌ててその場を去ることにした。「自然か不自然かを見分ける程度の能力」は、嘘や隠し事が通じないらしい。地霊の主並みに、取材態度には気をつけなければ……と肝に銘じ、踵を返した先には……

「あゝおいしかった……ごはんに合いすぎてついつい食べ過ぎてしまった……これじゃあ、ご主人のことをいえないよ」

「全くですよ。なんでいつも、私ばかり食いしん坊扱いされるのですか。ナズーリンもけっこう大食いなのに……」

その腹を妊婦のように膨らませた、星とナズーリンが寝転がっていた。思わず嘔き出しそうになって……何とか堪える。とりあえずは、ボケをかましつつ取材に入った。

「あややや！ ご出産はいつですかねお二人とも。その時は『文々新聞』にてぜひ特集を……」

「「しないよ……」」

全く同じタイミングで返答する二人。上司と部下の関係だが、非常に良い関係を築けているようだ。

「またまたくお相手は誰ですか？ まさか参真さんですか？ ん？」

「いやいや、この速度でお腹が大きくなったら病気だよ。ねえご主人……って顔が赤いよ！？」

「……ハッ！？ いやこれは違……！？ 別に破廉恥なことを想像した訳では……っ！！」

勝手に自爆し、仄かに赤かった頬をますます紅くして首を振る星。とりあえずオイシイ表情なので、手持ちのカメラでパシャリと一枚撮っておく。「あっ！！」と驚いた時にはもう遅い。先ほどの表情はもう、フィルムの中に収められている。

「そ、そのカメラを渡しなさい！！ ……って！？」

慌てて星がそれを奪おうと、駆け出そうとした時だった。何も無いのに彼女は躓き、前のめりに倒れ――

「へぶうー！！？」

ぽっこりと膨らんだ腹に、衝撃がすべて伝わる。彼女は、毘沙門天の弟子とは思えぬ奇声を上げ……そのまま動かなくなった。

「ご、ご主人……！ 大丈夫！？」

鈍い足取りでゆっくりと、小さな従者が彼女の上体を起こし支える。星の瞳はもう光が消えかけていて、手を伸ばすのもやっとうだ。

「ナズーリン……私は最後まで……ダメな主でしたね……」

「な、何言ってるのさ！？ 傷は浅いよ！！」

「いえ……私はもう、ここまでのようです……後は……任せましたよ……ガクッ」

最後にそう言い残して……彼女の体から力が抜けた。

「ご主人？ ……ご主人ってば！ 目を開けてよ！！ 星！！」

半泣きになりながら、何度も何度も体をゆするナズーリン。それに反して、星は目を覚ます気配がなかった。

いつの間にか茶番の外に放り出された文は、茫然とその光景を眺

める。

（……どうしてこうなったんでしょうねえ？ まあいいか。これはこれでネタにしましょう！！）

二、三回と角度を変えながら激写したが、主思いの妖怪は気が付いていないようで、おかげでいい写真が撮れた。……リアクションが大げさ過ぎるような気もしたが、酒が回っているせいだということにしておこう。

（さて……そろそろいい時間ですかね。参真さん、覚悟していただきますよー！！）

十分すぎるほどネタは仕入れたが、それで引っ込まないのが記者魂。先ほどのトラブルから回復したであろう主賓に向けて、文は意気揚々と進んでいった。

十一話 ゆうべは、おたのしみでしたね？（後書き）

次回はついに、主人公のデータがある程度明らかになります。

え？ 全部じゃないのかって？ それやつちやつまらないでしょ！ オイシイところは後半にとっとなきゃ！

あと、今回星が動揺したのは、参真クンに気があるのではなく、純粹にえっちいこと想像したからです。仏教ってなんか、禁欲してるイメージがあったので、そこから、

普段禁欲↓お酒が入ってハイに↓文が話題を振る↓日ごろ抑えているから妄想爆発↓ポシュー！！ という妄想でしたとき。大丈夫かこの作者。

十二話 スーパー取材タイム!! (前書き)

参真クンの情報を丸裸にスルノデス!!

追記..PVアクセス10000、ユニークアクセス10000到達!
ありがとうございます!!

十二話 スーパー取材タイム!!

命蓮寺で始まった宴会も、終わりの時が近づきつつあった。

リーダー格の聖と星がそろって脱落し、ストッパーのいなくなった参加者たちが、調子に乗って酒を派手に飲み散らかし、結果、会場は死屍累々と妖怪たちが横たわることになった。そんな中――

「参真さんは、お酒に強いですねえ。妖怪並みに飲めるのに大丈夫なんですか？」

未だに酒を飲み続ける人間に、関心半分、呆れ半分で文は尋ねた。この宴会の主役だけに、他の人や妖怪たちに酒を勧められていてもおかしくない。文が会場に来る前から飲んでいたはずだが、彼は頬が少し赤い程度で済んでいる。

「あははは。親父が鬼のように酒に強くてですね……たぶん今の僕と同じ量飲んでも、全く酔っていないと思います。その血引いてるからでしょう」

向こうの世界に鬼はいないはずだから、強さの揶揄で鬼という単語を使ったのだろうが……それが事実なら、こっちの鬼と同等クラスの酒の強さだろう。萃香や勇儀ともいい勝負かもしれない。質問を続けよう。

「なるほど……他にご家族の方は？」

「三つ年の離れた、双子の兄さんがいますね。母親は、僕が三つの時に離婚したそうです」

軽く聞き流そうとして、彼女は何かおかしいことに気がついた。

「あやや？ 双子なのに年が離れているのですか？」

「……すいません。言い方がよくありませんでしたね。三つ上の兄が二人いて、その二人が双子なんです。僕は三男になります」

「……そのご兄弟の名前、長男が『真一』で、次男が『真二』だったりしませんよね？」

そう言って、メモ帳に名前を書いて彼に見せてみる。果たして……

「惜しい！ 長男が『真也』で、次男が『真次』です。次男の読み方は合っていましたね」

彼が『参真』で、三男だったことから予想して言ってみただが、大体あっていたらしい。……ちよつと安直過ぎるネーミングではないだろうか。親の顔が見てみたいが、ここは別世界。叶わぬ望みと気持ちを切り替え、取材を続ける。

「フムフム……失礼ですが、年はいくつですかね？」

「えっと、ちよつと待ってくださいね……季節が五回巡ったから、たぶん二十歳です」

「たぶん？ 正確に数えていないのですか？」

「実はここに来る前、山籠りしていたのですが……その時にカレンダーを持っていくのを忘れてまして、季節の巡った回数しか覚えていないのですよ」

話を聞きながら、なるほどと文はどこか納得していた。彼が外来人らしくないのは、元々文化レベルの低い環境で生活していたからと思われる。カレンダーというのは、おそらく暦表のことだろう。

「山籠りとは……若いのによくやりますねえ。まさか、絵を描くためだけに？」

「はい！ 毎日外に出て、たまに寝具も持ち歩いて出歩いてました。そしたら昨日――」

「いつの間にか、幻想郷にやってきていた……と、そういうことですか。これは珍しい。スキマ妖怪の干渉なしに、面白い人間が入ってくるとは……」

すばやくメモ帳に書きとめつつ、個人的な感想なども追加しておく。記事を書くためには、情報だけでなくその場の空気も読み取っておくと臨場感が出る。そのためには、ちよつとした小言をメモに挟んでおくといい。長年の経験で、文はそれを悟っていた。しばしの間、そうしてまとめていると、今度は彼から質問が来た。

「そのスキマ妖怪とは、有名人のですか？」

「ええ、幻想郷の管理者といっても差し支えない大妖怪ですからね。」

私でも勝てません」

「おお……一応挨拶しておいた方がいいのかな？」

「うーん……難しいところではありますが……まあ、大丈夫でしょう。あなたに何か問題があるようでしたら、即座に接触してくるはずですから。出会った時に、軽くでもいいと思いますよ」

以前、博麗神社が天人によって潰された時の、紫の怒りようを考えると、彼女の幻想郷への愛は間違いない。その妖怪が『何もしてこない』ということは、危険分子ではないだろう。

「なら良かった。もう少しこの世界を、見てまわりたいですから」

「あやや？ 元の世界に愛着はないのですが？」

これは少々、射命丸にとって意外だった。基本的に外来人は、すぐに元の世界に戻りたがるものだと思ったのだが……青年は興奮した様子で答える。

「だって、向こうの世界では見れないものがたくさんあるんですよ！ あなたのような妖怪もちろん、古い空気の中にある自然の景觀！ 妖精！ 弹幕ゴッコ！！ これだけあるんです。しばらくは見ておきたいといいますか……もちろん。兄さんにも会いたいのと思いますけど、すぐに帰りたいとは思ってませんね」

酒の勢いなのか、やたらと声大きい。

「なるほど。良くわかりました！ 最後に一枚、写真を撮ってもよろしいですか？」

また以前のように、回りくどく説明されるのはゴメンと思った文は、これで切り上げることにした。

「ん、いいですよ」

「ああ、ちょっとここに移動してもらえます？ ……そうそう！ その位置で！！」

宴会場がバックになるように、彼の位置を調整する。素直に参真は移動し、そこに立った。

「では、参真さん。何かキメポーズをお願いします！」

「無茶振りだなあ！？ じゃあねー『のまのまイエー♪』のまの

まイエイ♪♪のまのまのまイエイ♪♪」

……なんだかよくわからない歌を歌いながら、空の酒瓶を天高く掲げる。本人がノリノリだからいいでしょう。とりあえずシャッタ―を切りまくり、いいものを後で現像することにした。

後日、『文々。新聞』には、それはそれはカオスな宴会風景が記事になっていた。

見出しは、『新入り外来人、命蓮寺の宴会客を圧倒!!』と書かれており。後ろで酒瓶を空にし、倒れている妖怪たちを前に、『のまのまイエイ♪』をしている参真の姿があった。

あながち嘘でもないだけに、参真からの苦情はなかったという……

十二話 スーパー取材タイム!! (後書き)

射命丸のメモが落ちている……読みますか? YES/NO

射命丸のメモ

西本 参真 ……種族 人間(外来人) 男性

年は、本人曰く二十歳。見た目的にはまあ、そんなところか。

親のネーミングが終わってる。真也と真次って……そして参真……ご愁傷様。

酒に強すぎでしょう? 妖怪並みって……しかも父親がこれより強いってどういうことなの……

山籠りするほど絵が好きとは……好きなものだから上手なのだろう。

しばらくはこちらに滞在するつもりのような。気持ちはわからないくもない。私も外の世界に行ったらしばらく戻らないでしょうし。

びっくりするぐらいまともな人間。白黒、赤白巫女、現人神より全然きれいな御方。というより、あの人たちが少しおかしなだけか……

でも逆に、弄りがいがないとも……たまにはまともな記事もいいか?

面白いネタは、聖と星の出来事で十分?

いや! 最後の写真を上手く使えば……!!

(メモはここで終わっている)

うん。展開が遅いですね……次回も遊ぶつもりですし……
読者のみなさんごめんね!!

十三話 特訓 そして……（前書き）

また遅れたっ！ あと、ちょっと急展開かもしれません。友人に「この物語には速さが足りないっ！！」と言われてしまったので……それと、明日と明後日は更新が厳しいかもしれません。ちょっと家族の用事ができたので……すいませんね。ちょっと待っててくださいあー（汗

十三話 特訓 そして……

宴会から三日後……命蓮寺の裏庭では……

「ふう……やっぱり厳しいかな……」

「そうですね……霊力が絶対的に足りてませんから……」

命蓮寺の面々が集まり、気絶している参真と共に、縁側で休んでいた。

皆が何をしているかというところ、参真に弾幕ゴッコの稽古をつけていて、一息入っていた所である。微弱ながら彼には霊力があり、弾幕ゴッコができるようになれば、一人で外に出歩くこともできるようになる。様々な所を回りたい、という参真本人の希望もあって、まずは参真が霊力を練り、弾幕にするための練習から始めたのだが……そこで大きな問題が発生した。

彼の霊力は、致命的なまでに少なかった。空を飛ぶことはもちろん。弾幕も、米粒のようなタイプのを三ヶタ撃てるかどうかも怪しい。唯一の救いは――

「しかし彼、見切る技術だけはどうでもないレベルだねえ。ご主人の『レイディアントトレジャー』を初見で、しかも飛べないってのに完全回避するなんて……」

ナズーリンが感心したように話す。実際の所、これには聖を含めた全員が驚いていた。なんでも、彼は『自然か不自然かを見分ける程度の能力』を持っており、その応用で弾幕を見切っていたらしい。交代で彼と直接戦った（といっても、参真は回避するだけだが）のだけれど、移動を制限されているにも関わらず、出来る範囲で、最大限の回避行動をとれていた。並みの妖怪の弾幕なら、カスリもせず乗り越えられるかもしれないが……それでも、「攻撃できない」というのは痛すぎる。

「……」

「雲山が『素人にしては上出来だ』ですって。あとは、霊力をどう

するかだけですが……姉さん。何か良い手はない？」

「やはり、回数を重ねるしかないでしょう……時間はかかるかもしれないが、それ以外に手がありません……」

スペルカードールの性質上、相手が調子にのってスペルを連射してくれば、彼にも勝ち目がある。しかし、慎重な妖怪が敵となると、人間である参真が、妖怪相手に持久力で勝てるはずもない。そうになったら、後はなぶり殺しにされるのを待つばかりである。それを避けるには……やはり、本人の霊力を強化していくしかない。毎日弾幕ゴッコを続けていれば、そのうち力はいくしてくるはずだ。

「参真く大丈夫？ 手加減なしでも大丈夫と思ったんだけど……」

「うう……心配かけてごめん、ぬえちゃん。君の能力と僕の能力の相性が悪かったみたい……」

先ほどぬえと戦った際、大量に被弾し気絶していた参真が、ようやく目を覚ましたようだ。今までそこそそ力を出しても大丈夫だったものだから、ぬえにも本気を出させたのだが……とたんに動きが悪くなり、あっさりと撃沈していたのである。

「『正体を判らなくする程度の能力』と？ なんで？」

「正体がわからないものが、どうして自然か不自然かわかるのさ……」

……あ、村紗さん。一戦お願いできますか？」

「動けるの！？ 無理しない方がいいんじゃない？」

むくりと彼は起き上がり、その両足で立ちあがる。聖たちも回復系の魔法を使用していたから、動けなくはないかもしれないが……皆が心配する中、青年は凜と言いつつ。

「いけます！ いつまでもお世話になりっぱなしじゃ悪いですから！」

「ならいいけど……今日はこれで終わりだよ？ 身体壊しちゃだめなんだから」

そして、村紗は空を飛び、参真はその姿を捕える。

「スペカは二枚にしておくよ？ 一枚でやることなんて、まずないからね？」

「はい！　お願いします！！」

気合い十分に参真は叫ぶ。それと同時に、村紗の攻撃が始まった。水をバラ撒くような弾幕が迫り、青年がそれをひたすらに避ける。始めはそれだけだったが……

「……！？」

ぬえとの勝負で、何か感じるものでもあったのか、移動しながら弾幕を練り上げ、いくつか発射してきた。が……

「密度が甘いよ！」

「く……」

いとも簡単に、水蜜は弾と弾の間を抜けてしまう。通常の後、いくつか彼は弾幕を放っていたが……狙いは悪くないものの、密度が足りない。おまけに、大した量も撃てずに、彼の動きがみるみる鈍化していく。霊力不足による疲労……限界が近いのは明らかだ。

「つつ！？」

それでも霊弾を撃とうと、必死に足掻く。しかし、足元に気をつけていなかったせいか、足を取られ、手に霊弾を構えたまま、地面に激突しそうになった。

「いけない！　参真！！　霊弾をどこでもいいから飛ばせ！！」

とっさに星が叫ぶ。このまま衝突すれば、霊弾の衝撃が彼の腕に伝わってしまう。最悪、二度と使い物にならないかもしれない。だが、悲鳴に近いそれは虚しく響き――彼はそのまま倒れこんだ。

惨劇を想像し、思わず目を背けたが……いつまでたっても、爆発音などはなく、恐る恐る参真を見ると……彼は傷一つ負っていないかった。聖が駆け寄り、彼に異常がないかどうかを確認する。

「はあ……星さん。びっくりさせないでくださいよ。別に何も――」

何事も無かったように、参真が立ち上がろうとしたその時、異変は起こった。

「！？　これは一体……？」

ちょうど彼が、地面に霊弾をぶつけてしまった辺り――そこから、

霊力が発生していた。しかも――

「ちよっとちよっと！　これ、周りの植物とかからも、霊力吸ってない！？」

一輪の言うとおり、その地点を中心に、周辺にあるものから霊力が集まってきている。初めての事態に、聖たちが混乱する中、参真は霊力の集まった地点に手をかざした。まるで何かに吸い込まれるように。あるいは……導かれるように……

「……」

そつと目を閉じて、チカラの塊に触れる。集^{つど}ったそれは彼を拒むことなく、しばらくはすがままにされていた。やがて青年は、慈しむようにそれを撫で、「ありがとう」とつぶやくと……光が霧散し、霊力が元の場所へと戻っていった。ひどく神秘的な光景に、誰も言葉を発せない時間が続き――へなっと、参真が両膝をついたところで、ようやくハッと、皆が我に返った。

「参真さん。今のは……？」

唐突に集まった外からの力に、誰もが疑問に思う。一体あれは何だったのか？　その問いに、参真も曖昧に答える。

「……僕も、よくはわかりません。わかりませんが――誰かが……いえ、『誰か』というには、大きすぎる『何か』が、僕に力を貸してくれようとしていた。そんな感じがしました。ハハ、すいません。あまりにもスケールの大きいものでしたから、震えが……」

崩れそうになる参真を、降りてきた村紗が支える。それで安心したのか、彼はそのまま眠ってしまった。

残された五人と入道一人が、今の出来事を反芻する。

「あれで『貸した』か……冗談じゃない。私が本気出しでも、あれだけの霊力は扱えないよ？」

「しかしナズーリン……『周りから霊力が集まっていた』ということを考えて、あながち嘘でもなさそうですね。私が本気出しても、あれ」

むむむ、とネズミの妖怪が唸る。実際のところあの霊力を制御できれば、星と撃ちあえるくらいにはなるかもしれない。それだけの

霊力が、一瞬で集まってくるなど……しかもそれが『貸しだされた』霊力となると、タダごとではない。ナズーリンが信じがたいという表情をしているのも、仕方のないことではある。

「これは、ちょっと調べる必要がありますね……一輪、手伝いをお願いできるかしら？」

「合点承知だよ姐さん!! 雲山もいい？」

「……」

「参真クンはどうするかって? ……ぬえ! 水蜜! 任せていい?」

「「オツケー!!」」

こうして……先ほどの現象が何だったのか、命蓮寺のメンバーは探ることとなったのであった――

十三話 特訓 そして……（後書き）

という訳で、主人公強化フラグが立ちました。

本編でも書かれているように、ぬえと主人公の能力は相性最悪です。

本来彼は、自然か不自然かを見分けることが出来ますが、「正体不明」にされると訳がわからなくなります。例えば、宇宙人が目の前に来てるのに、そいつがどういう状態なのか？なんてわかりませんよね。おまけに普段わかるものが分からなくなるわけですから、テンパってしまっただけです。

また、弾幕ゴッコにおいて、彼の能力は強力な類になります。「自機狙いの弾幕」を指定すれば、それ以外の弾幕が不自然に見える……早い話が、「初見にも関わらず、すべての弾幕が自機狙いかどうかを見分けられる」というね。咲夜さんの「ミステイクション」を、事前情報一切なしで避けれるんだぜ……これ……紅魔境EXクリア出来ない私には、喉から手が出るほど欲しいスキルですよ……495年の波紋、鬼畜過ぎるぞ……！！

十三・五話 紅き瞳は何を見る？（前書き）

更新ができないと言ったな……あれは嘘だ

十三・五話 紅き瞳は何を見る？

幻想郷にある霧の湖。その先に深紅の館、紅魔館がある。

悪魔の棲む館と言われるそれは、外観が真っ赤に染まっており、威圧感満載の創りになっている。

その館のメイド長、十六夜 咲夜は、主のために『あるもの』を届けに廊下を歩いていた。

「お嬢様、『文々。新聞』をお持ち致しました」

「ふむ……御苦労さま」

見た目は遥かに、咲夜より幼く見えるこの館の主、レミリア・スカーレットは満足げに呟いた。

「今日の記事はどうだった？ 最近は大したものがあったけど……」

「はい、どうやら外人の方が来たようです。相当酒に強いようで……一面記事になっていました」

この新聞は、咲夜としてはあまり評価は高くない。堅実な情報源としては怪しいものと考えている。しかし主にとって、そんなことはどうでもいいということを、以前咲夜は主から聞いていた。

彼女……レミリア・スカーレットは、『新聞を読む』という習慣がなかったらしい。もちろん、それがどういうものかは知っていたが、人類の天敵である種族、『吸血鬼』である以上、住所を教える訳にもいかず……故に、新聞自体が珍しいものだったそうだ。興味をもった彼女は、幻想郷に入っすぐ購読を開始。読み始めたころは、途中で新聞の形を崩してしまい、上手く読めていなかった主を、咲夜が指導することになったのも、今ではいい思い出である。

「ふうん……『絵師』ね……面白そうじゃない。ちょっと運命を操作して……!？」

「……如何なされました？」

「ふふふ……咲夜。こいつ、本当に面白いわ。理由はよくわからない

いけど……この人間の運命を操作できない」

主はどうやら、『運命を操る程度の能力』を使おうとしたらしい。しかし、何故かそれができないようだ。その割には——いや、だからこそだろうか？ 永遠に紅い幼き月は、ひどく愉快そうに嗤っていた。

「まあ、いいわ。こいつは珍しいものを探して、幻想郷中を回ってる。その内ここにも来るだろうし、あまりに遅いようなら……美鈴あたりを使いに出して、彼を招こうかしら」

主はそのうち、彼をここに置くつもりらしい。ならば、自分のとるべき行動は——

「——では、来賓用の備品を確認して参ります」

いずれ来たる来客への準備。必要な物の、補充と備蓄だ。

「……本当にあなたは優秀だわ。出来るだけ彼を長く留めて置けるように。お願いね」

「畏まりました」

主の称賛を受け、恭しく頭を下げる。

そして完全に瀟洒な従者は、静かに行動を開始した。

十三・五話 紅き瞳は何を見る？（後書き）

紅魔館、咲夜さん視点のお話。

紅魔館はだいぶ先になる予定ですが、フラグだけ先に立てておくかと。本筋とは逸れるので、十三・五話としました

十四話 捨てられたモノ 拾うモノ（前書き）

今回は全力で遊んでみました。

十四話 捨てられたモノ 拾うモノ

あれから、一週間が過ぎた。

しばらく休んだあと、聖たちの協力や再現を繰り返したものの、以前起こった現象の正体は謎のままだ。けれども、全くの無駄足だったかという点、そうでもない。

「ヒヤア！！ 人間ダアアアアアアアアアアアアアアアア！」

勢いよく飛び出してきた妖怪を、彼は圧縮霊弾を撃ち込んで撃退する。こんなことは、あの力を使う前までは考えられなかったことだ。

どうやら自分は、地面に靈力を送ることで、周りにある靈力を集め、一時的に使えるようになるらしい。当然、周辺の環境に依存するスキルだが……条件さえそろえば、星と同等の出力を得ることも可能だという。

「ふう……だいぶ安定してきたかな……」

作務衣を纏った外来人 西本 参真は、弱い妖怪ならあっさりと撃退できるほどの靈力を使役できるようになっていた。先ほど放った圧縮靈弾も訓練の一環で、今彼は命蓮寺から少し離れた場所をうろついていた。妖怪退治の依頼がないかとも思ったが、命蓮寺の――正確には聖の方針で、いよいよどうしても、というものの以外の依頼はないらしい。そして、そこまで追い込まれるような妖怪を参真がどうこう出来るはずもなく……：ようやく出た案が、「適当にフラついて、襲ってきた妖怪をひたすら撃退する」という、まるでRPGゲームのようなものだった。

「効率悪いかとも思ったけど……案外悪くないね、これ」

靈力的には格下とはいえ、やっていることは実戦だ。殴られれば痛いし、負ければ喰われる。より効率よく、より安定して相手を倒す方法を学ぶにはちよūd良い。これで飛べれば文句なしだったの

だが……参真にはそれができない。

なぜならば、彼の霊力自体はほとんど増えていない。借りものの霊力も、地面に触れていなければ供給されないため、空を飛んだ瞬間、一気に霊力が枯渇してしまう。そのため、てくてく森を歩きながら、エンカウントした妖怪を叩き潰す、という作業を続けることしかできなかった。

「さて、そろそろ戻ろうかな……？ うわ……」

彼が命蓮寺の方へ歩こうとした時、ポツリと肩に水滴が落ちた。気になって上を見上げると、大きな雨雲が空を覆い隠してしまっていて、今にも降ってきそうな気がする。とりあえずは、近くの大樹の下に身を寄せ、雨宿りすることにした。

直後、地面を穿つ水流の音が、周辺を包み込む。みるみる視界は悪くなり、森林は一層深みを増した。

(まいったな……傘なんて持ってないし……)

これではしばらく帰れそうにない。どうしたものかと思い悩んでいると……

ガタン

ちようど参真の隣、木の陰の死角になっていた場所から物音が聞こえた。

「……？　なんでこんなところに？」

自分の願いが、天にでも通じたのだろうか？　音源に近づくと、唐傘がひとつ転がっていた。……よく見ると所どころ穴が空いてたり、試しに開いてみると骨が一部折れていたりひどい有様だが――「まあいいや。ないよりいいし……それに傘ないと不便だし、あとで修理して使おうかな」

とりあえずオンボロ傘を拾い上げ、命蓮寺まで差していくことにしよう。持ち運ぶにはやや大きい気もしたが、古びた感じが気に入った。ついでに直して私物にしてしまおうと決めた彼は、唐突な雨にもめげず、上機嫌で帰って行った。

時は、雨が降り出す少し前に遡る。

「悪い人間は、いねーか？」

そう呟きながら森を徘徊するのは、赤と青のオッドアイの少女。愉快な忘れ傘こと「多々良 小傘」。日々人間を驚かそうとしているのだが、ここ最近は上手くいった試しがない。そもそも妖怪がでる森の中では、人間との遭遇率も悪く――彼女は少々、相手に飢えていた。そんな時。

「ヒヤア！！ 人間ダアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！？」

どこかしらで悲鳴が上がり、ズドン！！ と衝撃がこちらにも伝わってきた。霊力持ちの人間らしい。とりあえずは、気づかれないようにそっと近づいてみることにした。

さほど探すこともなく、妖怪を撃退した人物が姿を現す。青い作務衣の青年で、かなりおっとりした感じがした。幸い、気がつかれていないらしい。このままこっそり……とも思ったが、今までだと途中で気がつかれてしまい、驚かすことができていなかった。何か変化をつけよう。妙案がないかその場で思案すると――

ぽつり

木の葉の揺れる音を聞き、雨の襲来を告げる。すばやく察知した青年は、いそいそと近くにいた大きな木に寄っていった。それを見ている内に……小傘は閃いた！

（ふふふ……私が傘に化ける↓彼が見つける↓ボロボロから投げ捨てる↓もう一回戻ってくる↓不思議に思う↓でも捨てる↓うらめしや↓彼が驚く↓計・画・通・り！！）

元々打ち捨てられた傘である彼女は、いつでもその姿に戻ることができる。ただ、捨てられた時の状態なものだから、かなりみすぼ

らしい状態になってしまふ。本当はあまり他人に見せたくないものだが、それで驚かせることができるならまあいいか。と思った彼女は、早速変化し、ボロボロのからかさへと変身した。彼の近くに着地するよう大きく跳ね、派手に音を立てる。地面にぶつかる時ちょっと痛かったが、小傘は我慢した。

「……？　なんでこんなところに？」

作戦成功！！　あとは彼が、「ケツ、使えねえ……」とでも言うてくれれば、全身全霊の「うらめしや〜」ができる。だが……ここです予想外の出来事が起こってしまった。

「まあいいや。ないよりいいし……それに傘ないと不便だし、あとで修理して使おうかな」

ヒョイと持ち上げ、そのまま自分を差して歩いていく。これには、小傘も動揺せざるを得ない。

（ふ、普通こんな状態の傘を差さないよ！？　でも捨てられるよりは全然いいんだけど……うう、まずいなあ……ちよっと驚かしづらいよ……）

自分を使ってくれた相手を、驚かすというのは気が引ける。でもきつと、玄関あたりで今度こそ捨てられるだろう。そのタイミングで仕掛けよう！　と、気持ちを切り替え、虎視眈眈とチャンスを探うことにした。

しばらく彼に差されていると、この前異変で騒ぎになった寺にたどり着いた。どうやらここで寝泊まりしているらしい。玄関先には、奇妙な羽をもった少女がいて、彼を出迎えに来ていた様子だ。

「参真！！　良かった……急に雨が降ってきたから心配したんだよ！？　その傘は？」

「落ちてたから拾いました。ちよつとひどい状態なので、裁縫道具貸してもらえます？」

「直すの？　新しいの買った方がいいんじゃない？」

「お金もってないです……それにMOTTA INAI！！　ちゃんと直せば使えますよ」

……またしても、小傘は機会を逃してしまった。誰にも気がつかれないのはいいことだが、いつのまにかおかしな方向に話が進んでしまっているような気がする。このままいても大丈夫だろうか……と不安になってきた。

そんな彼女の心情など気にもせず、男は部屋に小傘を連れ込み、借りた裁縫道具を構えた。

「よいしょ……つと……からかさは直したことないけど……この目で見分けながらやれば何とかなるよね」

（え、ええええええええ！？　大丈夫！？　大丈夫だよね！？　変な改造とかされたりしないよね！？）

彼が善意で動いていることは間違いないさそうだが、いきなり不安な発言が飛び出した。見た目以上に傘は複雑な構造をしている。素人が到底直せるものではないのだが……

「ええと？　とりあえず古布で補強してつと……骨も、余ってた木材でなんとかなりそう。まさか、壊れた家の機材が役に立つなんてね……いやはや、何がどう役立つか分かったものじゃない——」

独りごとを呟きながらも、その手はなめらかに針を操り、折れた骨を器用に入れ替えていく。作業効率はあまりよろしくないが……特にミスをすることはない。

「ふあ……やっぱ慣れないことはするもんじゃないね……ま、ここまでやったら最後までやり遂げようか！」

あくびをしながらも、作業を続ける青年。その真摯な眼差しに……なんだか小傘は申し訳なくなる。驚かすつもりでこの姿に化けたのに、その相手に大事にされ、直されているのだから。

（変わった人……でも……悪い気分じゃないかな……）

一度捨てられ、化け傘となった身ゆえ、道具として大切に扱われるのがずいぶんと久々なことだ。少なくとも、最後に使われたのがいつだったかを、思い出せないぐらいの年月は過ぎている。久々の人の人情に、彼女はその身を預ける。疲れているのか、彼は所どころコックリと首が動いていて、そのたびにハツとしている。

(も、もう寝た方がいいんじゃない……)

かくいう自分も、彼にいじられてからずっと起きてるものだから、そこそこに眠い。ましてや彼は人間である。大丈夫だろうかと心配していたら——コクンと、首をうつむけたまま、動かなくなってしまった。

けれども、それと同時に——小傘の修理が終わっていた。最後の最後まで、彼はやり遂げてくれたのだ……

(……)

言葉も出ない。一生人の姿真似をしながら、人を驚かし続けることになるだろうと。自分の余生はそういうものだろうと思っていた。けれども彼は、もう一度本来の役目をこなせるようにしてくれた——付喪神として、これほど嬉しいことはない。

(つて感激してる場合じゃない！ この人が風邪引いちゃう！！)

恩人の手からすると抜けだし、自分の姿を人型に変える。奥にあったフスマの中から、布団を一つとりだして、彼を寝かせた。

(あ……私も眠い……)

もう一つ布団があったかどうか、良く思い出せない。もう意識が擦り切れ、今にも眠ってしまいそうだ。手ごろな所に寝床は——目の前にあった。

(いいや……この人と一緒に寝ちゃえ……起きる前に化ければいいや)

寝ぼけてもお気楽思考全開で、彼女は青年の隣へと潜り込む。

(あったか……それになんか心地いい……)

そして小傘は、そっと彼を抱きしめて——彼女の意識は、そこで途切れた。

十四話 捨てられたモノ 拾うモノ（後書き）

突然、「かわいい小傘ちゃんを書きたい」という謎電波を受信。
衝動の赴くままに書いたところこうなった……この先の展開考えてない
や……しかも本筋もちょっと修正しないと……ま、まあ、若さゆえ
の過ちということでW W

十五話 命蓮寺の珍事 青年の喜劇？（前書き）

小傘ファンの皆さま！ お許しくださいっ！！

十五話 命蓮寺の珍事 青年の喜劇？

翌日——命蓮寺の一室にて——

夜遅くまで作業を行っていた青年は、未だまどろみの中に意識を置いていた。

しかし、そのまどろみが妙に心地いい。外にいたところは、寝袋で寝るのが日課だっただけに、とっと起きてしまいたいという気持ちが強かったのだが、命蓮寺の布団があまりに良いもので、布団で寝るのがこれほど気持ちいいものだったかと、実感させられることとなった。そして今も、自分はその心地よい場所にいるのだが……

（ふとん……敷いたっけ……？）

まだ意識がはつきりしないが、確か昨日はあのまま眠ってしまったような気がする。おまけに、布団だけにしては妙に温かいし、柔らかい感触と甘い匂いもする。まだ眠りたいという欲求を抑え、寝ぼけ眼を擦りながら開くと——

「すー……すー……」

目の前に女性が——見ず知らずの女性が——同じ布団で寝ていて、しかも自分に抱きついていないではないか。

「……あ？」

たっぷり三秒、参真は硬直した。夢を見ているのではないかと現実逃避しようとしたが、彼女の健やかな吐息が、嫌でも現実であることを認識させる。健康的なうなじがのぞき、赤い唇は熟れたリングのよう。それと対照的な涼しげな水色の髪を持ち、肌つやも非常に良い……思わずゴクリと、生唾を飲み込む。

（ちよ……！ 色々まずいって……！！）

実のところ、参真は女性への免疫は皆無だ。幼いころに母が離婚し、さらに絵を描くことに夢中だったせいで、「被写体」として女性を見ることはできても、『女』として女性を見たことなど一度もない。おそらく、『鈍い』部類に入ると自覚はしているものの——

さすがにこれは、意識せざるを得なかった。

「! ! ? ! ! ! ? ? ? ! ? ! ?

理性に追い打ちをかけるように、彼女が強く参真を抱きしめる。男性にはない膨らみが押しつけられ、年頃の娘の持つ香りが鼻腔をくすぐった。

耳元で囁きながら、肩を強く揺する。本当は大声で起こしたいところだが、もしそんなことをして誰かにこの状況を見られたら――

「参真さん！　いつまで寝ているので……す……か……！？」

もう色々と終わつた。

けれども男性というものは、だいたい悪者扱いされる訳で——そんな主張など、きつと意味のないことだ。現に——

顔を真っ赤にして怒鳴っている毘沙門天の弟子は、こっちの言い分など聞いてくれそうになかったのだから。

十五話 命蓮寺の珍事 青年の喜劇？（後書き）

うん。やっちゃったんだZE☆

前のタイトルで、「ゆうべは、おたのしみでしたね？」を使ってしまったことを激しく後悔することになりましたorz うん。小傘が出てくるシナリオは思いつきだから仕方ないね。

十六話 明朝の騒動（前書き）

PVアクセス二万、ユニーク2500到達！

元氣出てきた！ 一日に二話投稿しちゃうんだZE☆
追記…オウフ。ミス八犬伝……修正いたしました。

十六話 明朝の騒動

「参真さん——あなたという人はっ!!　ここは神聖な寺ですよ! ?　見知らぬ女性を部屋に連れ込み、一緒に布団で眠るなど……!!　あの娘は誰ですか! ?」

「だから、僕にもわからないって言ってるじゃないですか!　目が覚めたらあの状態だったんですよ!」

今朝、命蓮寺では朝早くから喧騒が響いていた。

なんでも参真の部屋に見知らぬ少女がいて、一緒に布団で寝ていたという。

第一発見者の星は二人を引き離して、起きていた参真をお説教。正確には、少女はいくらやっても起きなかったらしいのだが……

「そんな都合のいい話がありますか!　私の前であり嘘を言わない方がいいですよ! ?」

「ホントに何もわからないんっですってば!!」

「ええい!!　だまらっしゃい!!」

先ほどから星と参真はこの調子で、話が一向に進まない。横目でその様子を見つつ、一輪はお茶を啜った。

「雲山……どう思います?」

彼女のが使役している入道に話しかける。すると、フワフワ漂っていた小さな雲が集まり、オヤジのような顔を形作る。そして、一輪にしか聞こえない声で答えた

『……嘘を言っているようには見えん。参真の性格を考えると、女性を連れ込むような不埒な輩ではないはず。かといって、あの娘がいたのも事実……彼女の話を聞くしかないだろうな』

至極真つ当な意見に、一輪も頷く。今までこれだけの女性に囲まれていながら、邪氣の一つも洩らさなかった参真だ。その彼が、やましい気持ちを持って、よそ者の娘と寝るなど考えにくい。

「いや、参真も大胆だね……なかなか可愛らしい子じゃない。いつ

連れ込んだんだろう？」

謎の少女のほったたけをつつきながら、この状況を楽しむように村紗が言う。聖とナズーリンは、朝食を作っているためこの場にはいないが、後のメンバーは参真にあてがった部屋の前に来ていた。

「そうだよね……物音とか一切しなかったし、誰も気がつかないなんてことあるのかな？ 私の能力ならなんとかなるかもしれないけど……」

それについて一輪は、ぬえと同意見である。参真の能力では気配などどうにもならないし、これだけの人数と実力者がいて、誰も気がつかないのはおかしい。一輪としては、ぬえが手を貸したのでは……などと思っていたが、今の発言でそれもなくなった。とそのとき、微かに彼女がうめいた。ようやく眠りから覚めるらしい。

「ん……ふぁ……あれ？ あなたたちは誰？」

（（（（それはこっちのセリフです……）））））

開口一番に、全員からツッコミをもらう羽目になる彼女。しばらくきよろきよろしていたが、参真を視界に捉えると……エヘへと照れたように笑いかけた。

「あ、おはよう昨日はありがとう。風邪ひいてない？」

青年を気遣っている様子だが、当の参真は訳がわからないようだ。生返事で「うん。大丈夫……」とだけ答えて、困惑を深めている。

見かねた星が二人の間に割って入り、

「単刀直入に聞きましょう。昨日、あなたたちは何をしていましたか？」

疑問を消化するための質問を少女へ向けた。皆も注目するなか、彼女は嬉しそうに話す。

「昨日ね……雨の中捨てられていた私を、彼が拾ってくれたの。私はすぐくみすぼらしい恰好だったから、『すぐにまた捨てられる』と思ってただけど……彼はすごく優しくしてくれて……ちゃんと私のことを見てくれて——だから、私は彼のモノになるって決めたの！」

……正直なところ、話が全く見えてこない。冷静に見れている一輪たちからすれば、そう感じられた証言だったが、まずいことに彼女は地雷を――特大の、しかも参真にとっての地雷を――全力全開で踏み抜いてしまっていた。

話を聞いた星は、「にいいいいっこり」と……顔だけの笑顔を浮かべ、静かにいう。

「なるほど……お二人の関係はよーくわかりました。あなたは、なかなか複雑な事情をお持ちのようですし、正直に話したので不問としましょう。ですが……『参真サン』」

最後の言葉を発した瞬間、部屋の温度が一気に10℃ほど下がった気がする。それほど冷気と怒気を纏った声が部屋に響いた。それを直接受けていない一輪たちも、思わずたじろぐほどの気を放出しながらも、先ほどと変わらぬ『笑顔』であることが恐ろしい。

「……もうこれで言い逃れはできませんよ？ さあ……お前の罪を数えろ！！」

「そ、それでも僕はやってない……！」

「問答無用！！ 全弾持って逝きなさい！！」

叫び声とともに、星は妖力を完全開放。無数のレーザーと弾幕が、一斉に彼に襲いかかった。

聞くに堪えない絶叫が、命連寺に響き渡る。爆炎が消えた後に残っていたのは、こんがり焼け過ぎてウェルダン状態の「人のような何か」のみ。

「だ、大丈夫！？」

水色の髪の彼女は、彼のことを良く思っているらしい。悲鳴に近い声をあげて、参真の介抱に向かっていく。残された三人と入道は、星を決して怒らせてはいけなさと、心に刻みつけたのであった……

十六話 明朝の騒動（後書き）

小傘ちゃんも嘘はついていないんですけどね。星が「ピー」な関係と勘違いしてますからね。そういう視点で小傘のセリフを聞くと、すごくそれっぽく聞こえますよ。お試しあれ☆

十六・五話 追想という名の悪夢（前書き）

一見、訳のわからない話です。

が、ここに入れておくべきだろうと考えたので入れました
それと、今回あとがきは無しです。余韻は大事ですからね

十六・五話 追想という名の悪夢

唐突に訪れた、深く不快な闇の中に青年は立たされた。ここにくる直前に、何か強い衝撃を受けた気がするがよく思い出せない。

不意に強い声が聞こえる。

それは誰だったか、彼は無理やり思い出させられた。

その声は教師だ。才能があるといってくれた。

その声は評論家だ。若くして素晴らしいと語っていた

その声は友人だ。スゲエとただほめちぎっていた。

その声が、その声が、その声が――

自分の絵を、責め立てる。

僕は始めから知っていた、その声が――称賛の音が――「不自然」だったことに。

僕は知っていた――この人たちは、「絵」を見てくれないことに。

だから、僕を世界から引き摺り下ろした。

違う、違う！ 違う！！ 違う！！！！

僕はただ描きたかっただけだ。

勝手に評価してきたのはお前たちだ。

勝手に被害者になったのもお前たちだ！

何で僕の世界の邪魔をする！？

何で自分の持っている世界を他人に押し付ける！？！？

怒り――間違いないこの感情は怒り――

その怒りを「絵」という形で表現し、それを外のやつらが批判する。

気がつけば自分は、ただ部屋の中で絵を描くだけの機械になっていた。

でも――それも限界。

視える世界、感じられる世界には限界がある。

精神の内側も、目に映る世界も、もうすべて視つくした。もう描けるモノなど存在しない。

生きている意味を見失い——自殺を思いつく。

——不意に、扉が叩かれる。

扉の外から誰か女性の声がする……だが、それはおかしい。母は離婚して、家族に女性はいない。

だから、聞こえるはずがない声に違和感を覚える。

そつと僕は——その扉を開けた——

十七話 ドジっ虎☆ちゃん！（前書き）

説明し忘れていた気がするので、ここで独自設定をば

小傘ちゃんは、自在にからかさモードと人型に姿を変えます。

お隣をイメージしてくればよろしいかと。違いは、彼女はからかさでも喋れます。……あれ？　しゃべるからかさって怖くね？　と

いう突っ込みは無しの方で！！

追記…なんか変なところで文章途切れてるー！？　失礼致しました
！！

十七話 ドジっ虎☆ちゃん!

「しっかりしてよ! 独りにしないで!!」

赤と青の瞳の少女が涙目になりながら、必死に参真の体をゆすつている。先程の制裁により黒こげ状態なので、見た目の上ではひどい状態だが……

「大丈夫です。一応死なない程度には加減しておきました。しかし……出会ったばかりなのに、ずいぶんと好いているのですね」

それは確かに、と村紗も思った。彼女の話によれば、会ったのは昨日ということになる。その割には、彼女はずいぶんと、参真と親しく接しているように思う。彼はそんな彼女に困惑していたようだが……

「だって……私の事捨てずに使ってくれて、しかも夜遅くまで直してくれたんだよ!? こんなオンボロ傘なのに……それなのにどうして? 彼は、悪い事なんてしてないよ!」

必死の形相で、彼女は星に突っかかる。どうにも、どこか話がかみ合っていないような気がしてならない。何か見落としているような――

「オンボロ傘って……もしかして昨日、参真が拾ってきたアレのこと? 確か、古布と自分の家の木材で直すとか言ってた……でもそれって関係あるの?」

ぬえも同じ思いだったのか、奇妙だった点を指摘する。どうやらぬえは、彼女の言う傘を知っているようだ。そして……彼女は驚愕の事実を告げる。

「その傘が私なの!!」

「「……え?」」

あまりに意外すぎる発言に、その場にいた全員が固まった。混乱したまま村紗が呟く。

「か、傘? あなたが? 妖力は感じるけど……そんな妖怪……」

「そ、そういえば……姐さんを封印から解いた博麗の巫女が、『道中で唐傘お化けを吹っ飛ばした』と言っていたような……まさかあなた、唐傘妖怪？」

恐る恐る聞くと、彼女はコクリと縦に首を振った。

「そ、そんな……じゃあ彼のモノになるといいうのは——」

「『道具』として彼の物になるってこと！」

顔を青くした星が、一つ一つ彼女の先ほどの言葉を反芻していく。
「優しくされたというのは——」

「眠ってしまうまで、必死に私のことを直してくれたことよ！」

唐傘お化けの彼女は、叫ぶように言い返していく。

「じゃ、じゃあどうして同じ布団で——」

「そのままにしてたら風邪引いちゃうから、布団を敷いてあげたの。でも私も眠かったから、そのまま同じ布団で寝ただけ！」

質問を繰り返していく度に、星の青い顔色がさらに青くなっている——

「不埒なことは——」

「するわけないよ——！」

……ようやく、勘違いしていたことを認識できたようで——

「また……やってしまった……!!」

ずしりと金髪をなびかせて、その場に両手をついた。ありありと自責の念が見て取れる。今の彼女なら、焼き土下座すらやってのけてしまいそうだ……

意気消沈しているドジっ虎を見て、村紗はつくづく思った。

（ほんと難儀な性格してるわよね……星って）

星は正義感が強いのに、ドジや勘違いが多いせいで、自分を強く責めてしまうことが多い。宝塔をしょっちゅうなくしたりと、トラブルが絶えない。仕えているナズーリンも大変だろうと思いつながら、彼女の代わりに村紗が慰めた。

「ほら、星！ 落ち込んでないでちゃんと参真を手当てしよう？ 謝るのはそのあとでいいじゃない」

「そ、そうですね……ご本人も氣絶していますし、お願いできますか？ えっと……」

さすがに自分で手当てすると言いだしづららしく、星は瞳の色の違う少女に頼もうとして……言い淀んだ。そういえば、まだ彼女の名前を聞いていない。

「あ、私？ わかった！」

「ちょ、ちよっと……！ ……行っちゃったよ。意外と素早いね」名前を聞こうとしたつもりが、そのまま彼女は参真を連れて奥の部屋へ。稲妻よろしく駆けていってしまい、あっという間に見えなくなってしまう。

「どうする？ 追いかける？」

「別にいいと思います。それより、星を回復させないと……」

さっきまで烈火の如く怒鳴り散らしていた毘沙門天の弟子は……まるで子猫が寒さで震えるように、頭を抱えてガタガタと震えていた。相当、今回の失敗が精神にキているらしい。少し前まで話せていたが、今はとてもそんな状態ではなさそうだ。

「参真さん申し訳ありません家といい今回のことといいあぁなんて私はダメなんだまたナズーリンにも迷惑がかかるでしょうもう毘沙門天の弟子も名乗らないほうがいいかなそもそも私妖怪ですしやっぱりこんな大役務まる訳なかったんだアハハハハハハハハハ」

ブツブツと鬱全開で暴走する星。先ほどとは違う意味で、周囲の温度が急降下していく……

「うわ……こりゃ重症だわ。こういう時どうすれば……」

「確か……えいっ……！」

ぬえが掛け声と共に、手刀を星の首筋へと叩きこむ。「メルウ！」と奇声を発して、そのままパタリと倒れ、星は動かなくなってしまう。

「ぬ、ぬえ！？ 一体何を！？」

「え？ モノが壊れた時は、斜め45度から叩けば直るって……」

「「何か違う気がする……！」」

その場の混乱が収まった代わりに、怪我人が一人から二人へと増えてしまった。むしろプスプスと星の頭から湯気が出始めている。まだ朝食も済ませてないのにこの忙しさ……今日は慌ただしい一日になりそうだ……

十七話 ドジっ虎☆ちゃん! (後書き)

星蓮船異変は紅白が解決した事になってます。

そしてリアルでは星蓮船も購入。どんどん自分から東方にはまりに行ってるなWW にしても小傘ちゃんの扱いひどくね? 特に早苗さん……蕎麦屋って……

十八話 からかさの恩返し（前書き）

あのあと星蓮船を続けてプレイしてみましたが……幻想郷住民攻撃的過ぎだろ……小傘ちゃんだけじゃなく、他の面々もひどい物言い……なんだか私の小説内のキャラがまとも過ぎて、原作っぽく見えなくなってきた……

それはともかく、PV30000、ユニーク30000人突破!!

感謝! 感激!! 雨あられでござーい!!!!

十八話 からかさの恩返し

星が気絶させられたころ――

多々良 小傘は、青年を抱え、昨日の部屋へとやってきていた。まだ敷いてあった布団に彼を寝かせ、小傘はそつと額に手を当てた。

「うん……大丈夫そう……はやく目を覚ましてね」

呼吸もしてるし、体温も十分。手加減していたとは言っていたが、黒こげの人間を見てそれを無事だといわれても説得力はない。きちんと自分で確かめたあと……とりあえず手拭いでも頭に乘せようと思ひ、立ちあがろうとした時――

「……呼んだ？」

最初の方はかすれてよく聞こえなかったが、確かに彼の声でした。そつと振り向くと、青年は上体を起こしてこちらを見ている。それに……何故か、瞳から滴が零れてきているではないか。

「ど、どうしたの！？」

「夢を見ただけだよ……気にしないで」

そうはいうものの、どこことなく表情は暗い。理由はよくわからないが……あまり深入りするのも無粋だろう。一旦、話題を変えようか考えて……その前に、彼に謝らないといけないことに気がついた。「そっか……あ、今朝はゴメンナサイ……誤解させるようなことをして……」

「うん、すごくびっくりしたよ……気になってたんだけど、君は誰？」

「私は、昨日あなたが拾った傘だよ」

至極当然のように小傘は宣言。しかし青年は……わけがわからない様子で、しばし硬直したあと……ようやく言葉を紡ぎだせた。

「……ごめん。今なんて？」

しかし、困惑の色が強く、どうも半信半疑らしい。

「信じられない？ 見てもらったほうが早いかな？」

言うや否や、ポンツと一つ音を立てると同時に、周辺に白い煙が舞い。一瞬でカラカサへの変身が完了する。小傘にとっては大したことないのだが、彼にとっては新鮮なことらしい。ひどく驚いているようだ。

「！！？？ どーなってるの！？」

「え？ 別に普通……」

「ってうわ！？」

「？？？ どうしたの？」

ますます驚く彼。こんだけ驚かれると、ちよつとつまみ食いしたくなるが……とりあえず我慢した。大切な持ち主との会話である。粗相があつてはいけないと自戒する。しかし、何をそんなに驚いているのだろうか？

「どうしたの？ じゃないって……いきなり傘から目玉と舌が出てきたらびっくりするよ。どうなってるのさ……本当に……」

「？ そんなことで？」

基本、小傘は紫の化け傘を差しているが、人型の時なら出し入れ自在で、唐傘状態だと喋ろうとする時に、紫の傘に目玉と舌がついてる傘になる。喋っていなければ、何の変哲もない唐傘だ。特に驚くようなことではないと思うのだが……

「普通の傘が人に化けたり、舌や目が出てきたり喋ったりしないよ……ということは、昨日はずっと、喋らずにただの傘のフリをしてたってこと？」

「そうだよ！それで、あなたが捨てたらまた同じ場所に戻ってきて、うらめしやうって驚かすつもりだったの。でもそのまま使っちゃうなんて……しかも直してくれるなんて思ってもなかった……ありがとう」

ありのままの事実を青年に告げる。少なくとも、彼が直してくれなければ、一生(?) 使い物にならなかっただろう。思いが伝わったのか……律儀に彼は「どういたしまして」と返し、話を続けた。

「えっと……それで、これから君はどうするの？」

この質問の答えは、彼に直された時に決まったようなものだ。小傘は佇まいを正し、

「私はあなたの道具ものになります。雨や日差しの強い日に使ってくださいまし。あ、それだけじゃなくて、簡単な雑用ぐらいなら人に化けでできるよ」

ペコリと取っ手を曲げて一礼し、頭(?)を下げる。ついでにさっと、自分のステータスを彼にアピールするが、彼の反応は芳しくない。渋い顔をして唸っていた。

「いきなりそんなこと言われてもなあ……僕は傘を直したただけだよ？」

「それが私だったのでーす！ だから私は貴方ものの道具！！ ほら、特に問題ないじゃない！！」

元氣いっぱい正々堂々と宣言する。未だに頭を抱えながらも、おずおずと青年は言った。

「『唐傘の恩返し』なんて聞いたことないけど……ほんとにいいの？ 結構気まぐれで、色々な所行くつもりだから、傘があるのはありがたいけど……」

「例え雪の中嵐の中！ 小傘はあなたについていきます！！」

ビシィ！！ と舌で彼を指差して(?)宣誓。それを見て……はあ、と彼はため息一つつき――

「そういうことなら……まあ、よろしく？」

どうやら小傘のことを認めてくれたらしい。「やった♪ やった♪」と唐傘お化けらしくピョンピョンとび跳ねながら、彼を中心にグルグル回った。……傍から見たら、ホラー以外の何事でもない光景に、青年は顔を引き攣らせる。もちろん、そのことに小傘は気がつかないが、代わりに別のことに気がついた。

「あー！！ ごめんなさい！！ まだ名前言ってなかった！ 『多々良 小傘』と申します！！ ふつつかものではございますが、どうか末永くお傍に置いてくださいませー！！」

「その表現だと、また星さんに誤解されるからやめて……僕は『西本 参真』」

青年は力なく答える。相当トラウマになってるようだが、当然のように小傘はスルー。「参真♪ 参真♪」と今度は名前を呼びながら、ピョコピョコ跳ねまわる。相変わらず異様な光景にげんなりしながら、彼の一日は幕を上げたのであった――

十八話 からかさの恩返し（後書き）

こがさ が なかまになった！！

半ば勢いで小傘回作ったら、参真クンのパーティーになっちゃったよ……本来のシナリオなら出番あるかどうか怪しかったのに……ま、まあ一人で幻想郷を回らせるのも寂しい気もしますし、いいんですけどね？ 正直なところ、勝手にキャラが動いて驚いてます。ああ、人を驚かす程度の能力ってそういう……

そして再び独自設定。小傘ちゃんが傘になってる時に喋ってたら、普段彼女のもってるアレになります。だんまりしてれば、あの傘に目と口がない状態に……。そこ、ナス言わない。でも気持ちちはわかりますよ？ 何せ作者の脳内ではナスになってしまいましたかr（ピチューン！

十九話 愉快な「元」忘れ傘（前書き）

ちよつと投稿が遅れました。

テスト前なので、しばらく更新がなかったり、遅くなったりする
かものです。

まあ、作者はサボリ癖あるんで、あてになりませんけどね

十九話 愉快な「元」忘れ傘

「それではみなさん……いただきます」

どんよりと重い空気の中、聖は皆に号令をかけたが……「いただきます……」と返ってきた返事にも、元気がない。

（うう……暗い、暗いよ。どうしてこんなことに……）

内心ナズーリンがつぶやくが、どんなに嘆いてもこの空気を変えられることなどできないだろう。下手に空気を変えようとすれば、その者が自爆しかねないような雰囲気だ。だいたいの事情はぬえたから聞いているだけに、下手に手を出せない。

「ハア……」

特に落ち込み方がひどいのは、参真と星。落ち込んでいるどころか……心なしかひどくぐったりしており、体力面でもひどく消耗しているようにも見える。まるで夜なべでもしていたかのようだ。

「ふたりとも……ごはん食べたらもう一回寝てきた方がいいと思いますよ？」

状況が読めていない聖が、おろおろしながらも二人に提案する。何があったかがわからなくても、疲労困憊しているのが目に見れてとれた。

「大丈夫ですよ、聖さん。二度寝は健康にわるいですし……」

「そうですね……それと聖、後でちょっと修業に付き合ってください。最近たるんでいたようなので、鍛えなおします」

「は、はあ……いいですけど……」

少しばかり凄みの含んだ声で星は答え、反面参真は、消え入りそうな声色でボソボソとしか呟けない。どうみても大丈夫そうではない彼に、ナズーリンは助言する。

「……参真くん、今日は修業に出るのをやめたほうがいい。気分が落ち込んでいる時は、何をやっても上手くいかないものさ。ヘマをして死にたくはないだろう？」

「氣を使わせてすいません……今日は寺にすることにします。彼女に色々聞きたいこともあるのでね」

言いながら視線を向けた先には、目の色の違う少女が立っていて、何がうれしいのはさっぱりわからないが、ニコニコしながらこちらを眺めていた。食事を目の前にして何の反応も示さない彼女に、改めてぬえが聞く。

「……本当に何も食べないの？ 急だったから用意できていなかったけど、ちよつとぐらいならあなたの分もあるよ？」

朝のドタバタ劇もあり、朝食はやや遅くなってしまうているため、普通に考えれば腹をすかせていて当然なのだが……どうにも、彼女は素振りを見せない。聖たちも少し心配していたのだが――

「んゝ食べられなくはないけど、普通のご飯を食べてもお腹が膨れないの。人が驚いた時の感情エネルギーが私の食べ物だから。そうそう！ 昨日初めてわかったんだけど、道具として役にたってもちよつと満たされるみたい。久々のご飯だったなゝ」

特に無理していた訳ではないようだ。彼女にとって普通の食事は、嗜好品のようなものらしい。それにしても――今、「久々」というていなかっただろうか？ 気になったナズーリンが質問を重ねる。

「久々って……一体どれぐらいなんだい？」

「えつと……半年前？ しかもほんのちよつとだけだった。しっかり食べれたのは二年ぐらい前かな？」

「え！？ それってどういうこと？」

「誰かを驚かそうとしても上手くいかなくて……ごくたまーに成功して、ご飯にありつけるんだけど……」

話を聞く限り、かなり苦勞をしていたのだろうが……そこに暗い影はなく、小さな子供が問題の答えがわからずに、ウンウン唸っているような感じがした。

「ちなみに、どんな風に驚かそうとしていたの？ ちよつと僕にやってみてよ」

興味津々といった様子で、参真が両手を広げて構える。……食事

中にそんなことをして大丈夫なのだろうか？ 吹き出しでもしたら大惨事確定である。小傘も戸惑っているようだ。

「ふえ！？」 　ご主人さまにそんなこと……」

「ご主人さまって……そんな大仰な……まあそれは置いて、いいからいいから」

参真が、気にするなと彼女を促す。気がつけば皆が小傘を注視しており、もはや後退は許されない状況となっていて……空気を読んだのか、小傘はコホンと一つ咳払い。覚悟を決めたようで、「じゃあ、いきますよー！」と一呼吸入れてから……

「うらめしやー！ ほら……驚け……！」

叫びながら、ニコニコ笑顔で彼に迫る。声のトーンも妙に明るいせいで……なんだろう、すぐく微笑ましい光景だ。可憐な容姿もあって、全然恐くないし驚かない……というより、驚けない。

しばしの沈黙の後——参真が耐えきれなくなり、クククツと笑い始め、それにつられて星や聖……雲山さえも笑っていた。小傘にとっては真面目にやっているらしく、失敗していたことを嘆いてた。

「ほえー！？ 　なんで笑うの？ 　びっくりさせようとしたのに

……」

目に涙を溜めているが、その仕草さえも可愛らしく見える。その姿を見て、ナズーリンは、小傘は生まれる種族を間違えたのかもと思った。神様にでもなっていたら、その愛らしさで、多くの人間から信仰を集めることが出来たかもしれない。

「いや……これじゃあ驚くのは無理だよ……むしろ癒される？」

「そうだね。いいアイドルになれると思うよ」

参真の感想に、村紗が相槌を打つ。一方、ぬえは小傘を見つめ……

「だめだめ！ 妖怪たるもの、もっと強烈な脅かし方じゃなきゃ！

例えば、平安京を恐怖のドン底に陥れるぐらい……」

「「それはやりすぎ！」」「」

妖怪の先輩として講義しようとしたところに、一斉に反論の声がかかる。気がつけば、さっきまでの嫌な空気が霧散し、明るい空気が

で食事が出来るようになっていた。

「……フツ。そうですね、雲山」

「ん？ 雲山はなんて言ってるんだい？ 一輪」

不意に笑った一輪に、ナズーリンはこっそり聞いてみる。

「雲山がね……『参真はいい拾いものをした』ですって」

「そいつは……ちがいない」

そしてまた、二人の間で笑いが起こる。朝の時はどうなることかと思っただが、案外彼女とは仲良くやっていけるような気がした。きつと参真も小傘を大事にするだろう……穏やかな笑い声に包まれながら、命蓮寺の朝は明けていった。

十九話 愉快な「元」忘れ傘（後書き）

ようやくとほのぼの回。説明回や移動回が多かった気がするのでそろそろ投下。

あと、戦闘描写もあった方がいいですかね？ やったことないんで不安ですが……努力させて頂く所存でございます。

二十話 旅立ち（前書き）

ちよつと急展開かも？

切り替えの上手いやりかたが知りたいです……

二十話 旅立ち

参真が命蓮寺に来てから、二週間が経とうとしていた。

あれ以降、彼は霊力制御の訓練をひたすらに続け……今では、一輪と同等クラスの弾幕を、撃ち続けることすら出来るようになっていた。が、相変わらず空を飛ぶのはからっきしで、飛ぶと霊力が一気に枯渇してしまう。以前よりはマシになったとはいえ、三十秒ぐらいが限界で、しかも飛んでる間は弾幕を一切発射できない。弾幕ゴッコにおいて、これは致命的過ぎる欠点だった。

「本当に、二人で大丈夫なのですか？」

命蓮寺の前で参真と小傘を見送るのは、聖、ぬえ、村紗、一輪（と、雲山）。ナズーリンと星は……例によって宝塔を落としてしまったらしく、探しに出て行ってしまっていた。

「はい。隠行術も使えるようになってるので大丈夫です。それに、この力の仕組みも知りたいですから」

心配そうに声をかける聖に、参真がしっかりと答える。本当なら、一緒にいって護衛したいぐらいの気持ちなのだろうが……参真としては、いつまでも彼女たちに甘えている訳にはいかない。そのための旅立ちでもある。

きっかけは、二日前に遡る。あれ以降さらに聖や星、参真も一緒になって、力の仕組みを説明しようとしていたのだが……何一つヒントも得られないまま、時間だけが過ぎていつてしまった。どうしたものかと考えていた矢先に――偶然彼の力を見た、命蓮寺に遊びに来ていた妖怪が、こんなことを言ってきたのだ。

曰く、「守矢神社の神様の雰囲気似ている」とのこと。詳しく話を続けていくと、その神社にいる神、「洩矢 諏訪子」は、『坤を創造する程度の能力』を持っており、大地に関わる物を自在に創造できる能力らしい。

もちろん、参真はそんな能力を使役できる訳ではない。だから、始

めは大したことのないように思っていたが、全く関係ないかと言うと――そうでもない。

聖たちだけで理解できていることは、あの現象が「大地」から彼に霊力を供給しているというこのみ。彼女たちではそこまでしか分からなかったが、大地と深く関わりのある諏訪子なら、何が起っているのかを解明できるかもしれない……

こうして参真は、守矢神社へと向かうことになった。

「……本当に気をつけてね？ 紹介状は持った？」

「えっと……大丈夫です。お供え物？ の漬物もあります……あ、余ったやつはそっちで食べちゃってください。持ち運べないですし、腐らせてももったいないですから……地下室も好きに使ってくださいいな。本当に、今までありがとうございます！ このお礼は……」

「お礼なんていいですよ。元はといえば、私たちが家を壊してしまったのだし……またいつでも遊びに来てくれればいいわ。雲山も、『達者でな』ですって」

「そうそう。たまに顔見せに来てくれるとうれしいかな」

「小傘も元気でね」今度来た時は、『平安京を恐怖に陥れるための48の方法』をすべて伝授……」

「「しなくていいから!!」」

小傘のことが気に入ったらしいぬえは、相変わらず驚かしかたを教えようとしていた。参真が修業していて、彼女は暇になったときは、しょっちゅう小傘にかまっていたらしい。

「そ、そんなに方法があるんだ……」

「ふふふ……大妖怪ぬえに不可能はないのでーす!」

「さっすがぬえ先輩!! 私には出来ないことを平然とやってのける!! そこに痺れるう! 憧れるう!!」

「それほどでもない」

にしてもこの二人、ノリノリである。

「ハハハ……それじゃあ、そろそろ行きますね」

「どうかご無事で……」

四人に見送られながら、参真と小傘は歩きだす。彼らの姿が見えなくなるまで――聖たちはずっと、そこにいた。

二十話 旅立ち（後書き）

ここで伏線のようなものを回収するためのフラグが経ちました。彼の霊力源についてですね。なぜこんなややこしいことしたかつて？

それは、もう少し話を進めてからお話しましょう。

それと……これだけではなく、今後の展開もかなり決めてあります。ぶっちゃけると、もうエンディングあたりのプロットも練れますね。たまに謎電波受信して、小傘回みたいなのりと勢いだけのシナリオもあるかもですが……の割には文章が短いって？ ハハ、文章力と集中力不足でござい or z

勘の良い方なら……これがどういう意味か、わかりますね？ フフフフ……

二十一話 守矢神社へ……（前書き）

テスト？ そんなものはなかった

二十一話 守矢神社へ……

「はあ……はあ……まだつかないのか……」

「ご主人さま、大丈夫？」

妖怪の山——守矢神社参拝道道中——

出発から、向こうの時間で六時間ぐらいだろうか？ 相当距離があったらしく、参真たちは、未だ目的地につけていなかった。手荷物もそれなりにあり、長距離を歩きっぱなしというのはつらい。彼は山歩きに慣れている方だが、それでもさすがに限度があった。

一方の小傘は……流石妖怪というべきか、全く堪えていない様子で、参真のあとについてきている。

「一応はね。ところで小傘ちゃん、いつの間に呼び方を『ご主人さま』に変えたのさ……僕はそんな大したことでないって何度言えは……」

「ううん！ ご主人さまは大切なご主人さまだよ！！ だからご主人さまって呼ばせて」

無垢な瞳で見つめながら、彼に迫る小傘。……これは諦めてくれそうにないと感じた青年は、そっと話題をすり替える。

「もしかしてナズーリンの影響？」

「ほえ！？ なんて分かったの！？ ご主人さま、あったまいい！」

「そりゃ、ご主人って呼び方してたからね……それ以外考えられないというか……」

「なるほろ」

のんきに会話をしながら、山道を進んでいく。それからさらに少し進んでいくと、鳥居と石段が目に入った。

「ふう……ようやく到着か……そういえば、どんなカミサマなんだろう？ 小傘ちゃんは知ってる？」

石段に足をかけながら、何気なく小傘に聞いてみる。参真はあま

り守矢神社の情報を得られていないので、ちょっとしたものでもいいから、特徴か何かをつかんでおきたかった。

「うーん。異変を起こして、博麗の巫女にやつつけられたってことと、結構強いってこととぐらいかなあ……実力は幻想郷でも上位の方らしいよ？　ご主人さまと二人掛かりでもたぶん片方も倒せないと思う」

「片方？　というと、『諏訪子』って神様とは別にもう一人いるのか……失礼のないようにしなくちゃね。怒らせたら大変なことになりそうだ……」

戦々恐々と、石段を登っていく。隣でフワフワと浮いている小傘が、ちよつと羨ましく感じられたが、参真は飛ぶことができない。

「ほんとに飛べるって便利だなあ……」

「ここで修行して、ご主人さまも飛べるようになるといいね！」

「うん……つと着いたかな。これはこれは、立派なものだね……ちよつと書いてから……」

「その前に挨拶しなくちゃご主人さま！」

せつせと荷物から道具を取り出し、絵を描こうとしたら速攻で止められ、ちよつとげんなりする参真。しかし小傘の言うことも最もであり、敷地に入った以上、持ち主……というよりは祀り主に一言入れるのが筋ではある。一応、人はほとんどいないが、間違えても失礼かもしれないと思い……参真は能力を発動することにした。

自然に見える定義を『この神社に祀られてる神様』に指定。途端――世界の視え方が変化していく。参真にとってはもう慣れた光景だが、他者がこの景色を認識できたら、さぞ驚くだろう。今まで特に何も感じなかった、森、神社、地面――ありとあらゆるものが、強い違和感を持って自分の視界に迫るのだから。

（こういう使い方だと、長く使えないんだよね……）

不自然な物を見続けていて、いい気分になる人間はいない。それが広範囲に渡るのだから、参真の精神に負荷が掛かってしまう。ちよつちよつと見つけて、能力を解除しよう。辺りを手早く見渡し、自

然に映る物を探していると……それはすぐに見つかった。見つかったのだが……

（あれ本当に神様なのかなあ……？）

青年が見たものは……おいしそうに饅頭を頬張る、濃い藍色の髪を持ち、背中に奇妙な輪っかを背負った女性と……その隣で悔しうに、パタパタと手を振り回している金髪の幼子が映っていた。……自分の能力で外れたことはないから、ほぼ間違いないのだが、それにしても『これが神様だ』とは信じがたい。

「あの～すいません～？ 貴方たちは、ここの神様でしょうか……？」

恐る恐る近づき、聞いてみる。すると、全くこちらに気がついていなかったらしく、藍髪の女性は慌てて佇まいを正し――

「いかにも――して、守矢神社に何用かな？ 青年」

威厳たつぷりに、こちらに問いかけてくる。なるほど、これが神の持つ威圧感か――彼女が空気を変えたのは間違いない。どうやら、本当に神様のようだ。最も――

「えっと……口にアンコがついてるよ～？」

「！？ し、失礼したっ！！」

所どころ汚れている口周りのせいで、声色以外に全く威厳が感じられない。小傘に指摘され、神様(?)は胸のあたりにつけていた鏡で顔を見ながら、汚れをふき取る。その様子を見た先ほどの幼女が、腹を抱えて笑いこけていた。

「ゴホン――では改めて、守矢神社に……」

「神奈子！ さすがにそれは無理があるよ！ ぷっ……くくくくく」
仕切り直そうとしたところに、笑い声混じりに幼女に止められる。それで観念したのか……

「うう、みっともない所を見せてしまったな……参拝かい？ すこしばかりの信仰心を感じるが……」

さっきまでのオーラはどこへやら、急に彼女はフランクな態度に変わっていた。

「いえ……参拝という訳ではないのですが、諏訪子様という神様に相談がありました。こちらが紹介状になります」

「ふうん？　ちょっと見せてもらん？」

ヒョイと手の内から、聖たちに書いてもらった紹介状を幼女が取り上げる。小傘の話や、自分の能力でこの幼女が「自然」に見えることから、彼女も神様なのだろうが……どう見ても年下にしか見えない。

「ほむほむ……命蓮寺じゃ彼の力がわからない？　しかも外来人？

ああ、この前天狗の新聞に載ってたやつか……なるほどね。確かにこれは、幻想郷じゃ私が適任だねえ」

文面を見て、感心したように彼女が頷く。そして両腕を広げ、くるくると舞いながら――

「ようこそ参真くん。守矢の二神は君を歓迎するよ。私は『洩矢諏訪子』で、こっちのアンコつけてたのが『八坂 神奈子』だ。よろしく」

恭しく、言霊を紡ぐ。その荘厳な雰囲気を受けて……ようやく参真も、彼女が『神』であることを認識した。

「じゃあ僕も改めて……外来の絵描き。西本 参真と申します。こっちの子が――」

「ご主人さまの唐傘、その付喪神の 多々良 小傘だよ」

「うむ……苦しゅうない。とりあえず、中で話を聞こうじゃないか」
「神奈子。もうそのキャラ無理があるって」

ぐぬぬ……と神奈子が悔しげに呻く。初対面にして、神の威厳が怪しくなってきたが、他に頼れる相手もない参真は、少々不安になりながらも、二人のあとについていき、守矢神社の中へと進んだ。

二十一話 守矢神社へ……（後書き）

さあ、もうすぐ主人公の力の正体がわかります。

そして、それが終わったあたりから、戦闘もやってみようかなーと。すぐく拙いものになると思いますが、ぬるゝい目で見てってねゝ

二十二話 神との対決（前書き）

待たせたな！！

一週間も経ってないのに、なんだか久々更新に感じる不思議。

普段より長いし、初戦闘描写ありだよ！ すっごく拙いよ！？
ぬるゝく見て行ってね！！

PV五万、ユニーク五千キター！ ありがとうーございます！！
追記…最後の方がちょっと気に入らないので修正しました

二十二話 神との対決

「なるほど……だいたいの事情は分かった。つまりお前さんは自分の力の正体と、それを使いこなして空を飛んだり、弾幕ゴッコができるようにしたい訳だね？　わざわざこんな山奥までご苦労なことだ」

「全くだよ。ここまでよく襲われなかったねえ……妖精にちよっかかけられたり、大変だったんじゃない？」

参真の事情を知って、諏訪子と神奈子は呆れかえっていた。

大まかな事情は聖たちの紹介状に書いてあったが、それにしてもよくやると思う。ここから命蓮寺までは距離があり、飛べないとなると山道の登ってくることになる。荷物も持ち歩いていることも考えると、かなりの苦行だったはずだが……

「隠行術を教えてもらってたので大丈夫でした。妖精にも会いましてけど……特に何もされませんでしたよ？」

「へ？　イタズラとか、食べ物せがまれたりしなかったのかい？」

「普通に話して終わりでしたけど……」

「どういうことだろうか？　（幻想郷の）常識的に考えて、妖精に出会ってなにもない方がおかしい。思わず諏訪子は、神奈子と顔を見合わせた。

「そうだったねー私もたまにちよっかかけられるけど、ご主人さまと一緒にいると、別に何もされなかったよ？　普段とは大違いで、ちよっとびっくりしちゃった」

彼と同行していた付喪神もそれに同調する。二人とも嘘をついていた様子はない。彼の力に関係があるのだろうか？

「まあ、それはともかく……どうする？　諏訪子が調べないといけないから、あたしと戦^やるのが早いかねえ？」

「そうだねえ……じゃあ参真くん、ちよっと神奈子と弾幕ゴッコしてもらえるかい？　私が君の様子を見て、どんなものか探ってあげ

るからさ」

ここで云々言っているより、実際に見た方が早いだろう。だが、青年は顔をしかめ、自信なさげに呟いた。

「うう……お手柔らかにお願いしますよ？ 決して強い人間じゃないですからね？」

「あっはっは！ 大丈夫！ 死にゃくしないよ！！」

豪快に青年の肩を叩く神奈子。……少々強く叩き過ぎて、「オウフ」と青年が悲鳴を上げていたが、気がついていないようだ……彼を少し休ませてから、四人は境内へ移動していった。

守矢神社前にて――外来の青年と、神奈子は向かい合っていた――既に半分戦闘態勢に入っている神奈子からは、力を溜めているのか、先ほどまでの軽い雰囲気はどこへやら……彼女から後光が差しているように感じられた。すさまじいカリスマを纏って、神たる彼女は参真と対話する。

「参真はスペカ持ってるのかい？ とりあえずそっちの枚数に合わせるが？」

「いえ……大雑把にしか霊力を使えないので、作れてないんですよ……」

口調は変わっていないものの、その重圧たるや、神奈子と話すことを躊躇わせるだけのものがある。正直なところ、同じ相手とは思えなかった。

「ならば、仕方あるまい……三枚ほど使わせてもらおう。外から来たりし人の子よ……どこまでやれるか、見せてみる！！」

彼女から力が溢れる。神の力……さながら神力といったところだろうか？ あまりにも膨大な力の放出に戸惑う参真。まだ撃ちあっ

でもないのに、正直勝てる気がなかった。

「やるだけ……やらせてもらいます!!」

そんな弱音はおくびにも出さず、参真も構える。地面に霊力を送り——周辺から霊力を集めた、が……

(いつもより集まりが悪い!?　なんで!?)

理由は不明だが、思ったより霊力が流れてこない。建物や自然の少ない所では、集まりにくい感じがしたが、寺や神社ならそんなことは一度もなかった。不測の事態に焦りながらも、なげなしの霊力で弾幕を撃てるように練り上げる。

その様子を見ていた諏訪子は瞠目する。……そんなに珍しいことなのだろうか？　参真としては、これ以外の力の使い方を知らないのも、そういうものはわからないのだが。

「へえー実際見てみるまで信じられなかったけど……本当に外から霊力を集められるんだねえー それじゃあ……はじめっ!!」

「ご主人さまー　がんばってー!!」

小傘が応援し、諏訪子が号令をかける。同時に神奈子が、中空へと舞い上がり、見上げるような形で彼女と対峙し、参真は能力を発動させた。

(どうする……?　とりあえず、『弾幕以外』にしておこう)

自然に見えるものを『弾幕以外』に指定し、攻撃に備える。この時点では、まだ視界に何の変化もないが――

「行かせてもらおう!!」

掛け声と共に、弾幕が迫る。

速度、量共に、今まで経験してきた中でも桁違いの弾幕量だ。聖さんたちは手加減してくれていたようだが、この神社の神様は、容赦するつもりはないらしい。

(落ち着け……!　回避は今まで通りでも大丈夫なはずだ……!!)

走り回ることしかできないが、それでもかわすことは出来る。なぜなら……彼の眼は――すべての弾幕を、『不自然なモノ』として認識している。違和感のあるソレの、軌道を読むことは難しいこと

ではない。

「ほほう……地に足がついた状態でかわし切るか……ではこれならどうだ? 『神祭 エクスパンデッド・オンバシラ』! !」

「つつ! ?」

スペルの宣言。同時に上空から巨大な柱が現れ、上空から降り注ぐ。神奈子からも弾幕が迫り、とっさに攻撃を一時中断、回避に専念する。

（早めにスペルを使ってくれるのはありがたいけど……! ホントに一枚目! ?）

参真としては、『相手がスペルカードを使いきるまで待つ』という勝ち方も意識しながら戦っていく必要があるのだが……それにしても、一枚目から難易度が高い。怒涛の勢いでオンバシラが地面に突き刺さり、土煙がむあつと上がる。直撃したら、痛いでは済まなそうだ……

「ほらほら! ちんたらしてると潰れるよ! ?」

「ヤル気マンマン過ぎますよっ……!」

怒号の如く衝撃が走り、弾幕も大量に迫ってくる。いくつかは頬を掠め、小さな傷跡をいくつも作った。それでも……参真はひたすらに避ける。避け続ける。

「どうしたどうした! ちょっとはそっちから攻めてきたらどうだい! ?」

「死ねと! ?」

精神的にも、能力的にも、反撃する余裕など存在しない。ひたすらに彼は気合い避けを続け――

「! ? 時間切れか! !」

神奈子の一枚目のスペルを、破った。

（今っ!）

彼女にとっては予想外だったらしく、僅かに硬直する。その隙を……参真は逃さない。

「つつ! ?」

散弾状に弾幕を精製、相手の行動を制限するように発射する。威力はまちまちだが……とりあえず当てることを意識し、二射、三射と連発。散弾のいくつかは命中し、微かに神奈子に傷を作らせた。彼女は呆然と、被弾した部位を見つめ……急に笑い始めた……
「どうやら、見くびっていたようだね……少し本気出してやろう……」

ひどく愉快な様子から一転、一気に神力が跳ね上がる。さらに、しめ縄が変形し——そこから無数の弾幕が、複数の角度から迫ってきた。

（これは……無理か……）

一応、弾幕をくぐる道筋は見えている。しかし——それは中空で——幻想郷の住民なら楽に行けるだろうが、参真にはそこに行くことが出来ない。いけたとしても——いずれ「詰んで」しまうのが理解できていた。弾道を読む故の絶望である。

（悔しいな……避け方はイメージ出来るのに——）

彼は回避を諦め——思考を、「ダメージを減らす」ことへとシフト。両腕に靈力を集中し、即席の防壁を作成。正面に腕を交差させ、衝撃に備えた。

直後、着弾。

同時に、焼けるような痛みが全身を駆け巡る。食らったのは腕だけのはずだが、練り上げらげた神力の弾幕は、身体にもダメージをもたらした。

二発、三発と、弾幕を受けるたび、身体が悲鳴を上げていく。

膝は折れ、気力は限界。たったの数発で、参真は追い込まれていた。

「さすが……神様ですね……」

実力のケタが違っていると、彼は思い知らされた。防御に徹してこのザマである。先ほどの攻撃しながらの状態だったら、一発で力尽きかねない。

「ふん……お前さんも、そのなげなしの靈力でよく持った方さ」

既に、いくつか弾幕が向かって来ている。これはもう、避けようがないことがわかっており、体力を考えても、この一撃で終わりだろう。

「本音を言えば、一枚目で終わらせるつもりだったが……存外にあんたは避けていた。手加減していたとはいえ、誇っても良いぞ？

人間」

「それはどうも……介抱お願いね？ 小傘ちゃん」

刹那……迫りくる極光が、参真を照らしだし――

轟音と共に、彼の意識はそこで途切れた。

二十二話 神との対決（後書き）

参真君は、神奈子様にはとてもとても勝てません。スペル三枚なのに、一枚しか破れずにやられてますからね。力も安定していませんが――その理由も次回明らかにつ！！ 独自設定全開になりそうな予感っ……！！

二十三話 守矢神社の愉快な巫女（前書き）

ようやくテストが終わった……

しかし、しばらく書いてないと鈍りますね……普段に比べて時間がかかりました。ちよつと調子が戻るまで時間かかるかもしれない。ご了承ください……

二十二話

神と人との戦いが終わる少し前――妖怪の山の空に、独特の巫女服を着た緑髪の女性が、へろへろと飛んでいた。

「ふいふとあちよつとで帰れる……」

両手に大きく膨らんだ麻袋をぶら下げ、彼女はゆっくりと飛んでいく。久々の買い足だったものだから、かなりの量になってしまったのだ。一応人手はなくてはならないのだが、二人とも祀られているという状況なので、動くに動けない。そのため、人里で買い物をするのは彼女の役目になっていた。

「……!? 神奈子様!?」

のんびりと飛んでいた所に、彼女は神力を感じ取った。守矢神社の神、神奈子のものであるが……放出される量が、通常のそれではない。まさか……襲撃でもされたのだろうか？

「東風谷早苗——行きます!!」

最悪の事態が起こっているかもしれない……そう考えた彼女は霊力を開放。一気に加速し、守矢神社へと急ぐ。疲労している身体に鞭打ち、一目散に駆けつけようとした。その時！

ドゴオオオオオオオオオオオオオオオオン！！

轟音と衝撃が妖怪の山に奔る。丁度守矢神社辺りから、ソレは発せられていた……

(まさか……！)

悪寒が背筋を駆け巡る。思わず荷物を投げ捨て、さらに速度を上げ、同時にスペルカードもセツトし、早苗は突撃した。

「神奈子様ああああああああああああ！」

全身全霊の叫びと共に、彼女は守矢神社へと降り立つ。目を血走らして、神奈子に盾突いた愚か者に制裁を下そうと、辺りを見渡す。「早苗？ そんなに慌てて帰ってこなくても……」

「諏訪子様!？」
どうして呑気に構えているんですか!!
神奈子

様がっ！ 神奈子様がっ……！！！」

「？ 私ならここにいるが？」

と、上空から神奈子の声が聞こえる。見上げれば、普段通り神奈子様がピンピンしていた。とりあえず早苗は胸をなでおろす。

「よ、よかった。てつきりグレイ宇宙人に襲撃されて、アブダクションされたのかと……で、こっちで倒れているのが不屈き者ですか？」

ちょうど神奈子様の足元に倒れている青年がいる。身体から湯気が出ているということは、おそらく弾幕勝負で敗れたのだろう。守矢の神に正面から挑むとは……無謀なのか度胸があるのか……

「不屈き者？ ああ、参真くんのことか……あーうー どう説明したのか……ちよつと長くなるよ？」

「ま、少なくとも早苗の考えているような奴じゃないさ。訳あって一戦交えたが……」

ふわりと神奈子様が舞い降りる。そして、二人は早苗に彼のことを話した……

二神説明中……

「なるほど……彼は力の使い方を知りに……」

「そーゆーこと。で、どんなものか見せてもらうために、神奈子と戦^やったってこと。でも神奈子、後半大人げなかったよ？ 参真くんを気絶させることなかったじゃない」

「いやあ、つい楽しくなっちゃってねえ……まさか一発貰うとは思わなかったよ！ おかげでテンション上がり過ぎて……」

「その結果がこれですか。参真さん……南無……って消えてる！？ さっきまで確かにいたはずの彼は、いつの間になくなっており、そこにあるのは弾痕の残った土地だけだ。慌てて境内を見渡すと……縁側辺りに青い髪の少女がいて、彼を横にして寝かせていた。あ

の少女は……確か……

「『無害な忘れ傘』……でしたっけ？」

微妙に違和感がある気もしたが、だいたいあっていたはずだ。人を驚かそうとしてはいたものの、しょっちゅう失敗していたことから、こんなあだ名になった気がする。

「ひ、ひどい！ あだ名は『愉快的忘れ傘』だよ……あ、でも今は『元』がつくけれど……」

どうやら聞こえていたらしく、彼女に涙目で返された。だが、たいてい気にはしていないようで、甲斐甲斐しく青年の世話を続いている。にしても、どうしてここにいるのだろうか？ 彼女は人を驚かそうとする妖怪だったはずだが……

「ああ、彼女ね……どうも、参真くんに『傘として』拾われたそうだよ？ で、そのまま彼の持ち物になったんだって。それは置いて……早苗、二週間前の新聞あるかい？ 確か参真くんについて、かなり詳しく書いてあったと思うんだ」

「あれですね。外来人の方の記事は全部とってありますから、多分ありますよ。少々お待ちをー」

元々は外の住人だったので、彼女たちは外来人のことが気になってしまう。特に早苗は人間でもあるので、迷い込んだ人々の力になりたいと思っていた。そのため、「文々。新聞」で外来人の情報があれば、とりあえずとっておくことにしている。案の定、まとめて置いてあった新聞の一番上に、彼の記事が載っていた。

「はい、どうぞー……でも、参真さんでしたっけ？ 彼の力に係あるんですか？」

「うん。仕組みはだいたいわかったんだけど、ちょっと裏付けの証拠が欲しくてね。参真くん本人にも聞かなきゃいけないこともあるけど、まず外堀から埋めちゃおうと思って……五年間山籠りか……さらに『自然か不自然かを見分ける程度の能力』……参真くんの謙虚で朴訥な性格を考えれば……なるほどね」

古い新聞を眺めながら、一人納得した様子で諏訪子様が頷く。予

想通り……ということなのだろう。

「あ！ ご主人さま！ おはよう！！」

「お、大声出さないでよ……頭に響いちゃう……」

「ふえ！？ ごめんなさい……小傘のバカバカバカ！！」

どうやら彼も、目を覚ましたらしい。改めて、早苗は彼を観察する。

人の良さそうな雰囲気、青い作務衣、黒髪黒目で、特によくも悪くもない顔。……第一印象としては、「外来人らしくない」と早苗は感じられた。

と、視線を感じたのか、参真も彼女を見る。その瞳からは……何故か警戒の色が見られた。

「……この方は？」

たたき起こされ、神奈子様にボコボコにされて、おそらく機嫌が悪いのだろう。かなりぶっきらぼうな聞き方だったが、早苗はビジネススマイルで応じる。

「この神社の巫女の、東風谷早苗と申します。参真さんでしたっけ？ 遠路はるばるお疲れ様です」

「あ、うん。僕は、西本参真。こんな挨拶の仕方でごめんね？」

上体を起こし、早苗に気を使う彼。どこぞの紅白や白黒と違って、礼儀知らずな人種ではないらしい。一段落ついたところで、諏訪子様が一つ、咳払いをする。

「さて、挨拶も済んだことだし……参真くん、本題に入っていいいかな？」

「そうでしたね……僕の力について、何か分かりましたか？」

そっと佇まいを正し、正座で諏訪子様と向かい合う彼。ここから先は、自分の出る幕ではないだろう。そっと早苗は席を外そうとした。

「あ、ちょっといいかい？ 早苗」

「どうされました？ 神奈子様？」

その時だった、もう一人の神である神奈子様に、早苗は呼び止め

られる。特に思い当たる節は――

「いや、早苗は確か買い足しに行ってきたんだろう？ 荷物はどこに置いてきたんだい？ 今は春先だが、向こうと違って冷蔵庫がないから、早めに蔵にしまわないとまずいと思ったんだが……」

「――」

ない。と言いたかった。言えれば良かった。というより、永遠に思い出したくなかった。肝心の荷物は、速度を上げるためにパージしてしまつて来ている。しかも、急いで来たのに無駄骨だったというオチ付きだ。これで食材全滅の報が告げられれば、参真と同じ目に……いや、下手をしたらそれ以上にひどい目に遭いかねない。妖怪や妖精に取られる前に、荷物を回収する必要がある。

「ごめんなさい！　すぐに拾いなおしてきます！！」

「ちよっ！？　早苗！？」

思い立ったら即実行。東風谷早苗は大慌てで、投げ捨てた食材たちを拾いなおしに行ったのであった……

二十三話 守矢神社の愉快な巫女（後書き）

キャー東風谷サーン！！

星蓮船ではお世話になった人も多いはず……Bのボム強すぎでしょう？

え？ テストどうなったかって？ 聞いてくれるな……

二十四話 力の在り処（前書き）

ぐぬぬ……調子が戻らない……

いつもより会話文多め、しかも説明回になってしまったのがマズかったか。見ていて退屈かもしれない……あとがきで、細かい補足説明をしますので、まずは軽く流して見ていってくださいな。

二十四話 力の在り処

早苗が飛び立った後、残された四人は少々困惑していたが……とありあえずは、神奈子は早苗の追跡、三人はそのまま神社にいることとなった。参真への説明を早めに済ませてしまいたいという、諏訪子の思惑である。こういうことは、勢いでしましてしまいたい。

「それじゃあ参真くん……かなり時間をとるよ？ 私が思っていた以上に、君の力は特殊で稀有で強力だ。おまけに、ちよくちよく質問を挟むことになると思う」

「はい、大丈夫です」

期待半分、不安半分といったところだろうか？ 参真はどことなくそわそわしている。隣に座っている小傘も、彼と同じように正座していた。諏訪子も姿勢を正し、改めて説明を始める。

「まず、いきなり矛盾するようだけど……君の使っている力は、君のものじゃない」

「それは、なんとなくわかっていました。辺りから力が集まってくるような……」

諏訪子の言葉に、彼が頷く。自身の感覚に依存するモノだったらしく、このことは青年も分かっていたらしい。

「……で、力の出所なんだけど、君の近くにある自然……特に大地や土地から集まってきてるみたいだね。ただ、集まってきている理由がわからないんだけど、参真くんは何か信仰していたりするのかな？」

参真は首をひねりながらも、曖昧に答える。

「そこまで大げさなものではありませんが……自然には、ほぼ毎日感謝していました。山籠りしている中で、自然の恵みがなければ生きていけませんから……これも信仰でいいんですかね？」

「そうなるね。かなり広い範囲の信仰……『自然そのものへの信仰』とでも呼べるかな。実のところ、私たちも君から信仰心を貰ってる

んだ。君が信仰している範囲が広すぎて、本当に微弱なものしか貰えてないけど……」

彼と会った時、神奈子が信仰心を感じたように、諏訪子もまた彼からの信仰心を受け取っていた。最も、参拝しに来る人間と比べるまでもなく、お粗末なものだったが……

「こ、小傘には訳が分からない……」

二人の話についていけず、頭にハテナを浮かべる小傘。諏訪子と参真が苦笑し、「休んでていいよ」と声をかけると、小傘はテクテクと、奥の部屋へと引いていった。

彼女がいなくなった後、二人は向かい合い、話を続けた。

「さて、ちょっと話が飛ぶけど、参真くんは五年間山に籠ってたんだよね？ 人とかかわったりはしていたかい？」

「いいえ……誰とも会うこともなく、一人暮らしでした。籠る前に準備はしておきましたから、特に補充をすることもありませんでしたね。作物の種を持ち込んで、自給自足していたんですが、素人なのに結構うまくいってました」

「あゝそれは信仰している自然の側からのお返しだろうね。……こりゃ、本当に珍しい」

参真も流石に首をかしげている。どういふことか、理解が追いついていないようだ。

「どうも、自覚していないみたいだねえ……いや、自覚していないからこそ、ここまで好かれたのかな？ スパツと言おうか。君のしていた行為は、私たちの業界でいう『修行』に近い効果をもたらしていたんだよ」

「修行……？ 滝に打たれたりはしてませんが……」

「修行って言っても、色々あるんだよ。まあ、自然に感謝し、俗世を離れるだけだと、効果としては大したものじゃない。でもそれは、『修行する』という心構えでの話。参真くんは、別にそういうつもりで山に入ったんじゃないんだろう？」

「ええ……僕は絵を描くために山に入りましたから」

ただただ困惑したまま、青年が答える。こういう事情には疎いよ
うだ。

「君はね……『修行しているという自覚なしに修行していた』とい
う、実に稀有な環境で育っていたんだ。本来、『修行する』という
行為自体が、より高みへと行こうとする一種の欲から来ている物な
んだけど、参真くんはこの欲求を持っていなかった。おかげで、自
然に大層気に入られ、さらには君の自然への信仰が合わさって……
『周辺の自然から力を借りる』なんて、一人の人間がするには、ふ
ざけた芸当ができるようになったわけだ」

さらりと……諏訪子はあっさりと核心を口にし、参真は呆然とし
て……

「え……？ ええええええええええええええええええええええ！？ ちょ
っと待ってください！ そんな大仰なこととしてたつもりは……」

慌てて彼は謙遜し、腕をぶんぶんと振る。さすがに事態の大きさを
理解できたらしい。混乱しているようだが、諏訪子は論すように
続けた。

「紛れもない事実だよ。君は靈力を地面に送ることで、自然の持つ
てるエネルギーを扱えるようになってる。最も、自然が無理をし
ない程度……生きていくためとは別に取ってある、余剰している分
を借りているみたいだから、一つ一つを見れば微量なモノだけど……
：周辺から集めればそれなりの量にはなるし、自然に勢いがあれば、
借りる量も増えるだろう。逆に自然の少ない場所……例えば人里み
たいな場所だと、借りれる量が大きく落ちる。それと、これは君の
過ごしていた環境の影響みたいだけど、地面に接触していないと、
上手く力を引き出せないみたいだねえ……」

「じゃあ……僕は飛べないんですか？」

残念そうに、彼が呟く。……飛びたかったのだろうか？ かなり
落胆しているようだが……

「いや、ちょっと工夫がいるけど、飛べなくはない。ただ……飛ん
でるとさっき言った通り、上手く交信できなくなるから、弾幕ゴッ

コは厳しいだろうね……付いておいで。『君の飛び方』を教えてあげよう」

励ますように、あるいは教師のように……洩矢 諏訪子は、外人への力の使い方を教えるべく、境内へと彼をつれて歩いて行った。

二十四話 力の在り処（後書き）

彼の力は、原理としては「元〇玉」に近いものととらえてもらえば分かりやすいかと。霊力を媒体に、地面を通して周辺の自然と交信、余っている力を霊力という形で参真くんに換算します。

修行云々は独自設定。邪かどうかはおいというて、「修行する」強くなりたいたい 強くなりたいたいという欲求がある」というのは、たぶんほとんどの人が持ち合わせている感覚だと思います。精神を高めたりする修行って、実は根本から矛盾してるんですよ。徳を積もうとせずに徳を積むのは難しく。無理に徳を積もうとしても、徳を積みたいという欲が出てしまう。普通はそうなるのですが、参真くんはそんな欲求ゼロで、偶然修行と同じ内容のことをしていたので霊力も上がったのですが、それと同時に『自然』という概念に気に入られ、さらに自然も信仰している……複雑な環境が絡み合って、偶発的に発現した力ですね。後天的に得たものになります。

なお、以前に彼が固有に持っていた「自然か不自然かを見分ける程度の能力」とは別枠になります。この力に関しては、全く同じ内容のことができれば、別の人間でも発現する可能性があるからです。最も、このことを聞いてしまった時点で、修行ということを意識、認識してしまうので、使える人間はかなり少ないでしょうが……

二十五話 初飛行！（前書き）

タイトル通り。ゆっくり見ていってね！！

二十五話 初飛行！

再び境内へと、青年は歩いて行っていた。

正直なところ、神奈子との戦闘で少々疲れてはいたが、飛びたい願望のほうが強く、参真は休むことよりも、飛ばうとすることを優先した。彼を先導する神は、

「ま、さっきみたいに、やり合うつもりはないからさ、それに、力がどういふものかもわかってるし……コントロールの練習がでら、ついでに教えるってかんじかなあ」

たくさんの人間の信仰を受けているからなのか……こちらの心情を察し、気持ちをはぐしてくれる。見た目こそ幼子だが、中身は間違いない年上だ。足の運び方や纏う空気、声色に身の振り方……そのすべてが落ちて着いていて――否、落ち着き過ぎていて、神以外として認識するには不自然だった。

「そうですか……もう暴れるのはつらいと思ってましたから」

「だろうね。ちょっとだけ神奈子も本気出してみたいだし。にしても、大した判断力だね。結局負けちゃったけど、センスはある。私は、神奈子の完封勝利で終わ리と思ってたからさ」

「ハハ……ありがとうございます。これでスペルカードも作れますか？」

力がはつきりしたところから、参真はこのことを気にしていた。今までは、力の正体がわからないのと、それが安定して使えるかどうかかわからなかったため、スペルカードの作成を控えていたのだ。不安定な力の大量消費には、大きなリスクが伴うとの、聖の忠告である。

目玉の付いた帽子の少女は、考える素振りのあと……

「んー作れるだろうけど……使うなら地上限定の方がいいかな。説明した通り、空中だと自然と交信しにくくなるから、安定して使う

のは難しい。かといって空を飛べないと、とても弾幕をかいくぐる
ことなんてできないし……難しいね」

まるで母親が、子供を心配するように考え込む諏訪子。自分は母親のことをよく知らないが、彼女のように思ってくれる母親だったら……離婚はなかったかもしれない。と、ありもしない幻想を思い浮かべていると……

「うわーん！！ ご主人さまー！！」

奥の方で休んでいたはずの小傘が、半べそかきながら駆けてきた。ただし、額に『肉』という文字を携えて。その文字が絶妙な具合に歪んでいるせいで……彼女には悪いが、笑える。すごく笑える。

「「ぶっ！！！！」」

「も、もうっ！ ここに来てからこんなことばかりだよ……」
盛大に二人は吹き出し、ますます泣きじゃくる小傘。参真が慰めようとしたが……

「ご、ごめんごめん！ しかし誰にやられ……ぷぷぷっ」

笑いを堪えきれず、忍び笑いがこぼれてしまう。ますます顔をくしゃくしゃにして、小傘は参真たちに抗議していたが……少し落ち着いたあと、二人に犯人を告げた。

「うう……ちよっとうとうとしてたら妖精にやられたの……ご主人さまと一緒にいたら平気だったのにー！ なんでー！？」

「妖精……そう言えば僕はいたずらされたことないなあ……もしかして関係ありますか？」

「ああ！ なるほどね！ この妖精は自然の具現化……自然の化身みたいなものだから、気に入られてる参真くんが、いたずらされたりしないわけだ」

「そうだったのか……」

などと、他愛のないことを話している内に、三人は境内へと到着。再び参真は、この神と向かい合った。しかし先ほどとは違い、空気が張り詰めてはいない。

「さ、まずは力を集める所から始めてみて。今度は自然に語りかけ

るようにやってみてごらん。やり方は……君が一番知っているはずだよ。自分の感覚を信じてやってみて」

穏やかな声色で、彼女は囁く。神の言葉だからだろうか——不安はまるでない、静かな夜の中で、満月に見守られているような心持ちだ。

あとは諏訪子に、自分の力を示すだけ——

「……はい！」

静かに目を閉じ、身体にある僅かな靈力を集中させる。あまりに微弱なソレに、自然への祈りを乗せ——地面へと送信した。

途端、先ほどまでとは比べ物にならないほどの靈力が、彼の元へと集結していく。内側に流れてくる力に動揺しながらも——無意識のうちに両手を広げ、辺りへの自然へ改めて感謝した。

「ここまで変わるとは……！ さっきとはまるで別人じゃない」

「ご、ご主人さま……?!」

不安げに声を上げる従者に、青年は優しく語る。

「……小傘ちゃん。大丈夫だよ、そんな不安な顔しないで」

大量の力に流されることなく、しっかりと受け答えた。傍から見たら、いきなり靈力を手にしているように見えて、危うく感じられるのかもしれない。実際は、ひどく安定しており、ここから暴発する方が難しいぐらいだった。さすがに諏訪子は分かっているらしく、むしろ感心していた。

「制御の練習からと思ってたけど……どうなってるのさ？ 完璧に

操れてるし、こんな量扱えるなんて……純粋な靈力量じゃ早苗より上じゃないの!？」

「僕は強くないですよ。自然みんなが力を貸してくれるから……」

謙遜でもなんでもなく、思った言葉を口にする。この力は——周りの自然みんながくれているもの。自分は祈って、それを集めて使役しているに過ぎない。

「……びっくりするぐらい無欲だね、君は。おかげで制御が楽に出来るのだろうさ。よし、それなら飛び方を教えちゃおう。いいかい

？」

こくり、と参真は頷く。諏訪子がそのまま続けた。

「この状態だと君は——羽とか翼とかをイメージして、地面から離れようとする動き自体が難しい。あくまで交信は地面を通してだから、無理やり地面から離れようとするのはよろしくない。その飛び方だと、ジャンプは出来ても飛行はできないのさ。だから……飛ぼうとせずに、空を飛ぶんだ」

「すいません。訳がわかりませんですよ。それ……」

「うん。だろうね。私も説明に困ってる……そうだ！ 君は絵描きだったよね？」

「ええ、それが何か……？」

いきなり質問され、わけもわからず返す。それを聞いた諏訪子は、いい案が思い浮かんだようで……今度は唐突に、こんなことを言いました。

「じゃあ目を閉じて、自分にかかっている重力を描いてごらん。なんでもいいから、重力を認識するんだ」

「……やってみます」

参真はあんまり、目に見えないものを描くのは得意ではない。自身の能力で被^モ写体を捉え、それを描くというのが彼のスタイルなのだ。しかり、やれと言われて出来ないことはない。そっと重力をイメージした。

（重力……か……矢印？ いや、これだと微妙。じゃあ手なら？

……こんな感じかな？）

そして彼は、重力を「手」という形でイメージを固定した。自分が地面にいて、大地から手が伸び、自身を引っ張っているようなイメージ。

「出来たかい？ なら、その力を弱めるように、霊力を地面に送るんだ」

「はあ……」

言われるままに、彼はさらにイメージ。自分を縛り支える手に、

こちらから霊力で出来た手を伸ばし——重力の手に、自分で出来た霊力の手を乗せる。すると、何故か急に浮遊感を感じ、恐る恐る目を開けると——

「……!?! と、飛んでる!?! 飛んでる!?!」

気がつけば、参真は宙に浮いていた!!

「ふふふ、おめでとう。しっかり解説しておく、君は『重力を打ち消す』『重力を和らげる』というイメージでないと空を飛べない。だから、飛ぶスピード自体は遅いし、前から何度も言ってる通り、上手く霊力を集められなくなるから、空を飛ばないと行くことができない場所や、弾幕ゴツコで、空を飛ばないと避けれない時ぐらいに限定したほうがいい。携帯電話の電波が悪い場所に突っ込むようなモノさ……って聞いてないか……」

よっぽど飛べたことが嬉しいのか……くるくる回りながら守矢神社を飛び回る。ついでに小傘も飛びだして……そして、早苗と神奈子が帰ってくるまでの間、二人は遊泳し続けていた……

二十五話 初飛行！（後書き）

心理描写きちい……話進めながらだとなおきちい……

個人的なイメージですが、諏訪子さまは母性、神奈子さまは父性をもった神様というイメージで書いてます。でもそんな神奈子さまがデレる姿はもっとステキだと思います（ドゴォ！

二十六話 えくすちえええええんじっ!! (前書き)

思いつき話その二

おかげで展開がかなり強引だよ!!

追記…だああ! 文字化けしてる!?

修正なのですっ!!

二十六話 えくすちええええんじっ!!

それから少しして、早苗と神奈子が帰って来た時には、参真と小傘はぐったりと仰向けに倒れていた。何事かと二人が駆け寄ったが、諏訪子曰く、「空が飛べるようになってはしゃいでて、小傘も一緒になって飛んでたら、空中でお互いの頭を打ち付けた」とのこと。

諏訪子は呆れ気味に説明していて、二人の頭にはデカイたんこぶが一つ、堂々とその事実を主張していた。こちらは必死に食材集めをしていたのに、呑気なものである。

「ふええ……痛かったあ……」

起きたら苦言の一つでもしてやろう。神奈子がそんなことを考えていると。ひどく可愛らしい声を上げて、参真が起き上がった。寝ぼけているのかもしれないが、諏訪子が無視して話しかける。

「参真くん。大丈夫？ ずいぶん豪快な音だったねえ……」

「ほえ？ ご主人さまも起きたの？」

何故かきよろきよると首を回す彼。まるで自分のことと、わかってないようだ。

「イタタタ……あ、神奈子様に早苗さん。お帰りなさい」

次は小傘が立ちあがり、ひどく丁寧……彼女らしくない口調で話す。そして二人は向かい合い――

「ご主人さま、ゴメンナサ……」

「ううん、こっちも気をつけ……」

向かい合うや否や、お互いに顔を見合わせ……触りあったりしている。言葉を遮ってまで、どうしてそんなことをしているのか……「なんで私がいるの!？」

「え!?! え!?! どうしてこうなった!?!」

反転した口調で、混乱し合う二人。二神にはさっぱりわからなかった。

その時、早苗に電流走る……!

可能性っ……現実には起こり得ない……！ 異常っ！ 異端っ！
！ 狂気っ……！！

しかしここは幻想郷っ！ ある得る……っ！ むしろ狂気こそ、
この世界の正しき感性っ！！ 常識は……時に投げ捨てるものっ……！！

「みなさん落ち着いてください。名探偵早苗！ この現象の正体が
わかりましたっ！！」

「「「な、なんだって……！！……？……？……」」」

普段から常識を投げ捨てている巫女は、得意げに大きな胸を張った。二神という時も、ぶっ飛んだ言動が多いだけに、不安げに諏訪子たちが風祝を見守る。

「お二人は……俗にいう『入れ替わり』なのですっ！ 頭を打ち付ける、雷に同時に打たれる、ヘンテコアイテムの効果などなど、たくさんバリエーションがありますが、今回はスタンダードなもので来ましたね！ 相手の身体の中に、自分の心が入ってしまい、自分の身体には、相手の心が入る……うーん、私もぜひ経験……したくないですね。自分の身体、勝手にどうこうされちゃうの嫌ですもん」

育て方を間違えたかもしれない。いくらなんでも、それはあり得ないと、二神は思っていたが……

「昔見たドラマで、そういうのがあったような……」

「そんなぁ……なんだか普段の身体と違って、むずむずするよぉ……」

信じられないことに、本人たちが納得している。確かに言動も入れ替わっていたが……証拠がない。何かないかと考えていると、諏訪子がいっいついたようで、

「じゃあさ、参真くん。さっきの力は使えるかい？ あれは、君の呼びかけに答えて力を貸している訳だから、身体が入れ替わっていても使えるはずだよ」

彼の力とやらが、出かけていた神奈子と早苗にはさっぱりだ。し

かし、諏訪子が嘘をついても得になることはない。彼女に判断を任せるしかないだろう。

「……こうですか？」

小傘の身体がら、唐突に靈力が集まる。この感じは……神奈子が青年と戦っていた時に感じたものと同じ……！

「ほ、ホントに入れ替わってる……だと……！？ 早苗の言うことが当たるなんて……明日はなにか、やばいものでも降ってくる？」

「えっへん！ これにて、一件落着……っ！！」

「「させないで！！ 身体が戻ってない！！」」

一難去ってまた一難。ようやく力を手に入れた参真だが、まだまだ受難は続きそうなのであった……

二十六話 えくすちえええええんじっ!! (後書き)

リアルに昔見たドラマを思い出してやった
反省も後悔もする訳がない……っ!!

二十七話 カワイイは正義！（前書き）

……勢いで話をつくったらこうなりました。

洒落にならないキャラ崩壊があります。……心の準備はよろしいか？

追記…こっちもえーりん誤字ってたか……修正でゴザル！！

二十七話 カワイイは正義！

小傘と参真の身体が入れ替わってから、数時間が過ぎた。

あの後、元に戻れないかと何度か頭をぶつけあったものの……追突するのがわかっていているせいで、お互いどうしても、激突直前で勢いを殺してしまう。埒が明かなくなってきた所に、言い出しっぺの早苗が、

「やっぱりここは、いろいろな出来事を乗り越えてからでないと、元に戻れないって展開ですよ！ ドラマだとだいたい一カ月ぐらいかなー？」

などと言い出したものだから、二人の絶望が加速した。

「どうにかならないんですか！？」

「どうにかしてよう……」

懇願してくる二人だが、諏訪子たちにはどうにもならない。精神を入れ替えるなど専門外だ……しかも、この状態はあまりよろしくなかったりする。

「でも、早苗の言う期間を待ってるのもマズイんだよね……人間の身体に妖怪の魂が入っちゃってる。どんな悪影響が出てくるかわかったもんじゃない」

「ええ！？ ぷるぷる、こがさはわるいようかいじゃないよう……」

参真の身体で、訴えてきている小傘。潤んだ瞳に上目使い……その視線が、不意に神奈子の視線と絡み合い――

「ぐはっ……！」

その刹那、盛大に鼻血を吹き出しながら、神奈子は仰向けにノックアウト。

なぜこうなったのか……よく考えてみて欲しい。彼女は神だ、しかも、気の遠くなるような年月を過ごした神だ。故に、人の願いを聞き届け、慈しむ心――母性を強く持っている。

さらには……先ほどまでマジメな口調で話していた青年が、いきな

り無邪気で無防備な姿を晒して来た。この行動は、現世での「ギャップ萌え」に相当するっ！ 想像して見て欲しい！ 今まで、礼儀正しくしていて好感のもてる異性が、困った子犬、あるいは子猫のような表情で迫ってきたら……！！ 貴方は、それに耐えることができるだろうか？

そう！ この瞬間神奈子は、小傘の行動に母性をくすぐられ、その上に「マジメ人間のギャップ萌え」を食らったのである。精神が参真でないとわかっていても、見た目は参真だ。頭で理解していても、心が追いついていなかった……

諏訪子と早苗は、大慌てで神奈子に駆け寄る。早苗は神奈子の手を握ると……

「ああ、早苗……宇宙が見えるよ……これが『萌え』か……向こうの世界で、もっと知っておきたかったな……」

どこか遠くを見つめている様子で、呟く神奈子。焦点が定まらず、精神は遙かコスモの果てへと旅立ちつつある。なんとか引きとめようと、諏訪子は必死に呼びかけた。

「神奈子！？ しっかりしてよ！ 神奈子がそっちの世界にいったら、この神社にまともなのが私しかなくなっちゃう……」

さりげなく毒を吐きつつ、神奈子を引き戻そうとした時に――

「神奈子様……！ ようやく理解なされたのですね――！！」

常識を投げ捨てた巫女が、神奈子の魂をさらって行ってしまった。二人はお互いにサムスアップし、その拳同士を、相手の前に突き出してこつく。

（（だめだこいつら……早く何とかしないと……））

遠目で見ていた入れ替わり組と諏訪子は、既に手遅れな二人を放っておくことにし、話を続ける。

「ゴホン！ とりあえず話を戻すけど、君にそのつもりがなくても、その状態自体がマズイのさ。人間が妖怪の身体に入る分には、たぶん問題ないんだけど……」

「た、多分!？」

「私たちも、こんな現象は見たことがないんだよ……だからはつきりとしたことは言えない。いえないけど……例えば、憑いた相手に全く手を出すつもりがなくても、人間が亡霊に取り憑かれたらよくないだろう？ たぶんこれに近いんじゃないかな？」

自信はないが、大さく的外してはいないはずだ。危険なことになる前に、何とかして精神を元に戻す必要がある。

「ちょ、ちょっと……僕たちは大丈夫なんですよね！？ 今は諏訪子さんだけが頼りなんですよ！？」

がしっ、と諏訪子の肩を掴み、不安げに揺さぶる参真（見た目小傘）。きつと神奈子と早苗の態度が、参真たちの不安を煽ってしまったのだろう。

「うん。そうだね……ホントにゴメン。あとで二人にきつく言っとくから」

「そ、それで私たちはどうすれば……」

こういったことは、諏訪子の専門ではない。しかし……なんとか出来そうな所は知っている。

「永琳のところに行くのがいいかな？ 彼女はありとあらゆる薬を作れる医者だから、精神をどうこうする薬も作れると思う。でも、今からはやめておいた方がいい。遠いし、迷いの竹林ってのがあって、人を惑わす竹林があるから」

「「そんなぁ……」」

つまりは、今日一日入れ替わったままが、確定ということである。げんなりと頭を垂れる二人に……

「よいではないか……今日はここに泊っていくといい。君のような純真無垢な子が、夜中に散歩など危険極まりない」

「神奈子様……鼻血が垂れてなければ完璧でしたっ……！！」

「これは鼻血などではないっ！ 愛だっ……！！ 私の中にある狂おしい感情が、鼻から零れ出てきているだけに過ぎない！」

終わってしまった二人が堂々と演説するが、どう考えても逆効果。かといって泊まる当てもない二人は、この申し出を受ける以

外に手はない。かくして……波乱の夜が、始まろうとしていた。

二十七話 カワイイは正義！（後書き）

神奈子様ファンの皆さま……申し訳ございませんでした！！！！

まさかのカリスマブレイク。しかも萌えに目覚めるってなんぞ！

？ いや、やったの自分なんですけど、キャラが勝手に動き出して、作者の表現力のままに書いたらこうなった。マジでどうしてこうなった……

二十八話 守矢一家 大暴走（前書き）

ここから、参真、小傘の表記について注意。

二人の名前が出てきたら、彼らの「精神」に呼びかけています。

小傘って呼んでたら、参真 の体に入っている小傘のことを、

参真と言ったら、小傘の身体に入っている参真のことを指します。

ややこしいですが……OK？

二十八話 守矢一家 大暴走

「「「「「いただきまーす!!」「」「」」」」

そうして五人は、ようやく夕飯へとたどり着いた。

暴走する神奈子と早苗をなだめる作業は、相当地間がかかり、他にも来客用の用意など……とにかく大変だった。あまり思い出したくない。しかも――

「どうだい小傘? 美味しいかい?」

ニヨニヨしながら問う神奈子に、以前のような威厳は感じられない……結局のところ、彼女を以前の神奈子に戻すことは出来なかった。

「こんなに人の食事がいいものなんて……私感激っ……!!」

「そうかそうか……ほれ、どんどん食べな!!」

涙を流しながら食べる小傘に、満足そうに頷く神奈子。一見大げさそうに見えるが……小傘の視点でみると実に当然の反応なのである。

今まで小傘の食事は、人を驚かせた時の感情エネルギーと、道具として使われた時に発生する感謝の念を食べてきた。おかげで、普通の食事は嗜好品でしかなく、口から何かを食べた所で腹は膨れなかった。ところが、参真の身体に入っているおかげで、普通の食事の感覚を、初めて得ることができるようになっていたのだ。

「うう……食べても満腹にならないなんて、小傘の身体は不便だなあ……」

別の意味で涙を流しながら、箸をすすめる参真。彼は逆に、食事をして空腹のままという苦痛を味わっているようだ。ご愁傷さまとしか言いようがない。

「神奈子様! 神奈子様! 参真くんを見てください……何か感じませんか?」

「なんだい早苗? 別に何も……」

「甘いっ！ 甘いですよ神奈子様！ 急に真面目なその態度……それもまたギャップなのです！！ 本当に……何も感じられないのですか……？」

いつもより三割増しで荒らぶる風祝は、神奈子を暴走させた張本人でもある。もし彼女が変なことを言いださなければ、今頃は元の威厳ある軍神へと戻せたかもしれない。

「その発想はなかったよ。なるほど、そういう視点で見れば……ぐぶっ」

早苗に言われたあと、神奈子は熱い眼差しを参真に向け、勝手に鼻血をポタリと垂らし始める。

「もうやだこの神さま……どうしてこうなったんですか……」

リスペクト値をきりもみ回転で急降下させ続ける神奈子に、うんざりと呟く参真。ある意味原因は参真たちにもあるのだが、事故だし仕方ない。

「ところでお二人とも……お風呂はどうするのですかねえ……？ まさか、異性の全裸を見る訳にはいかないですよねえ……」

「唐突ですね……確かにそうですね……」

ブレーキを投げ捨てた巫女も、ニヨニヨと笑っている。彼女だけが、この状況を楽しんでいるようだ。

「ならば……私たちが身体を洗いましょう！！ もちろん……参真さんと小傘さんは目隠しをしてですがね……ふふふふ……」

「そうだな早苗……早苗は男性の身体を見るのはまずいから、私がそっちを担当しようかねえ……ぐふふふふ……」

どこことなく犯罪者の香りを漂わせて、迫る二人。さすがにこれには、小傘と参真もドン引きだ。ジリジリと距離をつめてくるダメ神と巫女、ゆっくりと後ずさりする小傘&参真。いやらしい笑みに恐怖を覚える。その魔手が二人を捉えそうになった、その時……！

いくつかの弾幕が、ダメ神たちと客人たちの間を遮った。一斉に視線をそちらに向けると……

「いやあ、私も久々にドタマにきちゃったよ……神奈子、いくらな

んでも腑抜け過ぎ。早苗、私はそんな子に育てた覚えはないんだけどなあ……二人とも、ちよっと根性叩きなおしてあげる。これから……たっぷりと、ね……」

祟り神オーラMAXの諏訪子様がそこにいて……ばっちり守矢組を睨んでいた。とたんにすくみあがってしまう二人。蛙に睨まれる蛇とはこれいかに。

「……ちよっと見せられないようなことから、二人でゆっくろお風呂に入っているといい……大丈夫、こっちで二人は抑えておくから」

「え、えっと……」

「ゆっくろ入っていったね？」

反論しようとした参真だが、有無を言わせぬ口調で諏訪子様に止められた……触らぬ神に祟りなし。空気を読んだ二人は、そそくさと風呂場へと退避していった……

「さ、二人とも……覚悟してね？」

「おおお落ち着いて下さい諏訪子さま！ 私は神奈子さまに教えてあげただけです……！！」

「そうだそうだ！ ちよっとくらい、いいじゃないか別に！ 私だつてちよっと……」

「……だまって☆」

「「ひいひいひいひい！！」」

彼らが風呂場に行く途中で、二人の女性の悲鳴が、守矢神社にこだまする……

「ご、ご主人さま……ははは早く行きましょう！」

「そ、そうだね小傘ちゃん……一時間ぐらいかけて入ろうか……」

諏訪子様は、絶対に怒らせないようにしよう……入れ替わった従者と主は、そう心に刻みつけ、ゆっくろと進んでいった。

二十八話 守矢一家 大暴走（後書き）

なんだろう、最近調子があまりよろしくない……

小説の投稿スピードも戻せないし、ゲームのスコアアタックやっても軒並み下回る……どうしてこうなった……

二十九話 望郷 されど……（前書き）

PV……10万突破……だと……！？

こんなに伸びるとは……ありがとうございます！！

ほんとにそれしか言えませぬ。感謝の……極みっ……！

二十九話 望郷 されど……

（勢いできちゃったけど……どうしよう!?）

守矢神社には、備え付けの風呂場があり、参真と小傘の二人は脱衣所まで来てしまっていた。

諏訪湖様から逃げるようにここまで来たのはいいものの、体が入れ替わっているとはいえ、異性と一緒の風呂に入るというのは、やはりはずかしい。

「? ご主人様くどうしたの?」

そんな青年の心情を無視するかのように、小傘はいつの間にか全裸になっていた。初対面の時といい、小傘にはもう少し羞恥心というものを持ってもらいたいものだ……

「い、いや小傘ちゃん……もう少し僕の視線とか気にしようよ……」

「ふえ? どうして?」

「もういいや……」

一応忠言はしておいたが、何の事だかさっぱり様子。今日だけでずいぶんと精神力を消耗していた彼は、ついに細かいことに突っ込むことを放棄した。青年もヤケクソ気味に衣服を脱ぎ棄てていく。

「おじゃましまーす!」

「うう……やっぱり恥ずかしい……」

女性の体つきに違和感を感じながらも、全身にタオルを巻いて風呂場に入る参真、一方の小傘は、前をハンドタオルで隠してはいるものの、すぐにでも入りたくて仕方がないらしい。

「イイイイイイイイッオオオオオオオオオオオオオッ!!!!」

「ちょ!?! 身体流してから……うわ!?!」

我慢できずに、風呂へ飛びこむ小傘。衝撃と共に風呂釜から熱湯があふれ出し、参真に熱い津波が襲いかかった。たまらず彼は顔を覆う。

「うーん! 最高!」

背筋をピンと伸ばして、身体をほぐす小傘。まるで悩みから無縁のような振る舞いは、参真には少し羨ましく見える。今の状態を思い悩んでいる自分が、なんだかバカバカしく思えてきた。

「……ええい、ままよ！」

意を決して、彼も風呂場へと足を踏み入れる。こうなればヤケだ。なるようにしかならないと腹を括り、風呂の中へと入る。存外に風呂釜は大きく、二人で入っても余裕があるように見えた。これなら、三、四人ぐらいならゆとりをもって入れるだろう。

「……やっぱりお風呂はいいね」

「小傘、久しぶりで感激です！　もしかしてご主人さまも？」

「そうだね。ドラム缶風呂ばかり入ってたから、こういう風呂に入るのは久々かな？」

命蓮寺には備え付けの風呂などなかったため、水浴びするか、身体を拭くのみだった。こうして湯船に身体を沈めるのは、ずいぶんと久々な気がする。

「どらむかん？」

「えっと……向こうの世界のもので、危ない液体を入れて運ぶためのものかな。これに水を入れて、下から薪で温めると……いい感じに風呂になる。失敗すると、下の方だけ熱くなりすぎて悲惨なことになるけどね……慣れるまで大変だったよ……」

その時のことを思い出しながら、しみじみと呟く。ドラム缶は廃棄されていたものを拝借し、適当にブロックを拾ってきたまでは良かったが……火の勢いを強くし過ぎ、底だけ熱されてしまい、「上はぬるま湯、足元地獄」と呼ぶにふさわしい風呂が出来上がった……あれにはもう、二度と入りたくないと思っている。その意識のおかげか、窯の温度調節は完璧になっていた。

「そーなんだー　じゃあ、こうやって誰かとお風呂に入るのは初めて？　小傘が裸の付き合いデビュー！？」

「ううん。よく兄さん入ってたよ。大分前の話だけどね……元気にやってるかな……真次兄さん……」

遙か遠い……距離では表せないほど遠い地にいる、兄を思う。二男である真次には、参真が家を出るときに、顔を合わせることができなかった。この時兄は18だったが……アメリカの医学を学ぶために、海外留学していたせいで、連絡の一つも入れることができずに、参真は旅立つはめになっている。長男には……もう二度と会うことはないだろう。

「……やっぱり、元の世界に帰りたい？」

参真の思考を遮り、小傘が声を発した。どことなく、不満で不安げな……細い声。

「……大丈夫。もしそうなっても、小傘ちゃんを置いて行ったりしないから安心して？」

『また捨てられる』と、思ってしまったんだろう。微かに震えている声色を、青年は聞き逃さなかった。そつと頭の撫でてやり、彼女に微笑みかける。

「約束だよ！？ もし置いていこうとしても、次元の果てまで追っかけてやるんだから！」

「それは困るよ……主にこっち側の管理者の人が」

……上手く、誤魔化せた。参真の返答に安心した様子の彼女は、身体を洗いに湯船から出ていく。もう、この話題を振ってきたりはしないだろう。

（帰りたい……か……）

射命丸と名乗った鴉天狗記者にも、似たような質問をされたことを思い出す。普通ならきつと『帰りたい』と願うのが、普通の外来人なのだろう。けれども……

（珍しいものもある。自然もずっと綺麗だし、妖怪や弾幕ゴツコはこっちでしか見れない……でも、そんなのはきつと、後つけの理由でしかないよね。そうでしょ？ 真也兄さん……）

青年の本心は、ゆらりと湯気のように霧散していく。結局小傘が、青年の想いを知ったのは……もっと時間がたってからのお話……

二十九話 望郷 されど……（後書き）

ほのぼの書いていたつもりなのに、最後にちよつとシリアス入った……

入れ替わっているの、途中で忘れかけたのはナイショですWW

二十九・五話 神々の憂い（前書き）

データが消えたー！？ 現在復旧作業中！ 六割ほど修復しましたが、まだ回復しきってません。それでも、なんとか次話へとつなげることができました。更新遅れて申し訳ありません！

二十九・五話 神々の憂い

綺麗な満月が、宙にぽっかりと浮かんでいた。

守矢神社の縁側で、神奈子と諏訪子がそれを眺める。二人の手には杯があり、手持ちのツマミと月を肴にしながら、ちびちび飲んでいた。

「いやゝ今日は大変だったよ……終わってみれば早いもんだけどさ。ま、問題を余所に押し付けたただけなんだけどねゝ」

「……面目ない。しかし諏訪子、お前は参真たちを見ても何も感じなかったのか？ 私はもう、ツボに入ってしまったが……」

未だに神奈子は軍神に戻りきれていなかったが、それでも一番酷い状態から脱却していた。本気でおしおきしたかいが、あったというものである。

「別に何もなかったよ？ だって中身が妖怪じゃない」

「……どうやら、この事では相容れないようだな」

「相容れなくて結構だよ……」

かなり疲れた様子で、諏訪子が応じる。今日だけでも色々あり過ぎた。

唐突な訪問、青年の訓練に、入れ替わり現象、神奈子と早苗の暴走……さすがの神も、一日にこれだけのことがあれば、ぐったりもする。

「そうか……残念だ。ところで、参真の力の正体は一体何だったんだ？ 色々あって聞きそびれていた」

「ああ、そうだったけ？ 気になってたんだ……んじゃ話すよ。隠すことでもないし」

ほろ酔いになりながら、スラスラと語る諏訪子。それを聞いている神奈子は……徐々に険しい顔つきへと変わっていった。

「……ってな訳で、彼は周辺の自然の力を使えるみたい。いやゝ若いのに大したもんだよ。あれならその内、仙人になれるかもしれないな

いね。若い仙人って見たことないけど……」

「諏訪子、気が付いていないのか？ その話が本当なら、参真は……」

彼は、五年間山籠りしていた。

外の世界の関わりを絶って。誰とも出会いもせずに、出会いを求めずに。

それは即ち……『今まで生きていた家族や友人、現代社会との関わりをすべて絶ち切ってきた』

その上、『元いた場所に帰りたいとも思わず、山の中で絵を描き続けることに満足していた』ということになる。新聞には、推定二十歳と書かれていたから、記事を信じるなら、彼が家を出たのは十五歳の時になる……決断するには、あまりにも早過ぎる歳だ。

「……いや、ちゃんと気づいているよ？ 確かに彼は普通じゃない。でも、自然ってやつは、私たちみたいに意思の強い存在に比べて、悪意や敵意、欲望って奴に敏感だからね。少なくとも、参真くんが悪い人間でないのは確かだよ」

神奈子の言いたいことを、半分ほどは理解してくれていたらしい。けれども……肝心の部分が欠けている。

「それがおかしいと言っているんだ……諏訪子、さっき仙人がどうこう言っていたが、どうして人間から仙人になった者が、軒並み老人なのかは知ってるか？」

「急に何を……それだけ修行しなきゃ、仙人になれないってことじゃないの？ 参真くんは既に、かなり徳を積んだ人間じゃなきゃ出来ないことをやってるから、もう一押しじゃないかな？ 適当に善行でも行えば……」

「違うんだ、諏訪子。どれだけ修行して、善行を行うかではないんだ」

ただただ渋い顔のまま……神奈子が淡々と事実を告げる。

「『仙人になろう』とすることは、『仙人になりたい』という欲求のもと行われる行為だ。だがそれ故に、修行しているだけでは仙人

に出来ない。『仙人になりたい』という欲があるからな。煩惱を……欲を断ち切らねば、人間は仙人にはなり得ない。

そして若者というのは、往々にしてチャレンジ精神というのかな……何らかの強い欲を持っていて……いや、こう言うとも悪く聞こえるな。若者ってやつは、野心を持ってこそ若者らしく思えないかい？」

軍神に問われ、諏訪子が考え込み……そして、ハツとする。ようやく神奈子が言いたいことが、彼女にも理解できたのだ。

「ちよっと待って神奈子！　じゃあ若い仙人がいないのは……」

「そうだよ諏訪子。若者の仙人がいないのは、そいつらが欲にまみれて当然だからなのさ。老人のように、自らの役目を終えたと悟り、煩惱が枯れ果てて……その上で俗世を離れていて、徳を積んでいてこそ仙人になれる。」

若いうちに欲がないなんて生き方は……仙人の一歩手前まで来れるような生き方は、決していいことなんかじゃない。はつきり言って……参真はとんでもない異常者だよ」

「……っ！？」

驚愕することしか、出来なかった。

あんなに人のいい青年が、

まるで欲のない、あの無邪気な青年が……異常者などと、信じられなかった。いや、信じたくなかった。

けれども、それを否定する要素は何もない。むしろ、参真を異常と捉えることのできる事柄の方が多いだろう。

「なんでそんな生き方を選んだんだろうね。参真は……」

ようやく諏訪子が捻り出せたのは、否定でも肯定でもなく、疑問。どうして彼が、という疑問。

「わからないね。参真の親や兄弟は、もっとわからないだろうさ。きつと参真も、それを話してはくれないだろう。あの様子だと、自分自身がおかしいことに、気がついてなんかいないだろうし」

「……私たちでも、救えない？」

しばしの沈黙の後、苦々しく神奈子が頷く。

どうしようもないと。それが彼という存在なのだと。

「治す方法もないし、治していいものかもわからない。参真は、歪な生き方でもしなければ、生きていけなかったのかもしれない。誰も参真の異常性を理解できずに、こうなったのかもしれない。いずれにせよ、あたしらが下手に干渉できる事柄じゃないさ……だから、そんなに落ち込むんじゃないよ」

まるで子供をあやす様に、金色の髪を優しく撫でる。ここから先は彼が決めることなのだろうと、神奈子の目が言っていた。

「あーうー　なんだかんだで、神奈子には敵わないや」

気がつけばすっかり元通りになった神奈子に、安心して身体を預ける。

心地よい夜風と、神奈子の温もりを感じながら――そつと諏訪子は目を閉じて、まどろみの中へと、意識を委ねた。

二十九・五話 神々の憂い（後書き）

ようやく、この話へと持ってくる事が出来た……

冷静になって過去の文章を見てみると、参真クンは普通の人間にしては所々おかしな言動や、昔の話があります。気になった方は読み直してみてくださいね。

あと、この話の直後に、ちょっとした更新を入れる予定ですが、注意書きのようなものです。でも後半の方は、今まで読んで下さった方にも見てもらいたい部分がありますので、一応目を通して頂ければ幸いです。

三十話 レッツゴー☆永遠亭！（前書き）

チキシヨー！ 更新速度が落ちてやがる！！
おまけに話が進まねえ……こんな調子で大丈（ry

三十話 レッツゴー☆永遠亭!

小傘と参真の入れ替わりから、一日が経過した。

相変わらず暴走する風祝と、やたらとニヤつく軍神。早朝から来る二人の波状攻撃に、参真と諏訪子はごっそりと精神力を削られていた。

「昨日の神奈子はどこに行っちゃったの!？」

などと、諏訪子は潤んだ瞳で訴えていたが……今度はそれを見た早苗の方がダウン。本人は、「こんなカワイイ幼女を見て鼻血を噴かない方がおかしい」などと、参真たちにはさっぱり理解できない言葉を、三十分ほど熱弁し続けた。

ちなみに、これに神奈子が便乗するかと思いきや……

「うーん。早苗の感覚はさっぱりわからないねえ……一回派手に戦争したからか? どうにもそっち方面の感情を、諏訪子には抱けないな」

意外なことに、冷めた反応だった。早苗と違い、付き合いが長いからかもしれない。

「じゃあ、僕にも変な視線を向けないでください!」

「だ・が・断・る」

さらりと返され、テンションがひたすらに下降していく参真。傍目で見っていた小傘はというと、入れ替わってから、全く二人の視線に気が付いていない様子。

(いくらなんでも、無防備過ぎない!?)

見かたによっては、純粹とも言えるかもしれないが……昨日の風呂のことといい、小傘には少々、他人のことを気にしてほしいものである。『自分を拾った』という理由だけで参真についてきたりしてたのも、あまりよろしくないように思えた。

(僕が悪い人間だったら、どうする気だったんだろう?)

もちろん、参真はそういうつもりはないが、もしものことを考え

てしまう。今度、小傘を教育してやる必要があるかもしれない。

「ご主人さまへ早く出かける準備しよ！ 長く入れ替わっていると、よくないでしょ？ ケロちゃん！！」

当の本人は、相変わらずマイペースを貫いていた。参真の心情など、知るよしもない。何気に諏訪子様をケロちゃんと呼んでたりと、彼女は彼女でやりたい放題だ……といっても、諏訪子様も疲れていゝらしく、特に腹を立てることもなく答える。

「そーそー。永遠亭に行つて、薬を作ってもらふといいよ。あの薬師なら、精神を入れ替える薬ぐらい、カカツとやつてのけるだろう。こういう言い方はアレだけど、ウチの二人にも悪い影響が出てるし……早めにここを出るのが、お互いのためだよ」

「……ですよね。本当にごめんなさい」

思わず頭を下げる参真。事故とはいえ、神奈子と早苗が暴走した原因は、間違いなく入れ替わりにある。目的も果たした今、このまま守矢神社に居座つても利点はない。諏訪子様と参真の心労が溜まるだけだろう……

「「ええー！？」」

心の底から、残念そうな抗議の声が二人分ほど聞こえてきたが、もちろん参真と小傘はこれを無視。がっちり諏訪子様が二人を抑え、おかげで一時間も経たずに、出立の準備が整った。

守矢神社の石段の上に立つ小傘と参真を、送り出しに出る三人。そして二人は、永遠亭へ行くためにふわりと宙に浮いた。

「いやあ、ごめんね……こんな見送りしか出来なくて……」

諏訪子の両サイドには、デカイたんこぶをこさえた神奈子と早苗がいて、半分涙目になりながら手を振っていた。……どうやらまたお仕置きされたらしい。

「あはははは……お、お世話になりました……」

苦笑いしながら、参真は無難な言葉を選ぶ。それ以外に、この状況への対処法がわからなかった。

「さよーならー！！ またいつかー！！」

満面の笑みを浮かべたまま、大きく手を振りながら小傘が叫ぶ。
本当に彼女は悩みとは無縁だ。ただ無邪気に、彼女自身の思うがままに感情を発露してた。

それは妖怪故の純粹さか、あるいは、小傘本人の持っている気質なのか――

参真には、そこまではわからない。いくら自然と不自然を見分けるようにしたところで、「小傘らしい」ように見えるだけでは、この瞳には、自然のようにしか映らない。

けれども、彼女と一緒に居てくれることに、安堵している自分がいるのも確かだった。

（ずっと独りだったからかな……）

兄弟も、家族も、どことなくぎこちない関係だったし、極端に絵ばかり書き続けたせいで、友人と呼べる存在もいなかった。

こうして誰かと一緒に居ることに慣れてはいないが……この日々を楽しむ思える。

「？ ご主人さま？ どーしたの？」

「ん。なんでもないよ」

気にかけてくれる彼女が、とても心強く感じられる。身体が入れ替わってしまったのは、とんだハプニングだったけれど、入れ替わった相手が、彼女で良かったかもしれない。おかげで、あまり変なことを意識せずに済んだのだから。

「ならいいやー。早く永遠亭にいきましょう！」

「……うん。身体を元に戻さないね」

上空から目星をつけ、二人は幻想郷の空を飛んでいく。位置と方向は、だいたい諏訪子様に教えてもらっているので問題なかった。地上から行くには骨が折れるらしいので、空路をとっている。

ようやく入れ替わりを終わらせられることを期待しながら、小傘と参真は永遠亭へと飛んでいった。

三十話 レッツゴー☆永遠亭！（後書き）

最近参真クンの心理描写多いなあ……ま、主人公だし仕方ないね。
そして運命の質問or解答タイム開始！ 次回投稿までだよー！
書きこむのはお早めに！！

時間の判定するタイミングですが、次回投稿した時間より前に書かれていたものは受け付けます。遅れたのはダメですよ！ 現実
は非常ナノデス！！

三十一話 賢者とウサギと不吉なフラグ（前書き）

だ、誰にも質問されなかったでござる……ちよつと残念。

これにて、裏設定への解答、質問コーナーは一時終了となります。
気をつけてくださいね。

ではでは、本編開始！！

追記…えーりん誤字ってるー！？ ご指摘ありがとうございます
！！

三十一話 賢者とウサギと不吉なフラグ

迷いの竹林の奥深くに、その屋敷『永遠亭』はある。

うっそうと生い茂る竹林につつまれた、雰囲気のある和風な大屋敷。中にはお姫様でも居そうな大きさである。

「ふう……到着っ」と

「ご主人さま、疲れてる？」

「うん。やっぱり飛ぶのは苦手みたい……」

身体が小傘とはいえ、中身は参真である。霊力の質が特に変わるわけでもないのに、参真は諏訪子様に教えてもらった飛行法で飛んでいた。燃費が悪いわけではないのだが、強くイメージを練り続けなければならぬので、少々気疲れしてしまう。

「じゃあついでに、回復薬も作ってもらおうよ！」

「小傘ちゃん。僕たちお金持ってないのに、そりやまずいよ……」

残念ながら、参真たちはほとんどお金を持っていない。現代のお金も多少は持っているが、雀の涙ほどしかなく、こちらでも流通していないとのことだ。

「諏訪子様は大丈夫って言ってたけど……本当かなあ？」

昨日の就寝前に、参真がそのことを聞くと、「大丈夫！ 珍しい症状だから、喜々として見てくれるって！」とは言われたが、どうにも不安は拭いきれない。ただ、建物の前で悶々としていても、事態は好転しないだろう。意を決して、参真はその戸を叩いた。

「すみません。永遠亭はここですか？」

澄んだ女性の声が、戸の奥から聞こえた。

迷いの竹林に住まいがあるにも関わらず、この屋敷にはたまに人が来る。来るのは主に病人ばかりだが、彼女は健康そのもののようにだ。

「はい。そうですよ、患者さんですか？」

いつも通りの対応で、ウドンゲは玄関を開ける。そこには人の良さそうな、瞳の色の違う少女と、辺りをキョロキョロと物珍しそうに眺める青年がいた。

「ええ……永琳先生でしたっけ？ その人でないと、治せないらしいのですが……」

「？ 使いの方ですか？ どのような症状が出ました？」

長いこと永遠亭で、永琳の助手を務めてきた彼女は、医者としての場数もそれなりにくぐっている。ウドンゲから見えて……いや、誰が見てもこの二人は健康体そのものだろう。となると、この二人は使いだろうと思い、患者の容態を訪ねたのだが、

「それが、病気ではないのですが……笑わないで聞いてもらえますか？ 実は……」

「ご主人さまと身体が入れ替わっちゃったんだよう……」

「……はい？」

突然、無茶苦茶なことを言いだす。いきなり何を言っているのだろうか？ この二人は？

呆れたウドンゲは、彼女たちに帰るように促すことにした。

「ひやかしならまた今度にしてください」

「ほ、本当ですよ！ 証明するのは難しいのですけど……」

必死に喰いついてくる少女。彼女たちの話を信じるなら、今こうして縋ってくるのは、「彼」ということになるが……

（精神が入れ替わる……か。それなら、私の能力の応用で見えるかしら？）

ウドンゲは『狂気を操る程度の能力』を持っている。早い話が、相手の精神に干渉するタイプの能力だ。上手く使えば、精神の状態ぐらいなら視れるかもしれない。

(……!! これは……本当に逆になってる!?)

そうしてピントを調節すると……少女の中には男性の精神が、青年には女性の心が入ってしまった。さらに僅かではあるが、肉体と精神の拒絶反応のようなモノが視える。

「ちょ、ちょっと先生を呼んできます! 上がって待ってて下さいね」

こんな症状は診たこともない。彼女たちの言うとおり、師匠でなければこれを治すことなど出来ないだろう。畳の空き部屋に案内した後、大急ぎでウドンゲは駆けていく。

「師匠! ちょっと患者さんが来たんですけど……手は空いています?」

私室で薬の調合を行っていた、ウドンゲの師匠『八意 永琳』がゆっくりとこちらを向いた。

「今ちようど空いたところよ、で、どんな患者?」

「……心が入れ替わってしまったているみたいです」

師匠に問われ、ウドンゲは歯切れ悪く症状を告げる。先ほどの彼女……もとい、彼もこんな心情だったのだろう。こんなこと、普通に信じてもらえるはずがない。

「なにそれ……ウドンゲ、あなたふざけてるの?」

案の定、師匠は胡散臭いと言わんばかりに、こちらを半睨みしてきた。

「……やっぱり、そうなりますよね……でも本当みたいです。私の能力を応用して、二人の状態を見ましたから」

「……あなた頭良いわね。それなら本当なんでしょう。二人を診察室に通してもらえる?」

細かい説明もなしに、一瞬でどういうことを理解する師匠。月の賢者の異名は伊達ではない。……これで目を爛々と輝かせていなければ、完璧だったのだが。

「これだけで伝わる師匠の方が頭良いですよ……呼んできますね」
呆れ半分に呟き、もう一度、二人の元へ歩いていく。

この出来事が……後のウドンゲの不幸につながることを、誰も知らない。

三十一話 賢者とウサギと不吉なフラグ（後書き）

補足説明すると、永琳はウドンゲの説明受けた時点で、「入れ替わりは本当」「交換しているから患者は二人いる」ということまでわかってます。パネエ。

そして……タイトル通りに不吉なフラグが立ちましたよ……（ウドンゲに）

でわでわ、次回をお楽しみに！

三十二話 治療と対価

「……も、元に戻ったー!!」

永遠亭到着から30分後、参真と小傘は、無事に元の身体に戻る事ができていた。

諏訪子様の言うとおり、永琳はカッツと治療薬を作り上げた。症状や経緯を聞かれたのが10分ほどで、わずか20分で薬の調合が終了。そして、薬を飲んでみたら意識が遠くなり……気がつく、元の身体に戻っていた。

「本当に助かりました……お代はいいんですか？」

「いらないわ。こんな面白い症例に出会えたもの。……それに、この薬をベースに新しい薬を作れるしね」

何故か、お付きのウサミミブレザー少女……ウドンゲと呼ばれていた少女に熱い視線を送る永琳。……どこことなく、神奈子と同じ空気を感じたのは気のせいだろうか？

「ま、また私が被検体ですか!？」

「当たり前じゃない! 出来るのを楽しみにしていなさい?」

だいたいあっていたようだ。完全に永琳はいじる側で、ウドンゲがいじられる側(参真)らしい。似た境遇を味わったことのある参真としては、彼女に同情を禁じ得なかった。

「こ、こんなところに居ていられませんか!! 私はこちらから出ていきますよ!!」

言うや否や、高速で永遠亭を飛び出していく彼女。なぜか、参真は懐かしい感じがした。

(どこかで聞いたことあるセリフだなあ……なんだっけ?)

ぼんやりとした記憶の中に、ウドンゲのようなセリフ回しをしていたキャラクターが居た気がする。しかし、まともな生活をしているのは五年も前の話だ。はっきりと思い出せないということは、大したことではないのだろう。

「逃がさないわ……てる!!」

「了解ウサ!!」

永琳が叫ぶと、天井裏から別のウサミ少女が姿を見せたと思うと、あつという間に見えなくなった。きつとウドンゲを追跡しに行ったのだろう。参真個人としては、なんとかウドンゲに逃げきってもらいたい所であるが……

「ご、ご主人さまぁ……この人怖いよう……」

「永琳先生は恐いんだ……」

囁くような声で呟いた小傘は、そつと裾をつかみ、参真の後ろで怯えている。元の身体に戻っていて良かった。でないと、『大の男が少女の後ろに隠れて怯える』などという、なよっちい男丸出しの図面が出来上がっていただろうから。

「フフフ……帰ってきた時が楽しみだわぁ……そうそう、参真さん。お代のかわりと言ってはなんだけど、ちよつと姫様のお相手をしてもらってもいい?」

嗜虐的な笑みを浮かべる永琳は、その表情のまま参真に言う。……断れるわけもない。ここで下手な返答をしたら、ウドンゲ並みにひどい目に遭わされるかもしれないし、何よりタダで治療してもらったのだ。せめて何か、お礼の一つぐらいはしないと、参真の気も済まなかった。

「はい、いいですよ……つて姫様!?! 一体どこの国のお姫さまですか?」

「月から来た御方よ……現世では『かぐや姫』として伝わっていたはず」

「なんですって!?! それは本当ですか!?!?」

思いがけない人物の名に、参真は興奮を隠せない。確か『竹取物語』で出てきた人物で、都の貴族が、寄ってたかつて求婚するほどの美人だったはずだ。

「あら? 知っているの? 随分な喜び様じゃない……あなたも求婚してみる?」

「そういうつもりではないのですが……ぜひ彼女の絵を描いてみたい……!!」　きっと素晴らしい方なのでしょう!？」

期待が膨らみっぱなしの参真に、永琳は少しばかり距離をとったあと、ばつが悪そうに答える。

「え、ええと……過度な期待はしない方がいいと思うわ……」

「ご謙遜を!　あの『かぐや姫』ですよ!?　きっといい絵が描けるに決まっています!!　部屋はどこです!?　今すぐにも描き始めたい!!」

空想の中の人物を……しかも、絶世の美女の姿を描き写せるのだ。興奮しないほうがおかしい。すっかりヒートアップした思考のまま、怒涛の勢いで永琳に問い詰めた。

「その廊下の突き当たりよ……ってちょっと待って、いつの間に姫様の絵を描くことになってるの!?　私は遊び相手を……」

「絵師冥利に尽きるというもの……まさか、かぐや姫を描ける日が来るとは……!!」

彼女が指さした先に、参真は真っ先に駆けていく……二人の従者はその場に取り残され、呆然としていることしか出来なかった。

「な、なんなのあの人……」

「ご主人さまは絵のことになると、歯止めがきかないみたい……普段はやさしくて、話をよく聞いてくれるいい人なんだけどねー私もご主人さまの所にいかなきゃ!!」

いそいそと小傘もその場を後にし、青年の背中を追いかける。……姫様の実態を見たら、あの二人はどう思うだろう?　姫様としては面白いことかもしれないが、何かトラブルが起りそうな気がしなくもない。

(余計なこと……言っちゃったかしら……?)

このまま二人を帰しても良かったかもしれないが、今さら言ってもどうにもならない。上手く姫様と二人が仲良くしてくれることを祈りつつ、月の賢者はウドンゲ用の薬を調合し始めた……

三十二話 治療と対価（後書き）

次回はてるよがでるよ

……ゴメン。言ってみたかったんだ……

参真クンは、良い被写体や気に入った光景を見つけると暴走します。（第五話参照）周りが見えなくなり、熱中してしまうってやつです。そして、絵が描けるまで治りません。良いんだか悪いんだか……

三十三話 姫との対面、失望と……（前書き）

ああ、今回もキャラ崩壊というか……その……なんでもかこうなり
ました。

キャラがある程度勝手に動いてくれるのはいいんですが……ちょ
っと荒いお話かも……

三十三話 姫との対面、失望と……

そのころの輝夜はというと……

「いやっ……たあああああああああ！！ やつとラスボス倒せたあ！！！」

狭く、様々なゲーム機などが散らかった部屋で、蓬萊山輝夜はコントローラーを投げ捨て、勝利の雄叫びを上げた。

今やっていたのは、外の世界でシューティングゲームと呼ばれていたもので、弾幕ゴツコをゲームにした様なものだったのだが……何度も何度も撃墜され、クリアに三日ほどかかってしまった。

この間、彼女は一睡もしていない。おかげで目にはクマができ、髪はぼさぼさで、肌もガサついてしまっているが、普段から人にほとんど会わないので、何も気にしていなかった。

その時である……

「ついにかぐや姫に会える……！ いざっ！！」

「いやあああああ！！ 目がー！ 目があああああああ！！」

誰かの掛け声と共に引き戸が開き、三日ぶりの陽光が視界を焼いた。

目の前が真っ白になり、若干の痛みを訴える目を押さえる。

「え……？ この人が……かぐや……姫……？？」

「あんた！ 扉閉めなさい！！ 目が痛いのよ！！ 早く！！」

「は、はい……」

言われるがまま、入ってきた誰かが戸を閉める。薄暗い部屋の中、二人の男女はお互いを見つめあう格好になった。

「……」

沈黙が両者の間に行き交うが、決していい雰囲気ではない。輝夜からすればいきなり入ってきた不審者でしかなく、彼の目的も全くわからない。もし襲いかかってくるようなら、こいつをミンチにす

るぐらいの用意はある。

「……がう……！」

しばらくそうしていると、呻くように、青年がなにか言っているようだ。そつと耳をすませてみると……

「違う……！　こんなの『かぐや姫』じゃない……！！」

心の底から、がっかりしているのか……あるいは納得できないのか、所どころ声色が大きくなっていった。

「違わないわ。ここにいる私は正真正銘の『かぐや姫』よ？　初対面なのにずいぶん失礼な……」

「嘘だっ！！」

……そう言われても困る。というより、何なのだろう。この人間は？

いきなり人の部屋に押し掛けてきて、自分を見るや、『かぐや姫じゃない！』と騒ぎ立て……一体何様のつもり――

「だって……！　だってこんな……！！　髪はボサボサ！　目にはクマ……！　肌も日に当たたらな過ぎて不健康……！！　おまけに部屋は散らかり放題……！！　これのどこがお姫様……？　これなら小傘ちゃんの方が数段きれいだよ……！　僕の中にあつた『かぐや姫』のイメージを返せ……！！」

……言わせておけば、この人間は……！！

「へえ……よくまあ……レディに対してそこまで言えるじゃない？」

今にも爆発寸前になりながら、仮面の笑顔で青年をにらみつけたが、彼は全く物怖じしない。それどころか、ますます頭に血がのぼらせて、こんなことを言ってきた。

「あなたは『かぐや姫』なのでしょう……？　レディとかじゃなくて、逸話の中にいる彼女である証を見せて下さいよ……！」

「そんなの、私の美貌ってことなら……」
「鏡見て出直してください……！」

……もう、喧嘩を売っていると思えない。そういうことなら、

買ってやろうじゃないか……

「フ、フフフフ……言ったわね……言ったわねええええええ!!」
怒りに身を任せ、輝夜は一瞬で戦闘態勢に入る。ここでは、揉め事は弾幕ゴッコでケリをつけるのがルールだ。そのルールに反しない範囲でなら、ある程度の無茶は許されるだろう……

だから——無礼を働き続けた彼に、私自ら鉄槌を下してくれる——
!!

三十三話 姫との対面、失望と……（後書き）

この小説の輝夜はNEETです。

で、wktkしながら対面した参真クンが激怒。

しかし、参真クンもちよっくらなじり過ぎて、てるよに喧嘩を売る形に。

いや、人間って全員と仲良くできる生きものじゃないんですけど……てるよをここまでキレさせたの参真クンぐらいなんじゃない……

三十四話 竹林の死闘 ? (前書き)

さあさあ！ 姫様との対決ですよ！

一回で終わりそうにないので、番号を振りました。

え？ 何故ローマ字？ タイトルで察してくださいな……

三十四話 竹林の死闘？

「よろしい！　ならば弾幕ゴッコよ！！　それでケリをつけてあげる！！　ちょっと外に出なさい！！」

「いいでしょう……それが幻想郷のルールなら……！！」

険悪な空気をたっぷり振り撒いて、二人は室内から、外の竹林へと移動した。

……なりゆきで弾幕ゴッコをすることになってしまったが、今さら引くつもりもない。後ろからついてきてる小傘が、訳も分からずおろおろしていたが……説明するのがさすがに面倒だ。「下がって」とだけ告げて、彼女を引かせる。

「……ふん。その連れてる妖怪は戦わせないの？」

静かに飛び立ちながら彼女が聞いてきたが、参真は首を振った。

「あくまでこれは、アナタと僕で決着をつけるべきことです。小傘ちゃんには悪いけど……手を出さないで」

「う、うん……怪我しないでね、ご主人さま！　ファイト！！」

陽気な掛け声が、参真の背中を押す。それだけで力が湧いてくるような気がした。

「スペカは……そうね、5枚でいいかしら？」

「……いいですよ。やりましょう」

実は参真は、この枚数のスペルカードを思いついていない。それだけの枚数を使えるだけの霊力はあるものの、色々あって作り忘れていた。が、二枚ほど既に作成してある。あとは、戦闘中に作り上げるしかないだろう……

少ない枚数を指定するという手も考えたが、それだと弱く思われるかもしれない。この時点で、すでに戦いは始まっているのだ。できるだけ実力を隠しておきたい。

身体をこわばらせ、臨戦態勢にはいる参真。かぐや姫を名乗る彼女も構え、これでいつでも始められる。だが……そのまま硬直したま

ま、しばし二人は睨みあって動かなかった。

「……？ あなた、飛べないのかしら？」

彼女は、こちらが飛ぶのを待っていたらしい。意外と律儀な人だ……

「いいえ、これが僕の戦い方なので問題ないです」

「ふうん……ならいいわ、始めましょう！」

宣言と共に竹林上空から、赤と青の弾幕が迫る。始めは彼女を覆う様に動いた後……交差しながらこちらへと降下してきた。さらに、自分のいる場所めがけての弾幕も飛んでくる。

弾幕が地面を抉り、土ぼこりが舞う。衣服に何発か掠ったが、あえて自身の能力、『自然か不自然を見分ける程度の能力』は使わなかった。

この能力は、力の消耗具合はそうでもないが、霊力を集めながらや、飛行しながらだと負担が大きい。加えて、今回の戦いはスペルカードを五枚指定している。長期戦になることを予測して、体力を温存しておいた方がいいだろう。幸い、様子見で撃っているものなのか、見切るのに苦労するレベルではない。

「そろそろ行くわよ！ 難題『龍の顎の玉 五色の弾丸』！」

一枚目のスペル宣言。果たしてその内容は――

（レーザー！ それだけじゃなく、後ろからばら撒き弾！！ そしてスペル名……『龍の首の玉』のことか――！）

色とりどりの弾幕に魅了されることなく、回避行動を続ける。だが……このままでは火力負けするのが目に見えていた。こちらが放つ弾幕の何倍の密度で、光弾が迫ってきている。

さらに状況が悪いことに、向こうは空を飛んでいるのだ。こちらより回避行動のとれる範囲は広いと言わざるを得ない。

ならば、やることは一つだ。こちらもスペルカードを使用し、相手のスペルに対抗するのみ。

そして彼は、イメージと霊力を練り上げ――
初めて己のスペルカードを発動させた――！

「成長『グロリーウッド』！」

三十四話 竹林の死闘 ? (後書き)

ついに主人公が初スペル発動！

……話が始まってから三十四話もかかってるよ、この主人公。

どんなスペルかは続きをお楽しみに！ 構成としては、スペル合戦になる予定でござい。

あと、主人公は「かぐや姫」のお話を結構覚えています。財宝の名前まで覚えているぐらいには。

好きな物語だった分、ショックも大きかったってことです。

三十五話 竹林の死闘？

「成長『グローリーウッド』！」

地上を駆け巡る彼から、一枚目のスペルが宣言された。

輝夜に向けて手のひらを開き、そこから細いレーザーが一本、放たれる。

（なによ、大したことないわね）

もっと派手で太い光線を放つ、白黒魔法使いを見ている輝夜には、ずいぶんと物足りなく感じてしまう。スツと身体を宙で捻り、軌道からそれようとしたタイミングで――

いきなりレーザー五つに分裂した。しかも、うち一本はこちらを正確に捉えてきている。残りの四本は、一応こちらには向けて飛んでるが、下手に動きまわらなければ当たらなそうだ。おまけに分裂した光線は、始めに放たれたものより細い。これなら余裕……そう思った矢先だった。

分裂したそれが、さらにそれぞれ五本に分裂。合計二十五本になったが、まだ輝夜の所にはたどり着いていない。ただ……これから起こることはだいたい予測出来た。危険を察知した輝夜は、スペルを切り上げて、三回目の分裂を終えた光線の、すぐ横へと退避した。案の定、四回目の分裂が起こり、先ほどまで居た個所が、無数の光線に覆われる。

（あら、意外とすき間があるわね。前に出るまでもなかったかし……痛っ!？）

余裕で回避できるだろうと、油断していたマズかったか？ いつの間にか腕に焦げた跡がついていて……慌ててその場から離れる。ところが……

（あれ……？ こんなに狭かったかしら……？）

網目のように広がった、レーザーの間にいたはずだが、いつの間にか空間がやたらと狭く感じる。よくよく見れば、隣にあった光線

も太くなってる様な気がしたが……

ようやく余裕を持てた輝夜は、改めて青年へと向き直る。そこで……おかしい理由に気がついた。

彼から放たれている分裂前の一本の光線が……いつの間にか特大まで太く大きくなっている。分裂していたそれも、ずいぶん太くなっていた。

（まさかこれ……木が成長していくのを表現してる訳！？ めんどくさいスペカね！！）

彼のスペル名を考えれば、それが一番妥当なところだ。こうして分裂してるのは……『枝分かれ』なのだろう。このスペルは、一本の木が枝葉を広げ、幹を太くしていくのを表現していると考えられる。

彼は、一回目が空振りに終わったと悟ると、すべての光線を消して、再び始めから木を作り始めた。しかし、原理さえわかってしまえばどうということはない。今度は余裕をもって、枝と枝の間に入りこみ、彼に弾幕を撃ち込んだ。

しかし、地上にいるにも関わらず、彼はひらひらと弾幕を避けていく。じれったくなった輝夜は、二枚目のスペルカードで対抗することにした。

「難題『仏の御石の鉢 砕けぬ意思』！！」

ちようにど器の形になるように小型の使い魔を放ち、そこから大量の光線と撃たせておき、自分は星型の弾幕を降らせた。

こちらの光線と星型弾幕に焼かれた光の樹が、轟音と共に砕け散る。

（攻守逆転よ！ ざまあみなさい！！）

だが、これで油断してはいけない。まだ戦いは始まったばかりである。一枚目から厄介なスペルを撃ってきたから、かなりの実力者と考えていい。現に彼は、回避しながら霊力を溜めている様子だ。そして――二枚目が発動された。

「奇祭『まつぼっくり合戦』！」

三十五話 竹林の死闘 ? (後書き)

スペル解説コーナー!

成長「グローリーウツド」

まず細い照射タイプのレーザーを一本発射し、距離が進めば進むほど枝分かれしていくスペル。分裂の際に、分かれる点より参真側にあるレーザーが太くなっていくため、近距離で横に避けようとすると、巨大化した光線に焼かれる。

作中に書かれている通り(というより、スペカ名がまんまその通りなのだが)成長していく木をイメージして作られた。広がった枝葉の間に入って回避するのが効果的だが、移動にかなりの制限とストレスがかかるため、姫様はとっととスペカを撃って対抗した。

次のスペルの内容は……作者の体験をもとに作られたスペルとだけ言っておきましょう。

あ、それと神霊廟発売されましたね。プレイしてみたのですが……うん。かなり良いネタになりそうですね。ネタ解禁のタイミングってどれぐらいなのでしょう? 二次創作歴が浅いので、その辺りがよくわからないです。出来ればご意見お願いします。

三十六話 竹林の死闘 ? (前書き)

ど^んど^ん行くよー!!

三十六話 竹林の死闘？

「奇祭『まつぼっくり合戦』！」

「……は？」

いきなり宣言された、奇妙キテレツなスペル名に、間抜けな声を一つ零す。

何が起こるかと思いきや、彼の隣に小さな子供が一人現れただけ

「死ねええええええええええええ！！」

「!？」

と思いきや、背後からすさまじい掛け声と共に、何かが投てきされた。

風を切って頬をかすめたそれは……スペルにあった通りの「まっぼっくり」である。

振り向くと宙には、先ほどの子供より少し大きな子供が二人、まっつぷくりを手にしていた。うち一人は、鬼のような形相で「消えてなくなれ!」とか、「殺してやる!!」などと、物騒なことを言いながら、輝夜目がけて剛速球を連打し続けている。

反面、隣にいる子供は消極的で、明後日の方にまっぼくりを投
 げている。ただ、この二人は瓜二つの顔つきをしていた。双子だろ
 うか？

「怪我人出さないために、顔面狙いはだめだぜ！」

ゆっくりと山なりに飛んでいくそれは、輝夜には到底当たりそうにないが……二人目の彼が投げたまつぶっくりからは、小型の弾幕がばら撒かれている。おそらく、彼はばら撒き弾担当だろう。

「ええい！ うつとうしい！！」

彼らに攻撃を加えようと、こちらもお返ししたが……普通にすり抜けてしまった。幻像のような存在らしく、全く手ごたえがない。

仕方ないので、青年本体を狙う。隣の子供もきつと、偶像でしかないだろう。ところが、隣の子供が緑の板を持ってきて、弾幕を遮ってしまった。

「ソリシールドはありだよね兄さん！　ふふふ……これでゆっくり絵が描けるよ!!」

ニコニコしながら、小さな子供が板を支える。その後ろから本体の青年が、やはりまつぶっくりを投げつけてきたが、これもあさっての方向に飛んでいく。

しかし、同じタイプの弾幕を使ってくるとは思えない……しばらく注視していると、軌道を変え、輝夜の方へと飛んできた。

（一回よそに飛んでから追尾してくる弾幕!?　このスペル……名前はアレだけど、普通にガチじゃない!!）

三方向から、全く別々の弾幕が襲ってくる上に、本体は防壁つき……厄介なことこの上ないスペルカードだ。とつととスペルを破るべく、三枚目を使用する。

「難題『火鼠の皮衣　一焦れぬ心』!」

「うわっち!?!」

緑の壁を打ち破り、彼本体に弾幕をぶち込む。ついでに散らばっていたまつぶっくりも燃やしつくし、空間をすっきりさせた。

（さあ……次は何をしてくるのかしら?）

さっきから、彼はユニークなスペルばかり使ってきている。

次のスペルカードは、一体どんなものになるのだろうか？　たったの二枚だが……ずいぶんと自分を愉しませてくれた。

（早く次のを使わないと……黒こげよ?）

彼を炎で覆いながらも……輝夜は彼の弾幕を楽しみにしていた。まるで子供が、誰かが手品を繰り出すのを待つように……

三十六話 竹林の死闘 ? (後書き)

スペル解説

奇祭「まつぼっくり合戦」

まるで雪合戦のように、四人が二組に分かれて、まつぼっくりを相手に投げまくるスペル

元ネタは作者の体験からだったりしますw

作者は、一回引越して、あまり雪のふらない地域に行ったことがあるのですが、そこで行われていた「奇祭」ですね。雪の代わりに、落ちたまつぼっくりで雪合戦モドキを行います。本気で投げるのと、顔面狙い禁止のクリーンなルールでした。

出てきた子供は誰かって? ……いやあ、それを言っちゃあ面白くないでしょう? 気になった方は、よく読み返してみてくださいな……

三十七話 竹林の死闘 ? (前書き)

また短いかな? とりあえず投稿するZ E!

追記…話数ミスってるー! ? って次回もじゃないか; 修正じやい!

三十七話 竹林の死闘？

（まいったな……けっこう自信作だったのに……それにもう、作つてあるスペルカードもない！）

二枚目のスペル、「まっぼっくり合戦」も破られた。しかも、灼熱の炎のオマケつきで、返しのスペルが飛んできている。

（これは……「火鼠の皮衣」！？ さっきのは「仏の御石の鉢」だったし、残るは「燕の子安貝」と、「蓬萊の玉の枝」か……どんな感じになつてゐるのだろう？）

今まで彼女が使用してきたスペルカードは、『かぐや姫』の話で語られる『求婚の条件に出したアイテム』だったはずだ。これを再現した弾幕を、彼女は使用してきている。

ただ、このスペルカードは厄介なことに、周辺に残り火があつて、それにも判定があるようだ。

（くそ！ さすがに限界か……！）

地上を炎が覆い、地面にいたまま回避するのが難しくなってきた。一旦弾幕を張るのを中断し、空を飛ぶ準備を始めた。無数の重力の手をイメージし、相殺させるように霊力を乗せる。

急いでイメージを練り上げたため、少々ぐらつきながら中空へと飛び出す。こればかりは自分の能力の性質上、仕方のないことではあるが……

（……ん？ これは……使えるか……？）

イメージを練り上げた際、何故か輝夜の方にも「重力の手」が見えた。それどころか、辺りにある空を飛んでいる物に対し、それが認識できる。

（もしかして、重力が視れるようになってゐるのかな？ それなら……！）

自分の感覚のみを頼りに、即興でスペルカードを練り上げる。空中で身体の姿勢制御、輝夜からの弾幕回避をしながらでは大変だっ

たが、泣き言は後回しだ。上手くいくかはわからないが、他に手もないし、とっとと発動してしまおう。

「拘束『グラビティハンド』！」

宣言と共に、地上から大量の「手」が迫る。

重力を表現したそれは、片っぱしから辺りの「空を飛ぶもの」へと向かっていく。参真はそれに逆らうことなく、手に引っ張られるまま地上へと降りた。

「あんた、何をしたのよ？ 別に何も起こらな……うえ！？」

当然、空を飛び続けていた彼女にも、その影響が現われた。

避ける間もなく……というより、見えていないのだから避けようもなく、彼女は地上へと落とされた。

派手に尻もちをつきながら、彼女はこちらを睨む。

「な、何をしたのあなた！？ 空を飛べないじゃない！！」

「ええ、そういう効果のスペルカードですからね……ここからしばらくは、地上戦ですよ！！」

強く大地を蹴り、距離を詰める。向こうも離れようとしたが……動きが鈍い。地上での立ち回りに慣れていないようだ。ここまで狙い通りである。

（やっぱり……予測通りか！）

諏訪子様たちの話や、聖たちとの戦闘で一つ、わかっていたことが生きた。

幻想郷での弾幕ゴッコは、空中戦が主体になっている。地上だと回避が難しいのが最大の要因であり、そんなことをするのは自分ぐらいだった。

諏訪子様も地上で弾幕ゴッコをすることを、あまり良いように思っていないかった。ならば……おそらく自分のスタイル、「地上戦を主体に弾幕ゴッコを行う」のは、異端の部類になるのだろう。

故に幻想郷の住人は……「弾幕ごっこにおける、地上戦に慣れていない」！

「あわわっわわっ！！」

現に、地上へ落とされた彼女は慌てふためいている。良い傾向ではあるが……このまま仕留めきれるとは、どうにも参真には思えなかった。

（彼女が慌てている内に……四枚目も作らなきゃね……）

彼女の背後の竹林を眺めながら、青年は戦闘を続ける。

決着の時は、徐々に迫りつつあった――

三十七話 竹林の死闘 ? (後書き)

スペル解説

拘束「グラビティハンド」

参真が飛んでいる時のイメージを、攻撃に転用したスペル。

参真を中心とした空間に「重力の手」が発生する空間を作る。この空間に入った空を飛ぶもの、空を飛ばうとする者は、強制的に地面に墜落してしまうスペルカード。参真本人も効果範囲に入っているが、元々地上戦メインのため、影響は少ない。

いやあ、ようやくこのスペルを出せました。

参真クンの力がややこしい設定だったのは、原作のゲームで出来ないことを、やってみたかったからなんですよね。

ゲームだと主人公が空を飛ばますし、地上の敵といったものが出ないので、結果として、地上戦主体のキャラクターっていないんですよ。

かといって、神主さんがゲーム内で下手にその設定採用すると、別ゲーとなりかねない……やったことある人ならわかると思います。が、地上敵の出てくるシューティングと、出てこないシューティングでは、完全に立ち回りが別物になってしまいますから。

よろしい、ならば二次創作でやってやろう！ といった感じで、参真クンの設定が決まっていきました。そこからいろいろと、発展させていったところですかね？

三十八話 竹林の死闘？（前書き）

お待たせしましたっ！

今回は増刊号だよ！！

そう言えば台風すごかったですね……みなさんは大丈夫でしたか？
作者はちよつと帰るのに手間取ったせいで、八時間帰りが遅くなりましたよ……クソア！！

追記…話数ミスー！ 修正修正……

三十八話 竹林の死闘？

彼のスペルカードが発動し、輝夜は苦戦を強いられていた。

(これ、戦いづらすぎるわよ……！)

地に足をつけさせられ、思うがままに戦えない。『空を飛べない』というだけで、逃げれる範囲が激減し、おまけに生い茂る竹林が視線を遮ってしまう。

さらには、引きこもり生活が祟り、輝夜自身の体力は多くない。いかに不死身とはいえ、スタミナには限界があった。

そして青年は……地上を生き生きと走り回っている。どう考えても、彼の土俵に立たされていた。

(本っ当に……やっかいなことばかりしてくるわね……！ できれば、向こうより先にスペルカードを使いたくなかったけど……下手に意地張るとやられちゃうわね……)

お互いにスペルカードは、三枚ずつ使用している。戦いは終盤まで差し迫っており、下手なタイミングで使う訳にはいかないが……正直なところ、輝夜にとってこのスペルはかなりつらい。

ここで消耗するよりは、早く切り返した方がいい。そう判断した輝夜は、四枚目を使うことにした。

「難題『燕の子安貝―永命線』！」

発動と同時に、自らを縛っていた不可思議な力から解放され、もう一度空へと舞い戻る。今までのうつぶんを晴らすかのように、光の網と円状の交差弾が彼へと迫る。

そして、それが当たる寸前で――

「幻視『先代の記憶―六十年の生涯』！」

彼が返しのスペルカードを使用した。それと同時に、青年の姿が竹林の中へと消えていく。

「!? まさかこれって……！」

『耐久スペル』

スぺルカードの中でも、特殊な位置にあるスぺルカード。使用者が何らかの方法で、こちらから攻撃できない位置へと移動し、一方的に弾幕を避け続けなければならないタイプ。

使えるのは幻想郷でも一部の实力者のみ。かくいう輝夜も、以前の異変の際に『永夜返し』という形で使用したことがあるが……まさか、彼がその使い手とは思わなかった。

（全くこの人間は……本当に楽しませてくれるわね！）

頭を冷やして、意識を集中させると……いつの間にか、先ほどまでの竹林がなくなっていた。

かわりに細くて、背の小さい竹が一本だけ生えていた。試しに触ろうとすると……

「痛っ！？」 何これ……弾幕で出来てる訳？」

見た目は竹そのものだったが、普通にこれが攻撃らしい。おそろく、徐々に激しくなってくるだろう。現に、竹が少しづつ大きくなり太くなってきていた。

それと同時に――何故か、周辺の背景も変わっていく。四季をかなりの早さで巡らせているようだが……「ただ相手を倒す」ことだけを考えるなら、こんな機能は必要ない。

（魅せることも意識したのかしら？ なかなか粋なことするじゃない）

思わずニヤリと、口の端に笑みを浮かべる。

いつの間にか輝夜は、彼との弾幕ゴッコが……楽しくて仕方がなくなっていた。ただの人間でありながら、発想と立ち回りだけで、自分と対等にやり合う彼のことを、認めつつある。……本人は全く自覚していないが。

時間が経つにつれ、一本の竹を中心にタケノコが生え始める。タケノコはあっという間に成長し、立派な竹へと成長した。当然、成長した竹やタケノコにも判定がある。

危機感を覚え、距離をとろうとして――しばらく進むと、急に下がることのできなくなった。強引に突破しようとするも、不可思議

な力が働いて、力が入らない。代わりに、遙か上空へと逃げようとしたが、同じように阻まれてしまった。どうやら結界が張られているようだ……

意を決して、竹と竹の間へと入り込む。時々衣服にかすめながらも、なんとか潜り込むことへと成功した。

（ふう……これで一安心……したらダメよね。この人間のスペルカードが、こんな簡単に終わるはずがないわ）

竹の位置と、自分の位置を調整し、簡単に当たらないような場所へと移動する。時々、新しくタケノコが生えてきたり、笹の葉が散って肌を掠めたが、致命傷にはなり得ない。

たまに風に揺られたりもしたが、そんな単調な攻撃に当たる彼女ではない。

そうして、竹林は勢力を広げ——いつの間にか、輝夜のいない場所を覆い、結界内に、竹が満ちた。

（面白いスペルだけど……ちょっと無駄が多いかしら？　これぐらいなら、楽に——）

避け続けられる。見切ったつもりでいた彼女だったが——そこで変化に気がつく。

舞い落ちる笹の量が、先ほどより多くなっている。ふと上を見上げると……

（あれは何……？　竹の……花！？　初めて見たわ……）

葉の陰の間に、稲に似た地味な花が咲いている。迷いの竹林の竹は、花を咲かせたことがないし、育て親の近くの竹林も、開花どころかつぼみすら見たことがない。

（変なものね……千年以上前から、竹とは縁があるのに——）

こうして眺めていると、不思議と感慨深いものがある。『かぐや姫』はそつと、小さな花へと手を伸ばした。

触れると同時に、手が焼かれ、痛みが奔る。それでも構わずに、彼女はしばらく、竹の花を撫で続けた。これが、弾幕ゴッコであることも忘れて……輝夜はしばし、幻想の中で思いふける。

やがて花が散り、ふつくらとした果実がいくつも出来て、それと同時に――“竹林が枯れ始めた”

一つの竹だけではなく、竹林そのものが一斉に。文字通り、竹林が死んでいく……

（な、なんで！？　せっかく咲いたのに……！！）

その光景を留めようと、彼女は『永遠と須臾を操る程度の能力』を使ったが……竹林の崩壊が止まらない。笹が茶色に染まり、次々と幹が朽ちていく。

「どうして！？　止まって！　止まりなさいよ！！　枯れないで！！」

いくつもの枯れた竹林の弾幕が、身体を焼いていく。けれども、彼女にとってそんなことは二の次だ。

輝夜は不死身だ。ましてや、非殺傷を目的とした弾幕ゴッコで負った傷など、どうということではない。

対してこの竹林は……今まさに、その生涯を終えようとしていた。その光景が、ただ悲しくて。

どうしてもそれを、止めたくて。

ひたすらに能力を使おうと、何度も何度も力を込める。

駄々っ子のように喚き散らして、能力を発動させるも、流れる時を変えることができない。力を使っている感触があるのに……竹林の死を止められない。

やがて一つの竹がメキメキと音を立てて、輝夜めがけて倒れてきた。能力を使うことに気をとられていた彼女は、気がつくのが遅れてしまう。

そして、巨大な影が輝夜を覆い――

「つつ!?! 危ない!!」

竹が彼女を押しつぶそうとした、まさにその時だった。

参真はスペルカードを強制中断させ、彼女を元の世界へと引き戻す。

間一髪のところ『かぐや姫』は、こちら側へと帰還した。

「あ、あら……?」

何が起きているのかを把握できず、ぼんやりと空を見つめる彼女。もう、弾幕ゴッコをできる状態ではなさそうだ。

けれども……青年も彼女には勝てなかった。

（あんなのを見せられたら……もう『かぐや姫じゃない』なんて言えないよ）

……本当は、彼女が『かぐや姫』本人であることは、とっくの昔に解っていた。

それこそ、一目見た時に……自分自身の能力で。

ただ……あまりにもらしくない彼女に腹を立ててしまい、あのよ
うな暴言を吐いてしまった。

ただの間違いであることを願って。彼女がかぐや姫であることを
否定したくて。

けれども……竹と戯れる彼女は、否定のしようもなく優雅で、
朽ちていく竹を嘆く少女は、どうしようもなく綺麗だった。

「「はぁ……」」

お互いにやる気が起こらず、二人同時にため息をつく。微妙な空
気が彼らの間を漂って、黙したまま時間だけが過ぎていく。そんな
時……

「あら、姫様……ちょっといいですか? ウドングを捕まえました
ので……」

先ほど自分たちを治してくれた医者……永琳が出てきて、ぐずつ
ている彼女を引っ張っていつてしまった。心なしか、とても嬉しそ
うだったが……気のせいだろう。きつと。

「ご主人さま? 弾幕ゴッコはどうしたの?」

「……どうでもいいや」

既に参真も満身創痍だ。互いに戦意を喪失した今、無理に追撃する必要もない。決着はつけることができなかったが……無理に白黒つけることもないだろう。

「????? これ、勝負はどうなるの??？」

「引き分けでいいんじゃない?」

外から様子を見ていた彼女には、理解しづらいことなのかもしれない。けれども、参真としては――

(こんな決着も……ま、いっか)

綺麗な『かぐや姫』を見ることができた。それで十分だと、参真は思う。

(忘れないうちに……書いておこうかな?)

あの時の彼女は、伝承通りの『かぐや姫』だった。貴族がこぞって求婚してきても、おかしくないほど……息をのむほど綺麗だった。ならば――描く価値は、十分にある。

「小傘ちゃん。道具持ってきて!」

「ええ!?! 今書くの!?! さっきまで派手に戦ってたのに?」

「むしろ今じゃないとダメだよ! 早くお願い!!」

頭の中で構図だけでも組み立てながら、小傘にせがむ。ちょっと身体が疲れてもいたが、それ以上に描きたくて仕方ない。

「もう、ご主人さまは……分かったよ」

呆れながらも、小傘はテクテクと荷物を取りに行く。

「ごめんね? でも、僕はこういう人間だからさ……」

「知ってるよはいこれ」

手渡された、使い慣れた道具たちを手取る。そうして彼は――『かぐや姫』の絵を描き始めた。

三十八話 竹林の死闘 ? (後書き)

スperlカード解説

と思ったか? トリックだよ……

マジメな話をする、ここで詳細書くと、次回のネタバレになってしまうので、それを回避するために無しです。次回やります。

戦闘はどうするかでかなり悩みましたが……参真の性格上、あんまり派手にドンパチしたいタイプじゃないので、ここで中断するのが自然かなあと。

おかげで、どうやって話を続けるかで悩む羽目になりました。そこで、以前張っていた伏線の回収しつつ、話を進めることに。

お話のテンポと、ウドンゲは犠牲になったのだ……

三十九話 ウドンゲの受難（前書き）

気がつけば三十九話！ 次回から再び、謎解き質問おkになります
はたして、作者に挑む勇者は現れるのか……！！

追記…修正はなしといったな……あれは嘘だ……

三十九話 ウドンゲの受難

「ちょっと永琳！ どうしたのよ……急に」

「ふふふ……ちょっと面白い薬ができましたね……」

ゲテモノマツトサイエンティスト……ではなく、『月の賢者』に連れられて、輝夜は彼女の手術室へと歩いて行った。そこには……

「ししょー！！ 何をするつもりですか!？」

拘束されたウドンゲが、じたばたともがく。どうやらまた彼女が実験体らしい。

「ささ、姫様……とりあえずこの薬を飲んでみてくださいいな」

彼女から差し出された錠剤を見つめ、輝夜は一つため息をついた。

「はぁ……どうせ断つても、無理矢理飲ませるんでしょう?」

「察しが良いですね姫様♪ ぐぐつと飲んでください」

おずおずと飲み込んだが、特に身体に異常はない。……一体どういう薬なのだろうか?

「そしてウドンゲ……貴方にはこれを飲んでもらおうわよ♪」

そうして、ウドンゲにも似たような薬を手渡す。

「ま、まさか……それを飲んだら入れ替わる!？」

「フフフ……その通りよ!! どう? ウドンゲ……姫様と入れ替わってみたくないかしら?」

「是非っ……!!」

喜々として、ウドンゲも薬をのみ込んだ。そんなことを知るよしもない輝夜は、慌てて制止しようとするも、永琳が阻んでしまい、薬はウドンゲの体内へ……

「ちょ、ちょっと! そんなこと聞いてないわよ!?!? なんてそんな薬……!」

「これでしばらく姫様になれる! やったー!!」

歓声を上げるウドンゲ、悲鳴を漏らす輝夜。

しかし……永琳だけは、冷やかな目線で二人を見つめていて……

月の兎に、残酷な一撃が加えられた。

「馬鹿な子ねえ……せっかく貴方を捕まえたのに、そんなご褒美をあげる訳ないでしょう？」

「え！？ ど、どういことですか師匠！ 嘘をついたんですか？！？」

そういえば……ウドンゲが薬を飲んだのに、輝夜の身体に異常はない。今、どういうことになっているのかを、把握できているのは永琳だけだ。

「いいえ……嘘はついていないわ。けれども『ウドンゲがその薬を飲んだら入れ替わる』とは言ったけど、誰も『姫様と』なんて言っていないわよ？ 『姫様と入れ替わってみたい？』とは聞いたけどね」

「そんなのずるいじゃないですかぁー！！」

ヒーン！！ と彼女は悲鳴を上げるが、もう薬は飲み込んでしまった。解毒する手段もないだろう。

「え？ じゃあ私が飲んだのは……」

「ただの栄養剤です。姫様へのドッキリと、ウドンゲを上げてから落とすためですね♪」

してやったりと、につこり微笑む永琳。一方、先ほどの発言を聞いたウドンゲは、顔が真っ青になっていた。

「お、落とすって……」

「ふふ……貴方には『モルモット実験動物』になってもらうわ」

にこやかな表情のまま、いつの間呼びだしたのか、小さなモルモットが一匹、チウチウと鳴いている。まさか……・

「そ、そんな！ 他人と入れ替わる薬じゃないんですか！？」

「全く同じ現象を繰り返しても、面白くないじゃない？ だから、ちよつと趣向を変えて、全く別の動物と精神が入れ替わるようにしたわ。ネズミになった感想、教えてね？」

そして、永琳が合図をすると……手のひらのモルモットは、細かく砕かれた錠剤を飲み込んでしまった。

「い、いやああああああああああああああ……」

彼女が悲鳴を上げるも……徐々に声は掠れていき、やがてウドンゲとモルモットは、意識を失ってしまった。

「上手くいきました……フフフ、あとが楽しみです。ところで姫様、先ほどの人間は、いかがなさいました？」

「え？ ああ……ちよつと弾幕ゴッコをしたわ。なかなか楽しめたわね……そうよ永琳！ ちよつとやってほしいことがあったのよ！」

「珍しいですね？ 一体何事です？」

永琳に言われて、輝夜は彼との弾幕ゴッコのことを思い出した。頼みごとは永琳の専門分野ではないが、天才の彼女なら問題ないだろう。

「『迷いの竹林』の竹に、花を咲かせてほしいのよ。地味だったけど……気に入ったわ。できる？」

「あゝそれは無理です。絶対に」

あっさりと、彼女の従者は否定する。ぶっきらぼう過ぎる返答に、輝夜は少し不機嫌になりながらつつかかる。

「どうしてよ！！ ありとあらゆる薬を作る貴方なら、楽勝ですよ？」

「ええ……そうですね。『竹の花を咲かせる薬』自体は作れますが……それをやると、『迷いの竹林』が全滅します。そうなるというときに、月からの追手を巻けなくなりますのでダメです」

「……どういうこと？」

「竹と呼ばれている植物の習性ですよ。あの種は一度花を咲かせると……地下に張り巡らせている根っこも含めて、全部枯れてしまうんです。なので……花を咲かせると、その年で竹林そのものが消滅します。実は花が咲かないように、薬で抑制しているんですよ？」

それは……初耳だ。

だが、それが事実ならあの時、青年のスペルカードで竹林が崩壊したのも頷ける。

あの竹林は……役目を終えて、枯れたのだ。

「しかし、唐突にどうしてそんなことを？　確かに竹の花は珍しいですが……地味ですよ？」

「知ってるわ。けど……もう一度、見たかったのよ」

そうして輝夜は、すう、と息を吸い込んで――気分を変えた後、もう一度永琳にお願いをすることにした。

「ねえ、永琳……もう一ついい？　ちよっと肌艶をよくしたいわ。久々に……『かぐや姫』らしくなりたくなったの。いい？」

「かしこまりました姫様……仰せのままに」

今度は恭しく頭こうべを垂れ、彼女に一礼。薬棚から小瓶を取り出し、輝夜へと手渡した。

「これを飲めば、たちまちうら若き乙女の髪艶、肌艶を取り戻せますわ。副作用はないので、安心してお使いください」

「ありがと。それじゃあ、あの小市民に……ちゃんとした『かぐや姫』を見せてあげなきゃね」

薬瓶を受け取り、輝夜は衣類を溜めこんだ蔵へと向かう。中に簡単に着れるように加工した、『かぐや姫の時の衣装』があったはずだ。

（目にものを見せてくれるわ……待ってなさい！）

青年の驚く顔を想像しながら……彼女は廊下を駆けていった。

彼女が走り去った後――

「……人払いは終わったわ。そこで見てないで出てきたらどう？」
誰もいないはずの空間に、永琳は静かに呟く。
すると、彼女の向いた方向に、目玉だらけの空間が開くと――
そこから一人、金髪と紫の服を着た女性が……険しい顔つきで、
現れた

三十九話 ウドングの受難（後書き）

スペルカード解説

幻視「先代の記憶―六十年の生涯」

なんと四枚目にして耐久スペル。

とはいえ、これは迷いの竹林でしか使えないスペカとなっております。

このスペルは、「迷いの竹林を媒体に、『迷いの竹林』の一世代前の生涯を再現する」というもの。竹の部分にあたり判定あり。

そのため、ここでないと思えません。また、参真がとっさに思いついたのと、再現するという性質上、弾幕密度が甘いという欠点も抱えています。具体的には、姫様がみとれていなければ、余裕で取得できたレベル。

竹の生態についても解説しておきましょう。

竹と呼ばれる植物は、品種によってかかる時間が異なりますが、一般的には六十年に一回花を咲かせます。

そして、一回でも花を咲かせ、種を作ると枯れてしまいます。

で、竹というものは、周辺の竹と根を通じて巨大なネットワークを地下に敷いていて、これが竹林形成のカギにもなりますが……このネットワークを通じて、一斉に枯れるので、竹林が消えてしまうのです。

昔の人は、不吉の象徴のようにも見えたそう……

そしてとうとうゆかりん登場フラグ

ようやく、物語は佳境へ……動き出すのだろうか？

四十話 もう一人の賢者（前書き）

ちょっとわかりづらい回かもしれないですね。あとがきでの解説
あります。

今回は視点ががらりと変わります。

四十話 もう一人の賢者

八雲紫。

幻想郷の管理者にして、齡千年を超える妖怪の賢者。

普段は胡散臭い笑みと、身振り羽振りで、他人を煙に巻き本心がつかめない彼女が……

「どうしたの？　いつもの余裕はどうしたのかしら？」

これ以上ないくらいに真剣な表情だった。こんな彼女は見たことがない。

「今回はそんな時間がないの。この男に見覚えはないかしら？　守矢神社の神々に聞いたら、ここに向かったと聞いたのだけれど」

そうして差し出された『文々。新聞』には……今日、入れ替わりの治療に來た青年の顔がある。特に隠す必要もないので、永琳は素直に答えた。

「そうね、今日診療に來て、妖怪と精神が入れ替わっていたから治療したわ」

「ふうん……彼、おかしい所はなかったかしら？　能力的、精神的、肉体的……なんでもいいわ」

まるで尋問のような問いかけだが、永琳には心当たりがない。彼の印象も好青年といったところで、紫が焦る様な要素などなさそうだが……

「特に異常はないわね。強いて言うなら……姫様と弾幕ゴツコをして、生きていることぐらいかしら？」

「そう……それはそれは……『異常』なことだ」

「……訳がわからないわ。いい加減説明してくれる？」

こちらの返答とは正反對な結論に、じれったくなってきた永琳は、単刀直入に聞いた。このまま話していても、埒があかない。紫は口元を扇子で隠して、囁く。

「気がついていないのね……いえ、私が三週間ほど気がつかなかっ

たもの。貴方の立場からでは、無理もないわ。

あいつは幻想郷に対して、何らかの敵意があるかもしれないのよ。この新聞記事が、その可能性を示している。ちなみに私は、彼の幻想入りに関わっていないし、結界にも不備はなかったわよ」

あまりに突拍子もない発言に、永琳は紫の正気を疑いながらも、少し古くなった新聞記事を手を取った。読み進めるが……特に異常らしきものは見当たらない。

「……あなたは何を言っているの？ 外来人など、最近ではさして珍しくも——」

待て。

『特に異常が見つからない？』

彼は、紫の干渉なしに、この世界に辿りついた。結界に不備はなく、紫自身のきまぐれで連れてこられたわけでもない。

ならば——異常が見つからないこと自体が、異常だ。

ここは幻想郷。忘れ去られたモノたちが、最後に辿りつく楽園。

そう、紫の干渉や、結界の不備もなくこの世界に入り込むということは——「彼」という人間が、外の世界で忘れ去られたか、誰かの意図によって、送り込まれたということだ。

「その様子だと、理解できたようね。これで話が進めやすくなるわ」「待って……そんな……そんなことが……！！」

だが、一人の生きた人間が、『忘れ去られる』ということは、そう簡単にはあり得ない。故に幻想入りする人間は、自殺志願者や社会に不要とされた人間に限定される。

ならば——彼があんな風に笑ったり、他人と関係を持つとうするのはおかしい。もし普通に、幻想入りしてきた人間がいるならば——他人に不要とされ、こちら側に来たのなら——性格が曲がっていないはずがないのだ。

「……彼が幻想入りしてきたのは、誰かの意図ってことかしら？ でもそれなら、あなたが気がつくはずよね？」

「一番の疑問はそこなのよ。彼は至って自然に、こちら側へと幻想

入りしてきた。変な空間干渉や、あいつ自身の霊力が強ければ、私と藍が察知できるはず。

となると……本当に幻想入りしてきたことになるわ」

彼女の言いたいことは分かった。つまり「幻想郷に仇名す者」にしても、「普通に幻想入り」したにしろ、彼には不自然な点ができてしまう。

だから、彼を調べるために、紫はここまで出向いてきたのだろう。しかし……

「確かに彼は、他の外来人に比べて異常でしょう。けど、悪意があるかの確信は持てないわよ？ 下手に処分すれば、『幻想卿は何もかもを受け入れる』というルールを、敷いたもの自ら破ってしまうことになる……どうするの？」

今幻想郷は、なんとか各勢力でバランスをとっている状態だ。

その状態で、『管理者自ら律を破った』となれば、一気に内部崩壊しかねない。それは、紫の望むところではないはずだが……彼女は薄く笑って、

「それに関しては、一つ妙案がありますの。私が知りたいのは……彼の行方よ」

ぱちり、と扇子を閉じる。永琳に話して気が落ち着いたのか、彼女は普段の胡散臭いスキマ妖怪へと戻っていた。

「彼なら庭先で、姫様と一緒にいるはずだわ。ただ、姫様が彼を気にしている節があるから、さう際は気をつけて。アフターケアをするのは私ですから」

「はいはい……それじゃ、私は行くわ。お身体に気をつけて」

「私が病気になる訳ないでしょう？」

紫は、彼女なりの冗談を交えつつ、異空間へと身体を沈めた。ようやく終わったと、ため息をつくと同時に、手術室からチュチュと、やかましいモルモットの鳴き声が聞こえ始める。

「あら、ウドンゲ……気分はどうかしら？」

「チュー！ チュチュチュウウウウウウウウウウウウ！」

「何を言っているかわからないわ。とりあえず、飼育ケースに入れてあげるわね」

「チュー!!!!!!!!!!?!!?!!?!!?」

誰がどーみても明らかな悲鳴を無視し、永琳はウドンゲネズミの首根っこを押さえ、強引に飼育ケースの中に放り込んだ。閉じ込められた彼女は、何度も何度もガラスケースを叩くが、割れるはずもない。

「フッフ……たつぷりと実験してア・ゲ・ル？」

「チュウウウウ！！！！！！」

顔色の悪いネズミの入ったケースを、そつと手術室から持ち出す。

……『ネズミの精神の入ったウドンゲ』を、放置していたことに、彼女は気がつかないままだった。

四十話 もう一人の賢者（後書き）

今回のお話。主人公の異常性を改めて浮き彫りにした回です。

『普通に幻想入り出来る人間』が、普通である補償はどこにもないので。

むしろ逆で、何度も幻想入りしてくる人間を見ている紫からすれば、『異常のない人間が入ってくるのが異常』と捉えてしまうわけですね。

特にトラブルも起こさないし、人の良い性格だったものだから波風も立たず、おかげでゆかりんが気がつくのに三週間近くかかってしまった。ということです。

彼が幻想入りしてきたヒントとしては、紫に連れてこられた描写が全くないことと、わかりづらいですが、彼の小屋が幻想入りしたのも伏線です。

仕組みとしては、以下の通り

小屋が幻想入りしてくる↓小屋は忘れ去られている↓そこに住んでいる人物も知られていない公算が強い

といったところです。確信を持てる伏線ではないですが、裏付けにはなりません。なお、主人公が覚えているじゃないか！ と思うかもしれませんが、向こう側にいる人物に忘れ去られるのが条件です。小屋が幻想入りする前に、幻想郷へ入っている参真君の記憶はノーカンになります。

そして、第二回質問 or 解答タイムスタート！！

四十一話 純粹で無垢な 狂気のウサギ（前書き）

遅れてしまい、申し訳ありません！！

なのに、遊び回だよ！！

それと、質問解答コーナーは終わりです。

次回はだいぶ先になるけど、待っててね！！

四十一話 純粹で無垢な 狂気のウサギ

さて、そのころの参真たちはというと……

「ビュ……ビュ……ティフオオオオオオオオオオッツッ!!」

永琳から渡された菓を飲み、衣装を整えた輝夜を見た、青年の第一声である。

それ以降彼は、壊れたように絵を描き続けていた。かれこれ二十五分ほど経っていたが、既に二枚ほど描き上げており、しかも――「よくこの速さで、こんな綺麗に描けるわね……」

そう、この青年は『絵を描くこと』に関してはとんでもない人間だった。

一枚に十五分とかけずに、絵を描き終える時点でおかしいのに、その出来栄えたるや、見事としか言えなかった。輝夜がもし部屋に籠っている時間を、すべて絵に描くことに費やしたとしても、彼の領域には届きそうにない。

「三枚目えっ!! 次っ!!」

一枚を描き終える平均タイムを更新しつつ、また新たに絵を描き始めようとしたところに――

「ご主人さまー もういいでしょー?」

遠目から眺めていた、瞳の色の違う少女が、ひょいと絵を描くための用紙を取り上げる。

「ちよっ!? スケッチブック取り上げないでよ!! まだこの情熱は――」

「私たちが暇だよう……」

「も、もう一枚だけ! 久々だから……あああああまずい禁断症状があああああああ!!」

そう言いだすと……青年はうずうず、わきわきと手をせわしなく動かす。顔は青くなったり、逆に真っ赤になったりと実に忙しい。その様子は、何か病的なモノさえ感じさせた。

「きんだんしょーじょー？よくわかんないけど……ホントにあと一枚だけだよ？」

「いよっしゃあああああああ！！」

彼女がそつと、彼に紙の束を括りつけたモノを返すと、再び青年の指が、稲妻の如く閃く。……こういうのもなんだが、とても約束を守りそうではなかった。

「話聞いてなさそうね？」

「グスン。ご主人さまは、絵のことになるとうだから……気に入った景色とか、人物とかを描けないでいると、気が狂いそうになるんだって」

どうやら彼女は、厄介な主を抱えたらしい。……あまり自分が言えることではないが。

「チュウ？」

と、一歩引いた視点で見ていた二人に、突然ネズミのような鳴き声が聞こえてきた。振り返ると、ウドンゲがこちらを見て、首を捻っている。両手を前にぶらりと垂らしているそれは、完全にネズミの動作だった。

（そういえば……ネズミと入れ替わっていたわね。ちょっとエサでもあげようかしら？）

輝夜はこっそりその場から離れ、倉庫の中からニンジンをとってきて、彼女に渡してみる。すると、おずおずとネズミはそれを受け取り、生のままポリポリとかじっていった。

「チュチュ！」

器用なことに、ほっぺにニンジンを溜めこみながら、彼女は鳴いた。そのまま輝夜にすりよってくる。

「ちょ、ちよつと……」

「チュー？」

慌てて引き離そうとしたが、ネズミウドンゲは、「どうして？」と言わんばかりの視線で見つめてくる。

まるで小動物のような無垢さに――実際中身はネズミなのだが――

輝夜は射すくめられ、振り払うことができなくなってしまった。

「さっきの人？　かわいい〜どうしたんだろ？」

先ほどの少女がこちらに気がつき、ウドンゲの頭を撫でる。すると、心地よさそうに目を細め、チューチューと鳴いていた。

（た、確にかわいい……癒されるわ……）

怯えさせないように、そっと抱きすくめてみる。始めは、懸念そうな表情でモゾモゾしていたが……やがて、何もされないと分かると、今度は向こうから頬を擦り寄せてきた。

「チュ♪」

「ちよつとちよつと！　くすぐったいわよ……あははっ」

そつと甘えてくるネズミウドンゲに、輝夜は彼女を抱きかかえる。少女が「かぁいいい！！」とか、「私も私も！！」とか言っていたが、ネズミの方が離れてくれないから仕方ない。

青年もそんな三人を見て「いただきっ！！」と叫んで、六角の棒を走らせる。

そうして三人は、ネズミになったウドンゲを愛で続けた。

……遠くのシャッター音には、誰も気がつかないまま。

永遠亭からやや離れた場所で、二人の妖怪は密会を行っていた。

「射命丸のダンナ……本日の写真はこちらウサ！」

そつと懷から、てゐはいくつかの写真をとり出した。彼女は時々こうして、新聞記者である射命丸に、こっそりと写真をリークしている。

内容は主に、ウドンゲへのイタズラ写真だ。しかし今回ののは――少々趣向が違う。

「ふむふむ……これは……いい写真ですねえ……」

てゐるが持ち出したのは、先ほどウドンゲと姫様が戯れている写真だ。そして、上手いこと来訪者二人は、映らない角度で撮影に成功している。

「どういう経緯かは知りませんが……これはエロいですね。明日の見出しは、『驚愕！ 永遠亭で咲き誇る百合の花！』ですねえ！
！！！！」

全力で高笑いする文に、てゐるは黒い笑みを浮かべる。これでウドンゲは困ること間違いなしだ。姫様も、いい感じにからかうことが出来るだろう……

「ウサウサウサウサ！！！！」

「あやややややや！！！！」

ニヤニヤと黒い笑みを浮かべ、竹林に二人の笑い声が響く。

こうしてウドンゲの黒歴史は、また一つ増えてしまったのだった

……

四十一話 純粹で無垢な 狂気のウサギ（後書き）

ネズミウドンゲ回です。

小動物ってかわいいですね。 作者はハムスターとかは飼ったことないんですが、動物は好きな方です。でも飼うのはメンドクサイし、責任がとれそうにないので、飼わないようにしています。

ズルイと思うかもしれませんが……捨てるようなことは、したくないのでね……

四十二話 次の行先は？（前書き）

うう、風邪をひいたでござる……作者は結構、病気に強いはずなんです……皆さんは大丈夫ですか？ 今日なんかかなり冷え込んでるので、体の弱い方は、気を付けてくださいね！！

P V 二十万、ユニーク二万人達成……おお、びっくりびっくり

それと、あとがきにてアンケートをとります。

四十二話 次の行先は？

「いやあ……いい！ 実にいい日だった！！ これだけ描けば大満足だよ！！ お姫様、今日はありがとうございました！！」

「ふふん♪ たまにはモデルになるのもいいわね」

初対面の時の、険悪な空気はどこにいったのやら……輝夜と参真はすっかり上機嫌になっていた。

片や良い被写体に出会え、片や自分の美しさを、表現してくれる絵師に出会えてで、互いに自分の欲求を満たせたらしい。

「うんうん。私も元に戻れてよかった」 ところでご主人さま、今度はどこに行くの？」

「決めてないや……どうしよう……」

小傘に聞かれ、参真は首をひねる。今までは、当面の問題に対応するので大変だったし、自由に行動しようと思ったのは、これが初めてだ。おかげで、ロクに 幻想郷を回れていない。

参真としては、妖精や妖怪を描けるだけでも十分だったりするが、せつかなら、幻想郷にある名物なども描いてみたい。

「お姫様、どこかい景色のある場所は知りませんか？ 珍しいものでもいいです。何かありませんか？」

こういうときは、地元人に聞くのが一番だ。参真はまだ幻想郷の地理に明るくない。小傘に聞くというのもあったが、一緒についてくる彼女にはいつでも聞ける。それに、姫様からしか得られない情報があるかもしれない。

「そうね……私が知っているものと、冥界ぐらいかしら？ 桜が綺麗なわよ。もうすぐ時期だし、行ってみるのも悪くないんじゃない？」

「いいですね！ 桜！！ 最近見てなかったから、描きたいなあ……」

「珍しいところは……紅魔館かしら？ 真っ赤な塗装の大きなお屋

敷ね。こっちと違って洋館になっているそうよ。吸血鬼が住んでいるわ」

「なるほど……ありがとうございます」

冥界に、紅魔館。聞いた限りの話だが、参真はどちらにも興味を持てた。想像するだけで腕がうずうずしてくる。早く描きたくて仕方がない。

「小傘ちゃん。場所わかる？」

「大丈夫だよ！今すぐ行くの？」

「もちろん！」

「……本当にアンタ、絵を描くのが好きねえ……」

姫様に呆れられながらも、参真はとっとと準備を始めた。姫様の話を聞いてからというものの、いてもたってもいられなかった。特に冥界の方は、時期を逃すと葉桜になってしまう危険がある。あれはあれで味があるが、どうせなら満開の桜を描きたい。

「それじゃ、失礼します！ 永琳先生にもよろしく!!」

「行動早いわね!? ま、暇なときにまた来なさい」

軽く別れのあいさつを済ませ、小傘もそれに合わせて、ペコリと頭を下げた。そうして青年たちは、竹林の中を歩いていった。

ご主人さまがお屋敷を去って、私たちは迷いの竹林の中を進んでいく。

お姫様とケンカした時はどうなるかと思ったけど、なんだかよくわかんないまま終わって、ご主人さまが絵を描くのに夢中になった。

（スゴイ絵を描くけど、もうちょっと発作の頻度を下げてほしいかなあ……）

私の絵もいくつか描いてくれたけど、やっぱり凄かった。綺麗とか、そういうんじゃないかって……上手く言えないけど、とにかくご主人さまは凄かった。

何より絵を描いているご主人さまは、ずっとく生き生きしている。私が人を驚かすのに成功したときぐらいかな？　ご主人さまは、まるで絵を描く妖怪みたい。

それに、絵を描いていないときは、優しくていい人だし、私のこと拾ってくれたし、直してくれたし、いつも一緒にいてくれるし……

「冥界から先に行こうかな。小傘ちゃん、先導お願いできる？」

「ひゃうん!!」

ぼーっと考え事しながら歩いてたら、急に話しかけられて、私が驚く羽目になった。そういえば最近、人を驚かしていないけど、ご主人さまと一緒にいるとおなかが減らない。ホント、良い人に拾われたよね、私。こういしている今も、「大丈夫!？」って心配してくれてるし……とりあえず、安心させないと。

「ごめんなさいく考え事してたのく大丈夫だよ」

「ならいいけど……ところで、何考えてたの？」

ご主人さまが、そんなことを聞いてきた。うーん……ちょっと正直に言うのは恥ずかしいかな？　ごまかしちゃえ。

「えへへくないしょ……あれ？」

ほんのちよつと、どう答えようかと考えているときに、私は目を閉じていた。でも……その一瞬で、ご主人さまの姿は消えていた。

「ご主人さま？　……え？　どこ??」

ついさっきまで気配もしてたのに、今は全くわからない。急に一人ぼっちにされて、不安になって、怖くなって、辺りを見渡す。

「い、いたずらならやめてよ……ね、ねえ……どこ？　どこにいるの？」

返事がない。

おかしい。ご主人さまはこんなことする人じゃない。

じゃあどうして？　まるでこれじゃあ神隠し……

そこまで考えてようやく、私はご主人さまがいた足元に、スキマがあることに気がついた。もうほとんど閉じかけて、私は入れそうにない……

「な、なんで……どうしてこんなことをするの!？」

誰もいない空間に、私は叫ぶ。

きつと向こうは、聞こえているに違いない。

ほどなくして……扇子で口元を覆い隠した、金髪の妖怪……

「八雲 紫」は、小傘の前に現れた。

四十二話 次の行先は？（後書き）

紅魔館か、冥界かのアンケートかと思ったか？ トリックだよ…

…（二回目）

ふふふ…何人引っかけましたかねえ…作者に常識は通用しませんよ！！ 読者の期待を裏切って行きたいのでね…

で、それはともかく、アンケートの内容ですが…次の場所を回らせた後に…神霊廟編行きます。そうなると、どうしてもネタばれになってしまいますので、タグに「○○話から神霊廟 ネタばれあり」と追加した方がいいでしょうか？ というものです。ご協力お願いします。

四十三話 落とされたその先は（前書き）

ドライアスバーストACEXアップテートキターツ！ ジェネシ
スカッケー！！

おっと、取り乱して失礼しました……いや、決してやって遅く
なったわけじゃないんですよ？ むしろ東方やって遅れ……いや、
なんでもありません。

前置きはもういいよね！ では、話をどうぞ！！

追記…また文字化けか……文章の上に点をつけようとするとな化け
るみたいですね……修正します。

四十三話 落とされたその先は

そのころ青年は――

「っっ!？」

悲鳴を上げる間もなく、参真は奇妙な空間に落とされた。

引きずりこまれたその場所は、向こうの世界の標識などが転がる、目玉だらけの所で、身体が自由がきかなかった。

(なんだここ……!？ 不自然にもほどがあるよ!!！)

何もかもの存在があやふやで、安定しないこの場所は、参真にとって不快極まりない場所だ。いかにモノの見かたを変えても、あらゆるものが「不自然」にしか見えない。さらには、点在する不気味な眼球と、ロクに働かない平行感覚が青年の不安を煽る。

「小傘ちゃん! どこかにいる!？」

異界に放りこまれた恐怖からだろうか？ あるいは、純粹に彼女を心配してからののか……無意識に少女の名を叫が、返事はない……どこかではぐれてしまったのだろうか……

(ど、どうする!？)

なんとか脱出しようと思えるが、良い手が思いつく訳もなく……しばし呆然と漂っている――今度はどこかに吸い込まれ始めた。

「!？ う、うわあああああ!!!!」

抗う間もなく、彼はその世界の外へと追い出される。

「イタタタ……」

ずいぶん長いこと飛ばされた割に、身体にはあまり衝撃はなかった。普通に起き上がり、辺りを見渡せる余裕もある。予想以上に、あの空間はデタラメな場所だったようだ。

(一体なんだったんだろう……？ って、ここはどこ!？)

先ほどまで竹林にいたはずなのだが、いつの間にか夜の街にいた。空から雪のようなものが降っていたが、「不自然」に見えることから、人工のものだろう。

「てめえ！俺の方が飲み終わるの早かったろ！！」

を翻して回避したが、強烈な衝撃波が参真の身体を襲う。

(どうしてこうなった!? ええい! こうなったら弾幕で……!?)
普段通りに構えて、霊弾を発射しようとしたが……まるで力が入らない。周辺から力が全く伝わってこないのだ。

何故……と思考するまでもなく、答えは出た。ここ周辺には自然がないのだ。借りる相手がいない以上、力を集めることができるはずもない。

(ちよつとこれ……マズイかも!!)

相手は鬼が二人で、見知らぬ土地に、自分は力を使えない。

出来ることはただ逃げるだけ……状態は最悪と言っている。彼は、鬼に背を向けて走り出した。

「お! いいそいいそ! しっかり逃げろよ! 俺らも追いかけて甲斐がないからな!!」

「結構逃げ脚早いねえ……オイラたち相手にどこまでもつかない?」
必死に逃げる参真には、この声は聞こえていない。鬼たちにとっては遊びでしかないが、参真の側からすれば命がけなのだ。余裕などあるはずもなく、ひたすら参真は、夜の町中を駆けていった。

四十三話 落とされたその先は（後書き）

スキマ送りの表現は大変だったなあ……実際どんな感じなんですよ？

目玉だらけの空間とか、しばらく閉じ込められてたら気が狂いそうですね。作者の想像の限りですが、私はスキマの中に長居したくないですな……

四十四話 リアル鬼ごっこ？（前書き）

更新遅くなったけど、ようやく話は……あんまり進んでねー！
ゲーセン通いした結果がこれだ。アハハハハハハハハハハ！！（水
没）

四十四話 リアル鬼ごっこ？

わけもわからず、参真は逃げ回っていた。

追いかけられる理由はよくわからないが、捕まったら何をされるかわからない。普段はのんきな彼も、さすがにこれは、生命の危機だと判断できた。

「ふう……」

狭い路地裏に身を潜め、大通りの様子をうかがう。

どこか駆けこめないかと、人間を探してもみたが……どんなに人の容姿に近くても、人間として視ると「不自然」な人物ばかり。こは妖怪の町らしい。

（余裕があれば、絵を描きたいけど……どうしたものか……）

とりあえずは自分の能力を駆使し、あの二人が「不自然」に視えるように指定する。これで妖怪だらけでも、追っ手が来ればすぐわかるはずだ。

「よお！ 珍しいじゃないか！ 人間が旧都に来るなんて！！」

「うわあ！？」

正面に気を取られていたところに、後ろから豪快に話しかけられた。思わず尻もちをつきながら、参真が後ろを振り向くと……

「おお？ そこまで驚かなくなつていいじゃないか。肝っ玉の小さい男だねえ……」

そこには立派な一本角を生やした、金髪の女性の鬼がいた。

手には杯、上半身は昔の体操服に似たものを着用していて、本来ならアンバランスに感じられそうな格好だが……妙に様になっている。

「おい？ 大丈夫かー？ 今度はブーツとして……まさか一目惚れかい？」

「えっと……その一手前でした。こんな状況じゃなきゃ、すぐ絵に描き下ろしたいぐらいですよ」

「嬉しいこと言ってくれるじゃないの！ この色男〜！」

少々酒臭いのが気になる場所ではあるが……話が通じることから、この場で焼いて食われることはなさそうだ。

「で？ なんでここににいるんだい？ 昔の地獄なんぞ、観光できても面白くもないだろうに」

彼女が質問してきたが、参真は返答に詰まった。彼自身も、今の状況をよく理解できていない。が、鬼なら何か知っている可能性もあると思い、正直に話してみることにした。

「目玉だらけの空間に落とされて、ようやく抜け出せたと思ったら、ここにいたんですよ……信じがたい話でしょうけど」

「そりゃスキマだねえ……なるほど、それならスジは通る。その感じだと、ここがどこかわかってないってわけか」

「ええ、全く……さっきまで迷いの竹林にいたんですが……」

予想は当たったらしいが、スキマとは何だろう？ どこかで聞いたことはあるような気がするのだが……思い出せない。

「ここは昔、地獄だった場所だよ。今は地上から見放されたり見放したりした、鬼やら妖怪やらが集まって、毎日どんちゃんやってるところさ。」

まあ、人間をよく思っていない奴らも結構いるから、早めに地霊殿に駆けこむなり、地上に戻った方がいいよ。見たところ、霊力も雀の涙ほどしか持っていないようだし……ん？」

「げ！ すいません、ちよつと隠れます……！」

彼女の後ろから、「不自然」に見える妖怪が一人現れ、慌てて参真は身を隠す。

その妖怪はしばらく参真を探していたが、結局見つけることもなくその場を去った。

「……あんた、何やらかしたんだい？」

「目の前にいたら、勝手に鬼ごっここの逃げる役にされました……酒の何かで揉めていたみたいですが……詳しくはわかりません」

頭を抱えながら、青年は答える。いきなり巻き込まれて逃げ回る

羽目になり、しかも命の危険にさらされるという……幻想郷に来てからというものの、どうにも不幸な出来事ばかりのような気がした。

「よくわからんが、そりゃまずいね。鬼は勝負事にゃ、うるさい種族さ。逃げきるのは難しいだろうし、できればアンタがのしちまうのが、一番後腐れがないんだが……」

「そのことなんですが……ここで自然のある場所を知りませんか？

僕が力を使うのには、近くに自然が必要なんです」

なんとか反撃の糸口を見つけたくて、彼女に質問をぶつけてみたが、その表情は芳しくない。

「そう言われてもねえ……ここは人工の都市だ。洞窟とかならあるかもしれないが……はつきり『自然』と言い切れるものは、私にゃ思い当たらないな」

「ですよね……とりあえず地霊殿の人に聞いてみます。……辿りつけられればですけど」

「そっか。んじゃ、これ持っていきな。ちなみに、現在地はここ」
ヌツと差し出されたそれは、ここいら一帯の地図のようだ。

「いいんですか？」

「ああ、ここいら一帯なんて庭みたいなもんだから。いくらでも準備なんてあるし、何よりアンタ、ここがどんなところかわかってないだろ？」

「助かります。えっと……」

礼を言おうとして、参真は彼女の名前を知らないことに気がついた。こちら名乗っていないので、当然といえばそうなのだが。

「あたしかい？ あたしは勇儀。『星熊 勇儀』さ。あんたは？」

「西本参真と申します。勇儀さん。ありがとうございます……それじゃ、ちょっと逃げてきます！」

「ま、頑張ることだね。生きてまた会えたら、一緒に酒でも飲もう」
クツと杯を上げ、彼女は参真を見送る。

……後に、彼女が「鬼の四天王」ということを知り、ここで絵を描き損ねたことを、全力で後悔した参真なのであった。

四十四話 リアル鬼ごっこ？（後書き）

まさかの地底編に突入したことが、ようやく明らかになりました。あそこは都市十地下なので、植物はほとんどないという設定です。力の強さが「自然」という外部環境依存の参真君は、この場所は人里以上に最悪のコンディションです。はたして、二人の鬼から逃げ切り、地霊殿に辿りつくことはできるのか！？

四十五話 リアル鬼ごっこ? (前書き)

エースコンバット・アサルトホライゾンk t k r!! X B O X

360持ってなかったから待ってたぜええええ!!

……ええ、またゲームです。待たせて申し訳ありません。

だってしょうがないじゃない(ゲームを)愛してしまったんだ
もの♪

四十五話 リアル鬼ごっこ？

「よし……ここも大丈夫……」

路地の裏をこそそと、参真はネズミのように駆けまわっていた。出来るだけ妖怪たちの視界に入らないようにしつつ、地霊殿を指したいというのもある。が、それ以上に参真の身体には、疲労が溜まりつつあった。

無理もない。今日はかぐや姫と戦った後で、身体はそれなりに疲弊しており、さらには妖怪に追われ、能力は使えず、見知らぬ土地を彷徨えば、精神的にもつらいものがある。

そのため、彼は休み休み移動を行っていたのだ。空を飛んでいこうかとも思ったが、かなり目立つだろうし、そもそも今の状態では飛べるかも怪しい。

「あ！ みーつけた！ よくもまあ、オイラたちから逃げまわったもんだね。でも、ここまでだよ！！」

「……っ！？」

息を整えていたのに、一気に呼吸が荒くなる。

さっきはもう一人の鬼に追われたばかりだったというのに、もう一度全力疾走しなければならなかった。

「くそ！」

らしくない悪態をつきながら、所どころ、足がもつれて転びそうになりながらも、青年は町中を、人混みをかき分けて進んでいく。

「だあああ！ もう！！ ちよろちよろ逃げるなよ！！ 正々堂々戦えー！！」

「勝手に巻き込んで、無茶いいますね！？」

よりにもよって、鬼とやりあって勝てるわけがない。弾幕ゴッコが出来るなら話は別だろうが、それができれば、参真はとっくの昔に実行している。

「よいしょっ……！！」

「だあああ！ めんどくさいことをするなあ！！」

裏道と人混みを駆使し、相手の視界から外れるように動く。力が自慢の種族である鬼は、こうした頭を使った動きに対して鈍いらしい。

（よし！ 撒けるか……！？ しまった！！）

ぐるぐると町中を駆けていたせい、あるいは、疲労で感覚が鈍ってしまったのか……眼前には河川が広がり、退路がなくなっていた。袋小路に移動したつもりはなかったのだが……

「！！ 見つけたぜ！！ 俺の獲物だああああ！！」

どうして不幸とは連鎖するのだろうか？ 空から探していたもう一人の鬼にも見つかってしまう。絶体絶命だ。

「だああ！ オイラの獲物をとられてたまるかああああ！！」

「うるせえ！ オレが先だああああ！！」

相手より先に参真を捕えようと、二人は同時に、参真に弾幕を放った。

今はただの人間と同等な彼に、弾幕を防ぐことも、避ける手段も存在しない。

「がっ……」

悲鳴を上げることもできずに、彼は吹き飛ばされ、その先は――河川だ。

「う……うわああああああああ！！」

今度は盛大に叫び声を上げるが、彼の身体と共に、虚しく水面に吸い込まれていく……

「あゝあ……せっかくオイラが追いつめたのに……これじゃあ捕まえないよ」

「ケツ……すっきりしねえ終わり方だが……まあ、楽しめたしいいか」

『ただの遊び』を終えた鬼たちは、呆然と河川を眺める。青年を飲み込んだ河は、ボコボコと水面から泡を吐き出していた……

四十五話 リアル鬼ごっこ？（後書き）

ああ……今回もダメだったよ……あいつは話を聞かないからなあ……

ちなみに、エスコンに話を戻すと、私はヘリ乗りで、名前は「黒い目」です。

ブラックホークに合わせたのに、アパッチしか使えないという罫……

四十六話 沈む意識と――（前書き）

今回はちょっと長いよー!!

四十六話 沈む意識と――

身体が、意識が、沈んでいく。

鼓動だけが静かに響き、彼の目に映るのは暗い世界。

万事休すとはこのことか、全身に力が入らず、意識もはつきりしない。

（残念……だなあ……）

生命の危機に瀕しながら、青年には死への恐怖はあまりなかった。なぜなら自分は――それよりも、もっと恐ろしいものを知っている。あくまで参真にとつての恐怖ではあるが……「アレ」は死ぬことよりも、数段恐ろしいモノだった。

だからこそ、その恐怖から逃れるために、彼は「世界」を捨てた。余人の目に晒されず、自分自身の絵を表現できる場所へと行くために。

そうして暮らしているうちに、彼は幻想郷このせかいに辿り着いた。久しぶりの他人との接触だったが……しかし、相手は人間ではなかった。

けれども……そのことに対して恐怖は感じなかった。むしろ――

青年の心に湧いたのは安堵と興奮であった。

未知のモノを描けるといふ歓喜、相手が人間でないという安心感。自由気ままに絵を描けて、それを誰も咎めない世界。彼は、この世界で間違いなく「幸せ」だった――

せっかくの幸運が、このような形で終わってしまうのが、惜しい。ただそれだけ。彼が思うのはたったのそれだけであった。

（せめて力が使えれば、ここから出ようとも思うけど……）

彼の力の性質上、竹林での戦いで多少の疲労はあるものの、まだ霊力は残っていたが……肝心の呼びかける自然あいてがないのでは話にならない。力を使えないまま水面に出ても、待ち構えている鬼たちに捕まるだけだろう。生きたまま食われたりするぐらいなら、溺死の方がまだマシだ。

(……)

本当に、それでいいのだろうか。

心音が、淡々と訴えてくる。

まだ、死ぬのには早いのではないだろうか。何か打つ手はあるのではないか？

しかし、冷静に考えている余裕はない。ほとんどやけくそで、参真は自然と交信するために霊力を放つ。

持てる限りの全力で放たれたそれは、水中全体に響き渡っていく。もっと「外」に向けて交信するつもりだった参真は、思わぬ事態に困惑したが……予想より近い場所から「返信」が来た。

それは、水そのものの、この川からの返信。

ああ、そうかと、参真は納得した。

この川は、用水路としての川だと、人工的に整備された川だと、参真は思っていた。

それは事実だと、川は答える。けれども、そうではないのだと——いくら整備されようと、どれだけ外から手を加えられても……川の源流は、「自然」そのものであると——

今までとは違う質の力が、参真の中へと流れ込む。

浮力が高まり、あつという間に水中から水上へ。

——不思議だった。目の前には、先ほどの鬼がいるのに、全く焦りを感じない。肺に空気をたっぷりと吸い込み、大きく深呼吸をする余裕まであった。

力を得たのもあるが、それだけではない。一度死にかけたからか——妙に視界が冴えていた。

「……！？ ……！！！」

「……！！ ……！！ ……！！！！！！！」

その代償なのかはわからないが、鬼たちの言葉が聞き取れない。聞こえはするし、知っている言語であったはずなのだが——意味がわからなかった。

「……？ ……！！ ……！！ ……！！！」

自身も言葉を発するが、鬼たちと同じような感じになってしまう。
これは一体――

「……!!」

思案する間もなく、鬼たちが襲いかかってくる。

だが――全く焦りを感じない。そして、そんな自分に対して、戸惑いすら感じられない。これではまるで、亡霊にでもなったかのようだ――

鬼の剛腕が、参真を捉えようと迫りくるが、参真は目を逸らさない。澄んだ視界は、鬼たちの力の流れを認識させ――受け流すことを用意にさせた。

体制を崩した相手に、流れるように弾幕を撃ち込む。水気を纏った弾幕は、鬼たちの身体に打撃を与えた。

「!? ……!!!!!!」

激昂した鬼が、弾幕を放つも――参真には当たらない。

「川」と同調しているからか、自身の能力が強化されているらしい。『自然か不自然か』だけではなく、相手の『流れ』まで認識できるようになっていた。故に――弾幕の軌道が、その流れがハッキリと理解できた。

弾幕を放ったとは別の鬼が、もう一度殴りかかるも――今の参真には、力の流れさえ読めた。

「……纏『水の羽衣』」

唇が勝手に動き、スペルカードが発動した。

途端、水の薄い膜が全身を覆い、身体を保護していくが……このスペルカードは自身も全く知らないし、作った覚えもないスペルものである。

けれども間違いなく、これは自分の声だった。

「……」

それに対する動揺もなく、ただ淡々と鬼を見据える。

「!?!?!? ……!!!!」

スペルカード宣言を見たからだろうか？ 鬼は一層激しい弾幕によ

る攻撃を加えてくるも——参真は弾幕を避けない。なぜなら——このスペルカードは、弾幕を避けては効果を発揮しないからだ。

着弾と同時に水の膜が弾け、飛沫が弾幕となって飛んでいく。

「!!!!!!」

「!?!?!?!?!?!」

何の予備動作もなく放たれた反撃に、流石の鬼たちも回避出来ず吹き飛ばされる。

トン、と水面を蹴り、参真は追撃。平然と接近してきた彼に、鬼たちは弾幕を放つも——“再生していた水の膜”に阻まれた。

「!?!」

追撃の弾幕と、撃ち返し of 弾幕に同時に襲われ、たまらず鬼たちは吹き飛ばされ——

「うおおおおわあああああ!!」

「きゅ、急につよくなつたあああああ!?!」

悲鳴と共に、二人の鬼は倒れ——同時に、感覚が元へ戻る。

「はあ……はあ……なん……だった……んだ……ろう……今……の」

何が起こっていたのかは、自分自身にもわからない。

それを思考する余裕も、青年には残されてはいなかった。

「……あ……」

チャポン、と。両足が水面に飲み込まれる。とっくの昔に身体は限界だったらしく、にもかかわらず派手に動いたせいで、感覚がほとんどなかった。

くらり、ぐらりと視界が揺らぎ、それを最後に、彼の意識は途切れた。

四十六話 沈む意識と――（後書き）

主人公覚醒回。やっぱりピンチからの逆転は、主人公のみに与えられた特権ですよね！！

スperl解説

纏「水の羽衣」

薄い水の膜を、防壁として張るスperlカード。

攻撃を受けると膜が弾け、自動的に打ち返し弾を発射する。

スperlカード発動中は、少し間を空けるとバリアが復活するとい
ういやらしさ。

ただ、種さえ分かれれば簡単で、攻撃しなければ打ち返し弾が発生
しないので、回避に専念するだけでグツと楽になる。

鬼の人たちとは相性悪そう。勝負事してるのに、一旦引いて相手
の時間切れ待つかしてたら「姑息」と考えそうですし……

四十六・五話 残されたモノたち（前書き）

少しでも時間をさかのぼります。

四十六・五話 残されたモノたち

「な、なんで……どうしてこんなことをするの!？」

青年のそばにいた妖怪が、虚空に向かって叫んだ。まあ、目の前で堂々とスキマを使ったのだ。気づかれても同然か……ぬう、と空間を裂いて、八雲紫は現界する。

「あら、わかりましたの?」

「っつ!」

背後から驚かすように出現し、同時にオッドアイの少女が竦む。

しかし、向けられた視線に恐怖の色はなく、むしろ――鋭かった。
「……ふざけないでよ! ご主人さまをどこにやったの!？」

「地底ですわ!」

激昂し、叫ぶ姿は、紫の知っている彼女ではない。やれやれと首を振りながら、あっさりと紫は答えた。

「地底……!？」

「そう、地底。この前の異変もあって、貴方もこういう場所かは知っているでしょう?」

彼女に言っているいかと、ほんの数秒迷ったが、場所が場所だけに問題ないと判断した。仮に地底へと突入したとしても、彼女の實力では、地下の鬼どもに勝てはしないだろう。

「なんでそんなところにご主人さまを!？」 どうせなら私も一緒に

「……!」

「それでは意味がないのよ」

「どうしてよ!？」

……どうやら彼は、一緒に連れている人物にもボロを出していなかったようだ。この幻想郷で一番近くにいた相手にも、本音は語っていないらしい。

「ふふふ……人間という生き物はね、追い込まれた時こそ、その本性を見せるものなのよ。妖怪だらけの地底で、単独行動している人

間がいたらまず間違いなく、何らかのトラブルには巻き込まれるでしょうね」

彼が「幻想郷に危害を加えようとする人間」だとしたら、自分の力を勘違いした大馬鹿者か、綿密に計画を練った実力者のどちらかだ。

前者なら鬼に倒されて終わりだし、後者なら本気を出して鬼たちを撃退するだろう。そして、騒ぎが大きくなってきたら、『地底の主』が黙っているはずもない。あとは彼女に心を読ませて、彼の計画をオープンにしまえばいい。

「そんな！ そんなことしたらご主人様が……！！」

顔色を彼女の片目と同じ色——顔を青くしながら小傘が叫ぶも——紫は至って冷静なままだ。彼女は心を許したかもしれないが、紫としては敵の可能性もある。

「あら……この幻想郷では、人が妖怪に襲われて死ぬなんて当たり前ですわ」

紫がスキマ送りを実行できたのは、幻想郷という環境のおかげでもある。仮に彼が、偶然迷い込んだ人間だとしても、その人間が死ぬことは珍しいことではない。

故に……その言葉が小傘にとって、どれだけ残酷かも推し量らずに、続ける。

「そもそも、貴方も人間に捨てられた身……彼に執着する必要なんてないわ。代わりの人間なんて、いくらでもいる——」

びゅん！ と、言葉を遮るように弾幕が発射され、紫の頬に一筋の傷を作った。

「返して……！ 私のご主人さまを返して……！！」

顔を真っ赤にして——もう片方の目と同じぐらい顔を赤くして——彼女は叫ぶ。

真正面で小傘を見ていたのに、その動作は全く判らなかった。だが、もう油断はしない。

「唐傘妖怪風情が……私に勝てると思っているの？」

妖力を高め、スキマを周辺に展開する。紫としては、小傘に手加減をする義理はない。余計な時間を裂きたくない紫は、一気に弾幕を放った……

四十六・五話 残されたモノたち（後書き）

参真がさらわれた直後です。

主にゆかりんの思惑を語るところですな。厄介事だけれど、サトリの能力があれば一発で解決できますからね。

本編にもあるように、サトリと接触する前に死ぬようなことがあっても、紫としては「ご愁傷さま」ぐらいにしか思ってます。それで悩みの種がなくなるなら良いものといったところですかね……
おお、こわいこわい。

四十七話 目覚め(前書き)

PV25万、ユニーク2万5千人に達しました！

まだまだ物語は続きますので、楽しみにしていってくださいね！

四十七話 目覚め

“ 兄さん——ゴメン ”

真っ黒な空間にて、参真はただただ、兄に頭を下げた。

全く方向感覚のきかない場所だったが、しかしここがどこかは理解できた。

“ 本当に……ごめん。せつかく兄さんが、僕のために世界を残してくれたのに ”

自分でも、本当はこの言葉の意味を理解できていない——が、兄が自分に向けて語ったその時の動作には、一切不自然な箇所はなかった。故に、真実だったと参真は思っている。

“ いや、謝る必要はない—— ”

低く、宵闇を纏うようなその声は、多くの人を不快にさせる質のものだ。けれども同時に、間違いなく兄の口調で声色でもあった。

“ 私も後悔しているのだ、やはりこの世界には——存在し、存続し、継続していくだけの価値がない ”

“ ……兄さん？ ”

何かを悟った聖人のようだが、同時に不吉さを孕んだ言葉。両手を広げ——兄は語る。

“ あの時、私は世界を滅ぼしておくべきだった。だが、今度は失敗しない——能力も使いこなせ、意思なき怨霊どもの力も手に入れた。英霊どもが邪魔だが、憾^{うら}みの深さで私に敵^{うら}う者がいるはずがない—— ”

兄の背中から、膨大な量の力が迸る。数が多すぎて判別ができないほどの、量と、質と、種類を兼ね備えたそれは、今まで感じたことのないほどの、圧倒的ものだった。

“ ふむ……どうやらお前は、こちらに来るには早かったようだな。

まあ、幻想入りしたお前が、我々の元に来る方がおかしいのだが。

さあ、帰るがいい。お前がいるべき世界へ ”

身体が浮き上がっていく。遙か遙か、高い彼方へ。

兄は下から見上げるだけだった。その場に留まり、参真を見送る。

“待って……待って！ 真也兄さん！！”

名を叫んで、手を伸ばしても、兄から離れていく速度は変わらない。

暗黒の世界から抜け出し、再び闇が視界を包む。

だが、同じ闇でもその形質が違う。先ほどののは、夢の中のよう……ひどく曖昧で浮遊感があって、概念的な意味での闇だったが、今は目を閉じているだけ。身体感覚ははっきりしていた。

「う……」

小さくうめき声を上げて、参真は目を開ける。基調の整った洋館は、幻想郷では見たことのない部屋だった。

「うにゅ？ 気がついた？」

部屋も初めて見るものなら、そこにいる人物も、初めて出会った人物だ。

彼女はウグイス色のスカートに、長い黒髪を下ろし、胸のあたりには目玉のアクセサリー？ のようなモノをつけている。……調子が悪くて自然か不自然を見分けられないが、射命丸に似た羽をつけているから、おそらくは妖怪だろう。

「ここは……？」

「ここは地霊殿だよ。おにーさんは大丈夫？ あ、私は霊烏路 空 お空ってよんで」

「は、はぁ……それで、どうして僕はここに？」

少なくとも、自分の意思でここにきた記憶はない。確か、鬼たちを倒した後、そのまま河の上で気絶してしまったはずだが……

「えっとね、私の友達に死体好きがいて、おにーさんが水の上でプカプカしてたから、水死体をお土産に持って帰ろうと思ったんだけど、おにーさんを拾ってみたら、まだ生きてたから看病したの。三日間ぐらい寝込んでたかな」

「まだ生きてたからって……でもおかげで助かったよ。ありがとう

……ゴホッ」

ひどい言い草とも思いながらも、とりあえず礼の言葉だけは言っておく。最後の方は、咳き込んでしまった。河の中に浸かっていたせいか、風邪を引いてしまったらしい。

「うにゅ……火に当たる？」

「大丈夫だよ、寝てれば良くなるって」

ただでさえ世話になっているのに、これ以上迷惑になる訳にもいかないと思い、彼女の申し出を断った。綺麗な目をした彼女は、そっと参真の頬に触れて「無理しないでね」と言ってくれる。

……その仕草や気配は、どこことなく小傘を思わせる。彼女のような無垢さを、目の前の少女は持っていた。

「そうだ……さとり様呼んでくるね」

「さとり様？」

「うん。この地霊殿と私たちの主だよ」

「私たち？ 他にもいるの？」

「そうだよ。さっきいった友達も、さとり様のペットなんだ」

どうやら彼女は、誰かに仕えている身らしい。お空とは別に、彼女の主人にもお礼をいう必要があるだろう。しかも、複数の妖怪を従えているとなれば、この館の主人の地位は相当なものだ。そういえば地霊殿という名前も、聞いたことがある様な気がする。

お空の主について聞こうとも思ったが、既に彼女は退室してしまった。

地霊殿の主とやらは、どんな人物だろう？ 参真は、今まで出会ってきた『主』と呼べそうな人物をピックアップして、思いだしてみることにした

まず聖。初対面の時に半分拉致され、さらに彼女の寺に着いたら、小屋を燃やされていた。

次に神奈子。……のんきに饅頭を食べていたような気がする。そのあとのことは、思い出したくもない。

最後は輝夜。後半はお姫様だったが、私室は散らかり放題だった。

(まともな人、いないなあ……)

常識の通じない幻想郷だが、ここまで破天荒な人物像ばかりだと泣けてくる。……ここの住人は大丈夫だろうか？ 会ってもいないのに失礼かもしれないが、なんだか不安になってきた。

一人で勝手にそわそわしていると、扉が開き、お空とは別の少女が訪れた。

背丈は小さく、ピンクと紫の中間の髪色をしていて、服もそれに合わせているが……年下にしか見えない。が、きっと彼女は妖怪だろうし、自分よりも年上なのだろう。お空が呼んできたここの主だろうか？

「ええ、その通りですよ。私が地霊殿の主、『古明地さとり』です。体調はどうですか？」

「まだ万全じゃないみたいです。すいませんが、もうしばらくお世話になってもいいですか？」

本当は万全どころか、かなり状態が悪い。だが、変に心配させたくもなかったため、参真は『少しだけ世話になりたい』と、思っただけのように言葉を選んだ。

「ええ、構いません。……つらいのを隠さなくてもいいですよ？ 来客は珍しいので、歓迎していますから。しっかり病を治してくださいね」

……どうも彼女は察しが良いらしい。あっさりと見破られ、逆にこちらが氣遣われることとなった。見た目以上に物腰も落ち着いているし、ようやく――

「『ようやく普通の主に会えた』ですか。残念ながら、私は普通ではありませんよ」

「え……？ いやどう見ても普通……！？」

熱で頭が回っていなかったから、気がつくのに時間がかかった。今自分は、ところどころ言葉を発していない。にもかかわらず、何故か会話が成立していた。

「まあ、そうなりますよね。私は『覚』。人の心を読む妖怪よ」

誇る様な、忌み嫌うような表情を見せる彼女。

事情を知らない人物には、訳がわからないかもしれないし、そもそも、そうなる前にさとりを嫌ってしまう人も多いかもしれない。しかし『西本 参真』には彼女の心情が――

なんとなくだが、理解できた。

四十七話 目覚め（後書き）

伏線を張りながら、それっぽいダミーを撒きつつ、さらに伏線回収へお話を動かすという回。書く側としては無茶苦茶疲れました。

新キャラが出ると、イメージの固定に手こずります。作者のMP（妄想力ポイント）がガリガリ削られましたよ……

さとりはあらかじめ出す予定でしたので、キャラが出来ていたのですが、お隣に手こずりました。当初の予定では、参真君はお隣に拾われるシナリオだったのです。

けど、キャラを作っているうちに、異変こっそり知らせるような、しっかり者のお隣が、生きてる人と死体を間違えるわけないよなあ……という結論になり、じゃあ、お空に拾わせようということになりました。

お空は頭悪いけど、いい子だと思うんだ……。

四十八話 能力に振り回される者たち（前書き）

久々の一日二話投稿だぜヒャッハー!!

作者の脳内から……妄想が逆流する……!!

四十八話 能力に振り回される者たち

いつも通りのあいさつを終え、古明地さとりは、彼の心を観察していた。

以前はこの能力を隠して、人と接しようとした時期もあったが、能力がばれた時に糾弾されたことがあり、以降、初対面の人間でも、始めからカミングアウトすることにしたのだ。

そちらの方が後々面倒くさくないし、自分が嫌いならすぐに避けてくれる。人々の本音が渦巻き、それがすべて聞こえてくる中で、平然と表情を繕うのは流石に無理があった。

（さて……彼は何を考えているのでしょうか？）

多くの人間は、動揺し、混乱し、軽蔑し、恐怖する。少なくとも、あまりいいこととは思えないはずだ。現に彼は動揺していたが……そこから先が違っていた。

……彼から流れ込んだのは、深い憐みの念だった。安っぽい同情ではない。それは、直接心を読めるさとりだからこそ、わかるものだ。

「そう……ですか。その能力は、オンオフを切り替えられますか？」

「いいえ、表層や記憶といった、読む範囲の深さなら変えられますが、心を見ることをやめることはできません。妹はいやになって、強引に第三の目を閉じてしまいました……」

「……いやにもなるでしょうね。僕の能力も、似たようなものですか」

こういう時、さとの能力は便利だ。いちいち説明を求めなくとも、彼の記憶を読みとってしまえばいい。

「『自然か不自然かを見分ける程度の能力』ですか。なるほど……特別な訓練でもしていれば別ですが、人が嘘をつくときには、不自然な動作があるものです。

あなたはそれを見分けられてしまう。つまるところ私と同じように、

本心でない人々の関わりが、理解できてしまうということですね」

「……」

返事はないが、彼の心は肯定している。口に出したくもないほど、そのことを語るのが嫌だったようだ。

「ずいぶんトラウマのようですね。よほどつらい目に遭いましたか？」

「ええ……おかげで対人恐怖症です。妖怪の人たちと話す分には大丈夫みたいです。あんな目に遭うまでは、特に気にせずにすんだのです……」

あまり深く心を読んでいないにもかかわらず、恐怖がひしひしと伝わってくる。

（気になりますね、これは……ちょっと覗いてみましょうか）

彼のトラウマの内容が気になったさとりは、能力の範囲を拡大し、彼の記憶をだどっていく。

——この行動がいかに軽率だったことか——

そしてさとりは知ることになる。

彼が、幻想になった理由を——

四十八話 能力に振り回される者たち（後書き）

次回から主人公の過去編開始！ かなり長くなりそうです。

主人公の人間嫌いは、所々に伏線を仕込んでありましたが……一番の伏線は、やはり第一話からの話の展開ですね。

人里行きを断り、射命丸の申し出も辞退していますが、彼女の取材したいという下心があり、言動が「不自然」に見えたのでここでは断っています。宴会の時と同じですね。

その後の展開で人里を目指すさないのは、人間を避けている傾向があるためです。話が進むにつれ、いくつかの場所を回り、幻想郷の文化レベルが低いのを理解しているのだから、彼にとっては人里の光景も「珍しいもの」に入ります。

にも関わらず、悉く「人里に行く」という選択肢が出なかったのは、違和感を感じた人もいるのではないのでしょうか？ 幻想入りの拠点になりやすい場所故、分かりやすい伏線だったかもしれないですね。

何気に今まで接触していた人物も、早苗さんを除いて人間とは言えないのも、彼の人間嫌いを暗示しています。

早苗さんは、現人神である＋早苗さんの裏表のない性格が幸いし、参真君もそこまで毛嫌いしていませんでしたが、初対面の所では早苗さんを警戒する動作があります。

長々と解説失礼しました！！

四十九話 彼が幻想になった理由？（前書き）

さて……ついにこの時がやってまいりました。
分割しながら進めていきますね。

四十九話 彼が幻想になった理由？

彼の記憶、その奥底まで潜り、幼少期まで遡る。

……六才ぐらいに差し掛かると、記憶が曖昧になっている箇所が多くみられるようになったので、それ以上昔のことを見るのはやめることにした。

改めて、青年が何をしてきたのかを探るが――存外あっさりと、彼が何をしているかはわかった。

（……ほぼ毎日絵を描いていますね。ほとんど破り捨てているようですが、出来は十分……ああ、そういうことですか）

幼いなりに、それなりの絵を描いていたが「気に入らない！」と投げ捨てていた。さとりは始め、もったいないと思っていたが……彼の視点で見ることで合点がいった。

その絵は、被写体になったものと比べて「不自然」だったのである。どうやら参真の能力は、生まれつきのものだったようだ。

なんでそこまで「絵を描くこと」に執着しているのか、きっかけを探してみるも、青年の心情としては「楽しいから」としか感じられない。

描き始めたのも、誰かに言われたのではなく、部屋に転がっていた六角形の棒……「鉛筆」という道具で描き始めたら、楽しくなっていて続いていたようだ。

（家族とはほとんど会いませんね。兄二人は双子ですか……また喧嘩しますね）

顔がそっくりな二人の人物が、取っ組み合うシーンはこれ以降も何度もあり、うち何回かは参真が仲裁している。母親がおらず、父親も働き詰めでほとんど家にいないようなので、二人の喧嘩を止めるのは、参真の役目だったようだ。

といっても、参真が絵を描いている時は、兄弟のことよりも、絵のほうを優先したらしい。おかげであまり兄弟で遊んだ記憶もなく、

辛うじて彼が記憶しているのは、まっぼっくりを投げ合って遊んでいることぐらいか。

（家庭では苦勞していたようですね。本人はあまり気にしてはいないようでしたが……っっ！?）

そして、父親が帰ってきた箇所で、さとりは絶句することになる。

（な、なんなんですかこの人間……!?!）

参真の父親……「西本 平家^{ひらや}」には、ありとあらゆる「表情」がなかった。いや、それどころか——感情があるかどうかすら怪しい人物だった。

青年の記憶にある父の記憶のどこを探しても、笑顔も怒鳴り声もない。叱ったり褒めたりはするのだが……声色に抑揚が一切感じられなかった。

表情も一切変化がなく、その心情を全く図ることができない。さらにおかしなことに——参真の瞳には、この人物の状態が「自然」に見えていた。

……これが事実なら、彼の父親は「表情がないのが自然体」という、歯車のずれた人間ということになる。彼の能力についての記憶を探るも、このころはまだ「見え方」まで変えることはできず、「自然体か否か？」しかわからなかったらしい。

（どういうことですかこれ……? 何をどう見ても異常ですよ?）

……彼の記憶によると、母親は参真が三才の時に離婚したそうだが……原因は父親なのではないだろうか? 表情がないのが当たり前人間と、一緒に住みたいとは思わない。

無茶苦茶な家庭環境にも関わらず、彼にとってトラウマとなるような出来事は見つからなかった。自由に絵を描けていれば、それでよかったらしい。

（それはそれで、どうなんでしょうね……）

当時の参真の心情にも首をかしげつつ……さとりは、過去を見る範囲を変えるため、彼の幼少時代の過去から立ち去った。

四十九話 彼が幻想になった理由？（後書き）

さとりん視点で、参真君の過去を追想していきます。これは幼いころの記憶。彼のいた環境についてですね。

過去の見え方についてですが……パネルディスカッションのように見ていると考えるもらえればわかりやすいかと。それ十当時の心情や、画像、音声なども見れるような感じですよ。印象深い出来事を、断片的に覗くような感じになっています。

感想にも書かれていましたが、まっぼっくり合戦は、彼の過去から生まれたスペルカードということになっています。感想くれた方返信できずにすいませんでした！

過去の見え方を、もっとわかりやすく説明してくれ？ この表現だとちょっと危ない感じですが……「パワーなんか」というソフトで、出来事をまとめてみているような感じです。本編にもこう書くとかとか、ディスカッションと表現しようか迷いましたが、さとりが知ってるわけなのでボツになりました。

……うん？ こんな時間に誰だろう？

五十話 彼が幻想になった理由？（前書き）

第三回質問、解答タイムはっじまーるよー！！

追記…今度は読みが化けてるー！？ 修正します！

五十話 彼が幻想になった理由？

（また 絵 で す か ！）

もう何度目になるかはわからない。それぐらいこの男……西本参真は絵を描いていた。

……まだ十歳ほどの年齢と思われるが、軽く四ケタは絵を描いているだろう。最低でも、一日一回は絵を描いている。

その成果もあってか、確実に彼の技量は上がっていた。毎日欠かさずに絵を描いていれば、上達するというものである。

元からの才能と絶え間ない努力によって、本人は全く気にしていないが、西本 参真の画才は、独自の領域……もはや彼以外には描き得ることのできないと、断言できるほどのものになっていた。

（よくもまあ、これだけの量を……見ているこっちは、少々飽きてきましたよ？）

なんの変哲のない日々に、絵を描き続けるだけの日常。

友人はほとんどいなかったが、そんなものはどうでもいいと言わんばかりに、彼は絵に執心していた。本当にただ、それだけの生活に満足出来ていたようだ。

そんな日々に変化が訪れたのは、彼が十二歳のころ。

ある日、彼が学校——こちらで言う寺子屋——の授業中に、空いていた窓から小鳥が迷い込んだ。

皆が皆小鳥に注目してしまい、授業どころではなくなったので、クラスの何人かと、教師は鳥を出そうと懸命に動く。

けれども、働く人間がいれば、サボるのもいるわけで……他の生徒は、近くの友人としゃべるったり、机に顔をうつ伏せにして眠ったりしている。参真は……言わずもがな、小鳥の絵を描く作業に入っていた。

普段通りに鉛筆を操り、すらすらと輪郭から細部まで書きあげていく。三十分ほどにして書き上げたころ、ようやく小鳥は窓から出

——しばらくして——

「西本くん。この絵をコンクールに出してもいいかな？」

「コンクール？」

「そう。いろんな人が絵を描いて、それを専門の人に比べっこしてもらうの。西本くんの絵を先生たちに見せたら。みんな『すごい』って言ってたから、他の絵を描いた人たちにも負けな**い**と思うわ」

……こう言われた参真の内心には、理解できないという類の感情が生じていた。

絵とは比べるものではない。思うがままに描いていいものだと、彼は思っていたようだが、真摯な眼差しを向けられて、断るのも悪い**と思**い、彼は首を縦に振った。

「決まりね……きつといい結果が出るから、楽しみにしててね。この絵は預かるわ」

とんとん拍子に話がまとまり、出したコンクールの行方は——

ぶつちぎりの一位 だった。

これを期に、参真は脚光を浴びる事となる。当然だ。全くのノーマークだった人間が、今まで才気溢れると称されていた人々の、遙か上に立つこととなったのだから。

けれども、その内面は——

（『うるさくて絵を描くのに集中できない』……栄光などに興味はない。ってわけですか）

そう、彼は一切変わらない。いくらマスコミが騒ごうか、優勝賞金が入ろうが、彼は全くそういったものに興味を示さず、ただ徒にいたすら絵を描くことのみを行っていた。

周りが変わろうと、彼の態度は変わらない。そうして発表された絵に勝手に評判がつき、本人が望まぬままに話が大きくなっていったが、彼は気に入った目の前のものを、描いているだけ……

（こういうのを、『天才』って言うんでしょうね）

誰に求められずとも、誰も見向きをせずとも、ただ好きというだけで描き続け、結果誰にも辿りつき得ぬ領域まで至った。これを、天才と呼ばずしてなんと呼ぼう？

そしてこの才能が、

そして彼の人格が、

そして彼の周りの人間が、

すべての歯車は噛み合わないまま、彼の宿命が悲劇を招く。

五十話 彼が幻想になった理由？（後書き）

ここまでは、参真にとって幸せだった時期のお話になります。

次回是一回、番外編を挟みますよ！

五十・五話 妖怪という存在（前書き）

また話が前後します。読みづらくてすみませんorz
前回の番外編直後のお話。

五十・五話 妖怪という存在

「そもそも、貴方も人間に捨てられた身……彼に執着する必要なんてないわ。代わりの人間なんて、いくらでもいる——」

その言葉を聞いた瞬間、小傘の中で何かが弾けた。

怒りに身を任せたまま、彼女は叫ぶ。

「返して……！ 私のご主人さまを返して……！」

自分が弾幕を放ったことにも気がつかないぐらい、小傘は頭に血が上っていた。

「唐傘妖怪風情が……私に勝てると思っているの？」

がらりと空気が変わり、一気に臨戦態勢に入る二人。……普通に考えて、八雲 紫と多々良 小傘の力の差は歴然だ。万に一つも勝ち目はなく、紫のセリフは「絶対に負けない」確信があるからこそ言葉であり、同時に真理でもある。

「うわあああああああ！！」

全く周りを見ずに、唸り声をあげながら小傘は突貫する。直後、彼女を取り囲むように開かれたスキマから弾幕が放たれた。

闇雲に突撃するだけの行動だが、しかし紫の予想していない動きだった故に、結果として、弾幕の薄い箇所を通り抜ける。怒りに身を任せ、紫めがけて弾幕を放つ。

「……っ！？」

大玉の弾幕を大量に、かつ近距離から迫りくるソレに、紫はたじろぎ回避が遅れる。

轟音とともに土煙が広がり、視界を塞がれるが、それでも小傘は攻撃の手を緩めない。

「返して……！ 返してえ……！！」

声に涙を滲ませながら、悲痛な叫び声をあげて。

……そこにもう、紫がないことに気がつかないまま。

「えいっ♪」

「うぐ……っ」

お得意のスキマ移動で背後に回り込んだ紫は、右手で手刀を打ち込んで、唐傘妖怪を気絶させる。ふう、と一つため息を吐いて、賢者は腕を撫で下ろした。

（正面で戦ってたら、危なかったわね……軽率だったわ。この子は「捨てられて」妖怪になったのですもの。「代用がきく」といった類の発言を、許せるはずがないわ）

……彼女の怒りの大きさは、紫にも測りきれないものだった。それだけ彼のことを大切に思っていたというのもあるし、直後のこの言葉で、火に油を注いってしまった。その結果が――

（左手は使い物にならないわね……妖力も込められないし、回復にも時間が掛かるわ）

小傘が突っ込み、弾幕で攻撃してきた時……とつさにスキマを開いて避けたものの、左手だけ間に合わず、直撃を受けてしまった。た。

物理的に傷つけられたのならすぐに治るが、こういった念の込められた攻撃に対しては弱い。妖怪が精神への依存が大きい生き物故であり、同時に……だからこそ、こんなことが起こった。

本来なら弱小妖怪の弾幕を受けたところで、簡単に回復できるはずなのだが……よほど頭にきていたらしい。あの時の彼女は、普段より大きな力を出せていたのだろう。強い怒りの念を込められた攻撃は、確実に紫のダメージになっていた。

（さて、この子はどうしたものかしらね……）

このまま自分のところに連れ帰っても、また戦闘になるだけだろう。それでは小傘も回復しないし、最悪の場合、紫が倒される危険さえある。

迷った末に紫は、彼女をある場所へとスキマ送りにしたのだった。

五十・五話 妖怪という存在（後書き）

捨てるということは、必要なくなるということ。

ましてや、「傘なんていくらでもあります」

早い話、捨てても困らないから、小傘は捨てられてしまったわけ
で……小傘（の基となった傘）は一つしかないのに、代用が利くとい
う理由で捨てられた彼女は、「代わりがいる」といった意味合い
の発言はいやだと思います。

ましてや、良くしてくれていた彼と引き離されて、「その人間の
代わりがいる」なんて言われたら……ねえ……？

原作では「デザインが悪いから」となっています。少なからず
この理由もあると思います。色合い悪くても、台風とか来たり、土
砂降りでどうしようもなければ使うでしょう？ 元の持ち主は多分、
別の傘を買ってから、小傘を捨てたんだと思います。

……なんという無駄な妄想w

五十一話 彼が幻想になった理由？（前書き）

投票タイム終了だよ

そして――

五十一話 彼が幻想になった理由？

(どうして……どうしてこんなことに……)

カーテンが締め切られ、明かりもつけていない部屋の中央で、青年は黙々と絵を描き続けていた。

彼本人の表情も、描かれている絵も酷く暗い。心身ともに疲れきっているのが、はっきりと理解できた。

(……少々飛ばしすぎたようですね。巻き戻しましょう)

今までがあまりにも平凡な日々――何の変化のない日々だったものだから、数年ほど飛ばして彼の過去を見たのである。その結果、過程がわからないまま、事態が進行してしまっていた。

二か月ほど前まで遡り、その原因を突き止める。

訳のわからない単語が多数出てきて、参真もあまり理解できていなかったもので、さとりとしても、状況把握に手間取ったが……大雑把に言うと、向こうの世界のルールに反したのが引き金になったようにだ。

なんでも、向こうの世界では「肖像権」というものがあるらしい。極端な言い方をすると、「勝手に人や、人の持ち物を描いたり、写真に撮ったり、加工してはいけない」というルールだ。

と言っても、本来はそんなに厳しいルールではなく、悪質な利用でなければ、基本的には容認されていたらしい。ただ……それも決して完全なものにはなり得ない。いつの時代にも法を悪用し、詐欺を働く者がいるのだから。

そして、参真はその犠牲になった。

詐欺に遭ったのではない。が、内容はそれに酷似していた。

……参真は、絵を描く時に持ち主に特に許可は取っていないかったらしい。ほとんどの絵師は、元々許可など取っていないことが多いが……早い話が、「屁理屈」で追い落とされたようだ。

本来なら簡単に振り払えるはずのそれは、彼の特性故、どうにも

ならなかった。

彼は――幼いころから、「絵を描くこと」のみに集中していた故に、社交性も、世渡りしていく器用さもない。ただの戯言で済むはずの狂言は、絵の世界からあっさりと彼を追い落とした。

だけど、誰も表立って彼を支援するものもいなかった。

なぜなら……彼を誰もが羨み、尊敬し――同時に妬んでいたからである。

……よく考えてみよう。参真は若干十二歳にて、絵の世界に君臨した。三年間脚光を浴び続け、彼は既に成功を手にした様なものだ。同年代からしてみれば、羨ましいことこの上ない。

年上の絵師たちにとっても、参真は疎ましい存在だった。自分たちより若く、将来性があり、それでいて才能は自分たちより格上……嫉妬される材料は、十二分に揃っていた。

……最悪なのは、参真は外部からの悪意に対して――というより「外の世界」に対して興味をさほど持っていなかったことだ。彼は、「被写体となり得るモノ」にしか見ていなかったのである。予期せぬ角度からの攻撃は――彼に致命的な傷をつけることとなった。

この出来事に対し、彼が抱いた感情は「なぜ？」だった。

彼にしてみれば、ただ絵を描いていただけであり、批判される理由がわからない。教師の勧めでコンテストに出場し、注目を浴びても、「絵を職にできるならいいか」ぐらいの認識だった。

マスコミや、周りの人間の批判にさらされて、ここにきてようやく、彼は自分を褒めてくる人間の一部が「何故不自然に見えたのか」理由を知ることとなる。

あれは――笑顔の裏で、彼を妬んでいた者達だったことを理解した。

次に、心に湧きあがるのは、自らの行為を邪魔され、理不尽に絵の世界から追い出された怒りと……人間に対する強い不信と、恐怖だった。

絵の事だけに集中していたために――彼自身はマイナスの感情を

抱いたことがほとんどない。

そのまま十五歳までに成長してしまったがために、彼自身が負の感情を上手く理解し、処理することができなくなってしまい……次第に、自分がバラバラになっていくような感覚に襲われるようになった。

自分の味方が、誰一人いなくなる様な感覚。他者に対する強烈な嫌悪感と、「理解し難いモノが、群れをなして自分の周りで生活している」という恐怖。まるで精神を鈍器で碎かれていくような……そんな日々。

唯一、彼の精神を繋ぎ止めるのは、やはり「絵」しかなかった。生まれてからずっと、彼と共にいたソレを、手放すことなど出来なかった。

しかし……いくら描いても、暗鬱とした気持ちは晴れない。描いている最中だけは、精神を安定させることができるのだが、描き終わった後の感想は、「どうせ批判される」といった類の感情が渦巻き、描く度に心が荒れていった。

頼りになるはずの兄弟は……長男は引き籠りがちで、次男は二年前に、海外へ勉強に出ていつてしまっていた。

負の螺旋は積み上がり、精神に毒が溜まりきる。

そして彼は、自分を殺そうと――

(つつ！！)

……もう見ていられない。さとりは過去から目を逸らす。彼のことはもう、だいたい理解できたから……否、荒みきった彼の精神が、あまりにも痛ましすぎた。

(自殺、しようとしていたんですか……それで彼は、こちら側に――)

直接彼の心を見てしまった彼女は、現実にいる参真からも視線を外す。

予想以上に悲惨な過去に、迂闊に踏み込んだ自分を恥じながら……

五十一話 彼が幻想になった理由？（後書き）

参真の過去は、彼が「絵を描くこと」に特化しすぎたために引き起こされたことです。もう少し周りの人間に気を使っていれば、回避できたかもですね……

ちなみに、命蓮寺の気絶時（番外編）の伏線回収でもあります。あそこでは、「描いても批判される」と表現していますが、あれは疑心暗鬼を膨らませた彼の妄想で、実際は未発表の作品を指しています。

それと、聡い人ならわかっていると思いますが……さとりが微妙に事態を誤認しています。五年間の山籠り生活も、トラウマになるようなことが無い＋彼が自殺を思いついたのを見た＋もう彼を見られないで、完全にパス。

「理解できない群れが近くににいる恐怖」だと、妖怪もそうじゃね？となりそうですが、

良くも悪くも自分に忠実なこちら側の住人の性格のおかげで大丈夫だった

五年の歳月が僅かだが恐怖を和らげた

妖怪は基本単独行動

絵をほめる動作に不自然な個所が無かった
なのでセーフでした。

五十二話 癒えぬ傷跡、さとりは悟る（前書き）

PV30万、ユニーク三万……!?!? 夢か!?!? 夢なのか!?!?
これだけの人に読んでもらえるとは、書き始めた当初は思ってもい
ませんでした! ありがとうございます!!

五十二話 癒えぬ傷跡、さとりは悟る

さとりには聞かれ、少しだけ参真は昔のことを思い出していた。

向こうで絵の世界から追放された後、兄の助言を受け、五年間の山での生活ののちに、幻想郷へとたどり着いた。

さまざまな不幸に見舞われながらも、こちら側に来れたこと自体はよかったと思っている。向こう側にいては見る事が出来なかったであろうモノを、絵におさめることができたのだから。

「……つつ!？」

ぼんやりとしていた参真の耳に、息詰まった少女の声が聞こえる。見ると、その少女……古明寺 さとりは泣いていた。

「さ、さとりさん? 急にどうしたんですか……?」

「ごめんなさい……本当にごめんなさい……」

泣きながら謝るさとりは、彼は戸惑うことしかできない。ただの世間話しかしていなかったはずなのだが……

「いえ……そうではなくて……あなたの過去を、読ませてもらいました。まだ若いのに……こんな……」

「――!?!? アレを読んだんですか……」

彼の持つ、現世での悪夢。

自殺寸前まで精神をすり減らされ、周りの人間が、全員敵に見えるてくる狂気。

すべてが不自然に見え、他人の心^{ひと}がまるでわからなくなる恐怖。

それをそのまま読んでしまったとなると……さとり本人もつらいのではないか? あんなドロドロとした負の感情が、そのまま伝わってしまったのでは――

「……平気ですよ。ここまで酷いのは珍しいですが――多少は慣れますから」

「そう、ですか……」

出来ることなら、読まれたくはなかった。がしかし、断ったところ

ろで、彼女の能力を無力化できるわけではない。遅かれ早かれ、彼女は自分の記憶を読んでしまっただろう。

「……怒らないんですね？ 勝手に人の過去を覗いたというのに」
そのように言われても、青年としては『仕方ない』ぐらいの認識しかない。興味を持ったものを、詳しく知る手段があるのに、そのまま放置しておく人間は多くはいないだろう。

「私は妖怪ですけどね」

「そういう問題じゃないと思いますよ？」

まだ目を真っ赤にしているが、幾分か落ち着いたようである。
見た目幼い少女に、目の前で泣かれていては、青年としても気まずい。もっとも実年齢、精神年齢共に、彼女の方が上だろうが……

「ふふ、優しいんですね？ 甘えさせてもらってもいいかしら？」

こちらの考えが伝わったのか、さとりは表情を柔らかくして、参真の耳元で呟く。

「え、えっと……別のトラウマが甦るのでやめてください」

以前、星に黒コゲにされたことを思い出しながら言う。さとりにもそれは伝わったと思うのだが――心を読んだであろう彼女は、むしろクスクスと笑っていた。

「隣で無防備に寝ている娘に、手を出さないなんて紳士なお方……
添い寝してあげましょうか？」

「それだと風邪が移ります……って、さりげなく何言ってるんですか！？ 心を読んだ上で言ってますよね！？」

「私はそういう妖怪ですよ？ ね？ 普通じゃないでしょう？」

「今更その話ですか！？ ……ゴフッ！！」

病人であることを忘れて、興奮しすぎた参真が大きく咳き込む。
当然だが、わざとではない。

「あら、ごめんなさい。長く居すぎましたね……食事は後で運ばせますから、養生してください」

「う、すいません……」

そっと参真の額に手を当てた後、さとりが部屋を後にする。

一人残され、特にすることもない参真は、しばしの間、体を休めたのだった。

五十二話 癒えぬ傷跡、さとりは悟る（後書き）

主人公が自殺を示唆する場面は、二話当たりに伏線があります。番外もそうですね。

そして再び誤認発生。さとりが「過去を読んだ」と言ってしまったので、参真クンは「全部読んだ」と勘違いしてしまっています。

作者のさとのイメージは、「優しすぎるけど、ちょっと捻くれもの」のイメージですね。

五十三話 意外な接点（前書き）

さあ！ 独自設定の時間だよ！！

五十三話 意外な接点

「参真。はい、あ〜ん……」

「お燐さん。これ、何のバツゲームですか……」

「ほ、本当にお兄さんには悪いことをしたと思ってるよ……だから、その、あたいなりのケジメというか……」

地霊殿の客室、参真が横になっている部屋にて。

食事を運びに来たさとの従者——火焰猫 燐が、顔を真っ赤にして青年の口元に、お粥の入ったスプーンを持っていく。

「さとりさんに言われてですよね？」

「うぐ……やっぱわかるよねえ……でもこうしないと、後でさとり様に心を読まれてバレてしまうよ……お兄さんも男だろう？ 腹を括ってくれ！」

グイグイと押し込むようにスプーンを口へ。ここで食べてもらわないと、お燐はこれより恥ずかしいことをしなくてはならないからだ。

強引な彼女の行動に、参真はしぶしぶ口を開けて、運ばれたそれを咀嚼した。

「この年で『あ〜ん』は恥ずかしいですよ……」

「そ、それはあたいも同じだよ！！ 原因はあたいが勘違いしたのがいけにゃいんだけど……」

そうして、お燐が青年を見渡すと……さとりが見に来たときより、重症になった参真がいた。

あの後、仕事を終えたお燐が地霊殿へと帰ってきたのだが……ちようどその時、さとりが参真の部屋から出て行くタイミングだったのである。

赤く泣きはらした瞳を見て「さとり様を泣かせた」と、お燐は激昂。ドア蹴破って、もともとぼろ雑巾のように弱っていた参真を、さらにズタボロにしたのであった。

後に、これがお燐の早とちりだったことが発覚。幸いトドメをさす前に事は済んだが、参真は全身を弾幕に焼かれ瀕死に。罰としてお燐は「参真をつきつきりで看病すること」を命じられてしまったのである。しかも――

“彼が回復するまで、食事は『あゝん』させること。どうしても食べないようなら口移ししてください。あと、添い寝を命じられたら、おとなしく従うように。手を出されそうになったら、柔らかに断つてくださいね☆”

と、さとり様に笑顔で言われてしまい――自分に非がある負い目から断るわけにもいかず――そして、今に至る。

「これで僕が『添い寝してください』って言ってて、さとりさんが実行してたら、僕は死んでたかなあ……」

「……え！？ そそそそ添い寝!？」

『添い寝』という単語に反応し、耳まで真っ赤にして、お燐は舞い上がる。

「あ、いや、さとりさんが……『添い寝しましょうか?』って言うてきたんだよ。たぶん僕のトラウマを見てたからこそ、冗談だと思っけどね」

「にゃ、にゃんだあ……てっきりあたいへの命令かと……ああ、『添い寝』の一節はさとり様にやりの冗談か……苦手なの?」

「……うん。星さんに見つかってレーザーで焼かれたよ……僕は悪いことしてないのに……」

なんとなく、責められたような気分になり、尻尾をしゅんとさせるお燐。今回のことに関しても、彼は紛れもなく無罪である。

（お兄さん、怒ってはいないけど、気まずいにゃあ……ん？ 星？ 聞いたことあるような……）

霞がかかった記憶だが、どこかで聞き覚えのある人物の名に、お燐は首を傾げた。だいぶ前のことらしく、印象にも残ってないのか、なかなか思い出せない。

「あれ？ もしかして星さんを知ってるの?」

「わかんにゃい……他に誰かいた？　又聞きかもしれにゃい」

お燐は『直接会った記憶はない』のだが、客人の誰かがよく話していたような気がする。青年は視線を外し、中空をぼんやりと見ている。どうやら思い出してくれているようだ。

「聖さんとか、ナズーリンとか、村紗さんとか……あとぬえちゃん和一輪さんかな？　あそこで星さんと一緒にいたのは——」

「あ！　村紗と一輪はよく遊びに来てたよ！！　ぬえはお困り者だったけど……元気にしてた？」

懐かしい面々の名前に、お燐は歓喜の声を上げた。ここ最近訪ねてきていなかったものだから、少し気にはなっていたのだが……

「みんな元気にしてましたよ。知り合い？」

「そうにやるのかね？　さとり様のお友達で、一緒によく話をしてたよ。村紗は力の強い幽霊だったから、あたかもよく覚えてる。できればあたいの配下にしたかったにゃあ……」

努力の末に、怨霊を操れるようになったお燐だが、極稀に自分の力だけでは、怨霊を制御しきれなくなることがある。

その時は、自分に懐いている怨霊と共に鎮圧するのだが、村紗のように、力と意思の強い亡霊が補佐についてくれれば、制御が格段に楽になると思ったのだ。

結局のところ、「聖にまだ恩返しをしていないから……」と断られてしまったのだが。

「そうだったんですか……地上に帰ったら、伝えておきますね」

「にゃにゃ！？　そいつはありがたい！　みんなを連れて遊びにおいでと言っといてくれ！！　あの能力のせいで、さとり様は友達が少ないからにゃあ……」

「難儀ですよ……いやなモノを散々見てしまうのでしょう？」

沈痛な面持ちで、参真が顔を伏せるが——お燐は不敵に笑って見せた。

「そうだね。さとり様の悩みの種だけど……なら何で、第三の目をさとり様が閉じてにゃいかわかるかい？」

「……？ 『覚という妖怪であるため』だからじゃないんですか？」
「ノンノン！ それが違うのさ……確かに『負の感情』を直接見てしまうけど……同時に『正の感情』……例えば感謝とか、優しさとか——そういったものが見れなくなるのが惜しいから、さとり様は心を閉じたりしないのさ。」

ほんとはすごく優しい方だからね、さとり様は。でにゃきや、あたい達はあの御方について行ってにゃいだろうし、封印された直後の村紗と一輪の心を読んで、その場で一緒に泣いてあげたりしにゃいからね……」

しみじみと、お空が『なぜ第三の目を閉じないのか？』と聞いたときの事を、思い出す。あの時のさとり様は——表現するのが無粋なほど、綺麗だった。

「そっか……これは後で、さとりさんに謝らないといけないな……」
「うにゃ？ 特に悪いことはしてないんじゃない？」

なぜか青年は、深刻な表情を一層深くしてボソボソと呟く。

「……僕は、さとりさんの能力を聞いたとき、彼女に同情したんだけど……今話を聞いて、わかったんだ。」

僕には——『さとりさんの気持ち、絶対に理解できない』って。だから……同情なんてする資格は、なかったんだよ」

彼から紡がれたその言葉は——まるで懺悔の様な響きだった。

五十三話 意外な接点（後書き）

一輪&村紗と、地霊組は面識があるという設定です。

心優しいさとりんは、二人の聖への想いに胸を痛めたというお話。
イイハナシダナー

そして、お隣に看病とか羨まし過ぎるだろパルパル！ な、回に
しようとしたのに、最後シリアス入っちゃった……イイハナシダッ
タノニナー

五十四話 見える悪意 見えざる悪意（前書き）

うう、スランプ入ったか？ ちょっと更新ペースを下げます……

アイデアが天から降ってくるのを待つしかないんやな……

五十四話 見える悪意 見えざる悪意

暗鬱としたままの表情で、彼は俯いたまま小さく震える。

「急にどうしたってのさ？ さとり様から聞いたけど、『自然か不自然かを見分ける程度の能力』のせいで、酷い目にあったんだろう？ 心を読める、さとり様と同じように」

しかし、お隣にはその理由を理解できない。さとり様に、『彼がどうして幻想入りしたか』の経緯を聞いているし、近いモノを見ていると、さとり様本人も言っていた。

「ええ、でも『だからこそ』僕はさとりさんの気持ちちが、わからないんですよ……一応確認しておきますけど、さとりさんの能力は、『直接心を読む』能力ですよね？」

「??? あたいはそうだと思ってるよ？ で、参真は不自然かどうかを見ることで、相手の心情を読んで——」

「違うよ。僕は直接、相手の心を見てはいないんだ」
「え？」

お隣の言葉を遮って、青年が静かに語りだす。

「僕が見分けられるのは、人の場合、普段と違う動きや行動を認識できる。嘘をついたりする時は、どうしても不自然な動きが混じるから、僕はそれを見分けられるわけだ。

でも……人が不自然な動きをすることって、『嘘をつく時』だけとは限らないよね？」

「そりゃあ……そうだろうね。気分が悪かったりしても、不自然に——っつ！？」

そこまで自分で言って、ようやくお隣は二人の違いに気がついた。「気がついた？ 今はちよつと事情が変わったんだけど……当時は『自然体』しか定義できなかったからね。気分が悪かろうが、嘘をついていようが——視え方は変わらなかったんだ。

だから、本当に悪意があったかどうか？ ちよつとしたイタズラ心

でやっているのかを、見分けることが出来なかった」

思いだすように、懐かしむように、

「あの時の僕は……向こうで批判された僕は『不自然に見える人間が、全員僕のことを批判している』ように見えた。今にして思えば、全く関係なかったのかもしれないけど……それを見分ける手段を、僕は持っていなかった。

さとりさんの能力だったら、心を直接感じ取るわけだから、こんなことは起こらない。たぶんあの人は、『人の心がわからない』って恐怖は、上手く理解できないんじゃないかな」

彼は傷口から、溜めこんでいた毒を吐き出していく。

「どっちがより不幸なんだろうね？ 『直接負の感情を読みとってしまう』のと『不自然しかわからず、悪いことを想像する余地がある』のと……」

じっとお燐を見つめて、彼はそんなことを言う。

……もしかしたら青年は、答えが欲しいのかもしれない。

「あたいにゃ、わからにゃいよ。悪いけど、あたいは二人じゃにゃいから……」

目を逸らしながらも、お燐は本音を言うしかなかった。こんな話をした後で、嘘がつけるはずがない。

「あはは……そうだよね……ごめん」

儚げに笑って――それが誰が見ても作った笑顔と分かる笑顔浮かべて、彼は天井を見上げる。

……それからしばらく、二人は何も話さずに部屋にいた。

五十四話 見える悪意 見えざる悪意（後書き）

……やばい。シリアス過ぎてヤバイ。

当初はもう少しどんちゃん騒ぎやる予定だったのですが、地霊入ってからシリアスしかしてねー（汗
どどどどうしよう!？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4243u/>

ふらりと歩いて幻想入り

2011年11月14日21時05分発行